

西宮市

# 西宮神社社頭遺跡

## 発掘調査報告書

—(一)西宮港線電線共同溝整備事業に伴う発掘調査報告書—

平成23(2011)年3月

兵庫県教育委員会

西宮神社社頭遺跡

発掘調査報告書

兵庫県文化財調査報告  
第388冊

兵庫県教育委員会

西宮市

# 西宮神社社頭遺跡

## 発掘調査報告書

—(一)西宮港線電線共同溝整備事業に伴う発掘調査報告書—

平成23(2011)年3月

兵庫県教育委員会



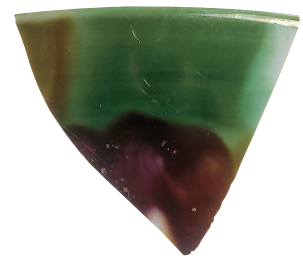
近代遺物（煉瓦・タイル・碁子・ガラス）



T3



T1



12 珉平焼三彩碗

# 例 言

1. 本書は西宮市社家町・本町・馬場町に所在する西宮神社社頭遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の発掘調査は（一）西宮港線電線共同溝整備事業に伴って平成17年度に実施した。なお、調査は当該事業の性格から事業実施時に工事立会の形で実施することとなった。調査は兵庫県阪神南  
県民局県土整備部西宮土木事務所の依頼を受け兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が職員を派遣して実施した。
3. 年度ごとの調査の概要及び担当者は後述のとおりである。また、本博物館における管理のための遺跡調査番号についても後述のとおりである。
4. 整理作業は平成21・22年度に兵庫県立考古博物館で実施した。
5. 遺物に付した番号は図版・写真図版などと統一を計った。また、土器・陶磁器については通し番号としたがタイル・煉瓦・碇子・碇子・ガラスについてはそれぞれ頭に煉瓦はB・タイルはT・碇子はI・ガラスはGを付し種類ごとの通し番号とした。
6. 遺構写真は各担当職員が撮影し、遺物写真については(株)谷口フォトに委託した。
7. 現地から採取した試料について、AMS法による放射性炭素年代測定を(株)パレホ・ラボに委託した。
8. 調査に際して使用した標高は東京湾平均海水準を基準にしている。
9. 本書の執筆は深井明比古（第4章第2節）・山上雅弘（第1～3章・第4章1節・第5章）が担当した。なお、このほか丸山真史氏から玉稿（付論）を賜った。
10. 本書掲載の第3・4図の作製にあたっては西宮市教育委員会 合田茂伸・森下真企が作製したものを山上が改変したものである。データに関しては西宮市教育委員会のご協力を頂いた。ただし、本書に掲載した図・表の文責は山上にある。
11. 本書にかかる遺物・図面・写真などの資料は兵庫県立考古博物館（兵庫県加古郡播磨町大中1丁目-1-1）において保管している。
12. 発掘調査および報告書作成にあたり、以下の方々のご指導・ご教示を頂いた。記して深く感謝の意を表します。

西宮市教育委員会 合田茂伸・同左 森下真企・大手前大学 中井淳史

# 本文目次

## 第1章 調査の経緯

- 第1節 現場調査の経緯 ..... 1
- 第2節 整理作業の経過 ..... 2

## 第2章 遺跡の環境

- 第1節 地理的環境 ..... 5
- 第2節 歴史的環境 ..... 5

## 第3章 調査の成果

- 第1節 遺構の概要
- 第2節 西側調査区に伴う調査 ..... 9
- 第3節 東側調査区に伴う調査 ..... 12
- 第4節 小結 ..... 21

## 第4章 出土遺物

- 第1節 弥生時代～近代の土器・陶磁器など ..... 22
- 第2節 近代以降のタイル・煉瓦など ..... 33

## 第5章 まとめ

## 付論

- 西宮神社社頭遺跡から出土した動物遺存体 ..... 49

## 挿図目次

第1図	遺跡の位置	第2図	昭和54年度調査区・公衆便所（北から）
第3図	西宮神社社頭遺跡調査地点位置図	第4図	西宮神社社頭遺跡の調査歴一覧表
第5図	恵比寿祭りで賑う本殿前（南から）	第6図	広田神社（南から）
第7図	周辺の遺跡	第8図	越水城跡石碑（東南から）
第9図	調査区全体図	第10図	東側調査区 北側平面図
第11図	T8～E11間断面図	第12図	E11～R10など断面図
第13図	E11・T7・R10・横断116～119平・断面図	第14図	東側調査区 南側平面図
第15図	E10～R10'管路・E10柵・連系18など平・断面図	第16図	E10～R10'管路・横断110～111区間・R10信号区間平・断面図
第17図	出土遺物 土器・陶磁器など1 磁器	第18図	出土遺物 土器・陶磁器など2 陶器・磁器
第19図	出土遺物 土器・陶磁器など3 陶器・磁器	第20図	出土遺物 土器・陶磁器など4 土師器・須恵器・瓦器
第21図	出土遺物 土器・陶磁器など5 土師器・陶器・磁器	第22図	出土遺物 土器・陶磁器など6 土師器・須恵器・瓦器・陶器
第23図	出土遺物 土器・陶磁器など7 土師器・陶器・磁器・瓦	第24図	出土遺物 鉄製品
第25図	確認調査	第26図	遺物観察表1
第27図	遺物観察表2	第28図	遺物観察表3
第29図	出土遺物 タイル・煉瓦など1 煉瓦一覧表	第30図	出土遺物 タイル・煉瓦など2 煉瓦実測図1
第31図	出土遺物 タイル・煉瓦など3 煉瓦実測図2	第32図	出土遺物 タイル・煉瓦など4 湿式タイル断面拡大写真
第33図	出土遺物 タイル・煉瓦など5 タイル一覧表	第34図	出土遺物 タイル・煉瓦など6 タイル実測図1
第35図	出土遺物 タイル・煉瓦など7 タイル実測図2	第36図	出土遺物 タイル・煉瓦など8 タイル実測図3
第37図	出土遺物 タイル・煉瓦など9 タイル裏面の社印等集成図	第38図	出土遺物 タイル・煉瓦など10 タイルの表文様及び裏型の全容
第39図	出土遺物 タイル・煉瓦など11 碇子・ガラス実測図	第40図	出土遺物 タイル・煉瓦など12 碇子一覧表
第41図	出土遺物 タイル・煉瓦など13 ガラス一覧表	第42図	出土遺物 タイル・煉瓦など14 タイル消長表

## 付論目次

第1表	種名表	第2表	貝類集計表
第1図	アカガイ計測部位	第2図	アカガイ殻高分布
第3図	SK21貝出土状況（E11上層・西から）	第4図	腹足綱
第5図	斧足綱		

## 巻頭図版目次

近代遺物（煉瓦・タイル・碇子・ガラス）・珉平焼（三彩碗）

## 写真図版目次

写真図版1	調査区周辺	写真図版2	調査区近景
写真図版3	西側調査区	写真図版4	東側調査区1
写真図版5	東側調査区2	写真図版6	東側調査区3
写真図版7	東側調査区4	写真図版8	東側調査区5
写真図版9	東側調査区6	写真図版10	東側調査区7
写真図版11	東側調査区8	写真図版12	出土遺物1
写真図版13	出土遺物2	写真図版14	出土遺物3
写真図版15	出土遺物4	写真図版16	出土遺物5
写真図版17	出土遺物6	写真図版18	出土遺物7
写真図版19	出土遺物8	写真図版20	出土遺物9
写真図版21	出土遺物10	写真図版22	出土遺物11
写真図版23	出土遺物12	写真図版24	出土遺物13
写真図版25	出土遺物14	写真図版26	出土遺物15



第1図 遺跡の位置

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 現場調査の経緯

### 事業経過

今回の発掘調査は兵庫県阪神南県民局西宮土木事務所（調査当時、兵庫県阪神南県民局県土整備部西宮土木事務所）が計画した（一）西宮港線電線共同溝整備事業に伴って実施した。この事業は一般県道西宮港線（通称「えべっさん筋」、以下「西宮港線」と呼称する。）の歩道部分に電線等を埋設するもので、西宮市社家町・本町・馬場町の範囲において実施された。

当該地周辺は、周知の埋蔵文化財包蔵地「西宮神社社頭遺跡」にあたることから、事前に平成15年～17年度にわたって確認調査が実施された。平成15年度調査（2003290）は一般県道西宮港線の東側歩道部分、平成16年度調査（2004241）は同西側、さらに、平成17年度調査（2005148）は西宮神社表大門周辺（通称、赤門）・本町筋周辺の確認を行った。その結果、事業地のうち西宮神社周辺において顕著な弥生時代から中近世におよぶ遺物包含層や遺構等が検出された。

この結果を受けて、事業地南側における工事に際して工事立会の必要が生じ、兵庫県阪神南県民局長より埋蔵文化財の状況について調査依頼が提出された。これに基づき、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（平成19年以降は兵庫県立考古博物館が調査を引き継いだ。）が工事立会を実施した。

調査に際しては事業区域が狭小であるため、工事掘削に合わせて工事立会を実施した。なお土層中に含まれる遺物の採集および土層断面の観察により堆積状況を写真等で記録した。

また、この事業で埋設する「柵」はコンクリートのプレキャスト製品。「管路」の名称で「T」管はN TTの金属管、「E」管は関西電力の塩化ビニール管、「R」管は警察や道路管理者等の関係で塩化ビニール製である。「連系」は当事業以外の柵等への接続管であり、「引込み」は当事業の管路から直接沿道利用管への引込み管で、「横断」は西宮港線車道を横断する管路敷設による工事を指している。今回調査区の名称はこれらの事業名称をそのまま使用している。各調査地点の呼称および位置図は第7図のとおりである。

今回の電線共同溝に伴う調査歴は下記のとおりである。（括弧内は当博物館の遺跡調査番号）

### 【確認調査】

平成15年度（2003290）	平成16年3月25日～29日（実働3日間）	面積17.5㎡	山上雅弘
平成16年度（2004241）	平成16年11月24日～25日（実働2日間）	面積16㎡	中川渉・柏原正民
平成17年度（2005148）	平成17年8月29日～31日（実働3日間）	面積18.5㎡	山上雅弘

### 【工事立会】

平成17年度（2005173）	平成17年10月12日～平成18年1月30日（実働18日間）	面積225㎡	深井明比古・村上泰樹・山上雅弘
-----------------	--------------------------------	--------	-----------------

### 西宮神社社頭遺跡の調査経過

本遺跡の名称は西宮市史編纂のために行われた宮水調査の報告によって、「西宮神社社頭遺跡」・「西宮神社表門遺跡」と記述されたことに由来する。これまでの考古学的な調査は50数次を数え、昭和54年度調査（6月28日～7月5日）などにおいて大きな成果を上げている。昭和54年度調査は西宮神社境内地



発掘調査調査団が実施したもので神社境内地南東隅（第2・3・9図参照）の公衆便所敷地について実施された。また、この前後に当該地の開発が集中したために市教委では立会調査を数次に渡って行っている。①西宮市社家町1番地点（西宮神社境内・境内地石畳・シメ柱工事に伴う）、②西宮市本町79-2～6地点、（昭和54年8月）、③西宮市本町63-1地点（国道43号線に面した地点）、④西宮市本町51-1・2地点などの調査である。そしてこれらの立会調査でも古墳時代および中世の遺物・遺構が検出されている。このほか、考古学的な資料としては境内付近から採取された遺物が、西宮市立図書館伝蔵資料として同図書館に保管されている。また、これらの調査成果については「西宮神社境内地発掘調査報告書」（西宮市教委2005）に詳細に報告がなされた。その上で同報告書では上記の成果や周辺の微地形、歴史的な経過などを参考にしながら本遺跡の範囲を推定している。このほか、考古学的な調査ではないが、大練塀の修理工事の際に宋銭3枚と洪武通宝（1368初鑄）が出土したという（西宮市教委1985）。

その後についても第3図の通り市教委において多数の開発に伴う調査が行われている。ただこれらの調査においては遺物の出土はあるが、遺構面や遺構が確認できた事例には乏しいようである。ただし、遺物の分布範囲や今回の電線共同溝の確認調査などの成果を勘案すると、遺跡の広がりには神社東側に延びる砂堆地形と関わる事が明らかで、前掲報告書の遺跡範囲が現在でも有効であることが確認された。今後は良好な調査事例の蓄積が待たれるところである。

## 第2節 整理作業の経過

整理作業は平成21・22年度の2か年間にわたって実施した。

平成21年度は遺物接合・鉄器処理などを行い、22年度は遺物実測・製図・遺物写真撮影などの整理作業を実施し、報告書を刊行した。

### 整理作業の体制

整理作業については以下の体制で実施した。

- |         |  |
|---------|--|
| 接合・復元   | 眞子ふさ恵（主任技術員）・三好綾子（企画技術員）・<br>谷脇里奈（図化技術員）・宮野正子（同左）      |
| 金属器保存処理 | 長濱重美（企画技術員）・前田恵梨子（図化補助技術員）                             |
| 実測・トレース | 宮田麻子（主任技術員）・矢木加奈子（企画技術員）・<br>西村美緒（図化技術員）・柴田妃三光（日々雇用職員） |



第2図 昭和54年度調査区・公衆便所（北から）



調査番号	所在地	調査概要	遺物年代等	調査原因	予備調査開始	調査種別	調査対象面積	調査面積 (0は立会含む)	調査主体者	調査担当者
351	社家町1 (西宮神社境内)	報告書 各説掲載(1)分(文化財資料第26号p.103) 掘削深度:G.L.-0.4~0.5m.厚0.1mの遺物包含層。古墳時代須恵器、中世後期以降の土器・瓦出土。瓦当:唐草・青海波・巴。	古墳・鎌倉・室町	境内改修(石畳・シメ柱改修)工事	1979/7/1~7/31	試掘	800	800	西宮市教育委員会	古川久雄
353	本町79-2,3,4,5,6 (国道43号沿)	報告書掲載立会調査(4)(文化財資料第26号p.107) 掘削深度:G.L.-0.8m.遺物包含は両者に分離。黄褐色砂層(かく乱・中世以降)、下層は褐色砂層(古墳時代前期・G.L.-0.4~0.6m)。古墳時代前期土器(庄内一連含む)、中世中期~末土器。	古墳・鎌倉・室町	商業ビル3階建て	1979/8/10~8/31	立会	200	200	西宮市教育委員会	古川久雄
354	本町63-1	報告書立会調査掲載分(5)(文化財資料第26号p.110) 掘削深度不明。掘削上げ土より中世後期~末土器等。	室町	ガソリンスタンド	1979/9/1~9/30	立会	400	400	西宮市教育委員会	古川久雄
355	本町51-1,51-2	報告書立会調査掲載分(6)(文化財資料第26号p.111) 掘削深度:G.L.-2~2.5m.かく乱か、明確な遺物包含層はなし。中世後期後半~末土器、陶器、青磁焼出土。	室町	商業ビル建設4階建	1979/9/1~9/30	立会	150	150	西宮市教育委員会	古川久雄
392	馬場町51-1	表土下、黒色シルト層を主体とする。遺物・包含層・遺構は検出されず。	—	店舗、事務所付き共同住宅	1995/5/25	確認	394.28	14.82	西宮市教育委員会	合田茂伸 西川卓志
356	本町12-18	トレンチ2箇所。G.L.-0.75mまで現代盛土、以下淡黄灰色砂層(=G.L.-1.0m) 遺物包含せず。	—	店舗付き住居	1995/11/6	確認	118.84	17.6	西宮市教育委員会	合田茂伸
358	戸田町53-1, 52-4の一部	G.L.-1.2mまでは、現代盛土。G.L.-2.2mまでは砂層。遺物は検出されなかった。	—	店舗付き住宅	1996/9/13	確認	326.42	5	西宮市教育委員会	西川卓志
359	馬場町56-1,-2,-3,-4, -5,57-1,57-2	試掘坑1:標高1.1m付近(G.L.-1.5m 付近)において、遺物包含層=褐色砂層より14~15世紀の陶器・土師器・瓦器の小破片を検出した。試掘坑2:ヘドロ状堆積。	室町	店舗付共同住宅	1997/4/8~4/9	確認	793.37	9	西宮市教育委員会	合田茂伸
363	社家町1-1地先	G.L.-0.72m~-1.1m+の範囲には、遺物包含層となる暗黄褐色砂質土層が検出されなかった。すでに削平されたか遺物包含層が存在しないと考えられる。	—	国道43号震災路面復旧工事	1997/7/3	確認	0	2	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所	種定淳介
362	社家町1-1,1-2,9-6	G.L.-1.5m付近(標高0.8m付近)以下に暗青灰色シルト層が堆積している。遺物は確認されなかった。	—	共同住宅(SRC11階建)	1997/7/15	確認	672.18	0	西宮市教育委員会	合田茂伸
366	馬場町39番1の一部, 39番2	G.L.-0.7mまで掘削。掘削範囲はすべて視乱層。遺物検出されず。	—	個人専用住宅	1998/2/2	確認	140.13	4	西宮市教育委員会	西川卓志
365	馬場町58-1,58-2, 58-3,59-1	表土層は地盤改良のため攪乱を受けている。G.L.-1.5m以下に青灰色粘土層が堆積している。遺物は検出されなかった。	—	共同住宅	1998/3/2	確認	408.48	9	西宮市教育委員会	西川卓志
368	戸田町24-1,24-2	遺構:検出されず。遺物:検出されず。	—	共同住宅	1998/6/29	確認	619.85	8.75	西宮市教育委員会	西川卓志
378	馬場町24-3	遺構:検出されず。遺物:G.L.-1.7地点、土器細片(時期不明)	中世?	集合住宅	1998/7/23	確認	267.65	8	西宮市教育委員会	西川卓志
379	馬場町38	工事実施。遺構:検出されず。遺物:G.L.-0.7m地点、土器細片(時期不明)	中世?	被災店舗の建替	1998/7/24	確認	0	4	西宮市教育委員会	西川卓志
367	田中町3番69番外	遺構:検出されず。遺物:検出されず。	—	都市再開発事業	1999/3/8~3/9	確認	5000	15	西宮市教育委員会	西川卓志
346	馬場町43-2外	遺構:検出されず。遺物:検出されず。	—	共同住宅建設	1999/11/2	確認	0	15.75	西宮市教育委員会	合田茂伸
292	馬場町48-4	慎重工事。遺構:検出されず。遺物:G.L.-0.7m地点、須恵器片(中世か?)	中世?	共同住宅建設	2002/11/20	試掘	797.68	18.75	西宮市教育委員会	合田茂伸
293	今在家町25-3	遺構:検出されず。遺物:検出されず。	—	共同住宅	2003/1/15	試掘	157.8	6	西宮市教育委員会	合田茂伸
265	馬場町6番1	慎重工事。遺構:検出されず。遺物:検出されず。	—	住宅	2003/5/7~5/8	確認	596.21	21	西宮市教育委員会	合田茂伸
296	本町6-16 (住居表示6-7)	立会調査。遺構:検出されず。遺物:検出されず。	—	給油所地下タンク撤去工事	2004/1/24	立会	0	0	西宮市教育委員会	合田茂伸
102	馬場町、田中町	北端部と南端部において埋蔵文化財の所在が確認されている。南端部は西宮神社前。遺構:検出されず。遺物:土師器皿・瓦器片(中世、G.L.-1.6m地点)	中世	(一)西宮港線電線共同溝工事	2004/3/25	確認 (県300320)	0	17.5	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所	山上雅弘
247	田中町60-2	遺構:検出されず。遺物:G.L.-1.5地点、土師器片(時期不明)、無釉陶器片(近世)。	中世~?	共同住宅	2004/8/19	立会	1371.03	8	西宮市教育委員会	合田茂伸
203	戸田町32番、39番1 (住:5-30)	遺構:検出されず。遺物:検出されず。	—	共同住宅	2005/1/27	確認	1817.42	8	西宮市教育委員会	合田茂伸
2	馬場町19-3	試掘調査の結果計画変更? 遺構:検出されず。遺物:土器細片(時期不明、G.L.-2.0m)	中世?	共同住宅	2005/4/26	確認	254.45	9	西宮市教育委員会	合田茂伸
4	馬場町41-3	試掘調査。遺構:検出されず。遺物:検出されず。	—	共同住宅	2005/5/10	分布	169.33	6	西宮市教育委員会	合田茂伸
11	馬場町35-2	遺構:検出されず。遺物:検出されず。	—	共同住宅	2005/5/25	分布	860.96	9	西宮市教育委員会	合田茂伸
9	馬場町45-1	遺構:検出されず。遺物:土器細片(時期不明)	中世?	共同住宅建設	2005/6/14	分布	723.42	18	西宮市教育委員会	合田茂伸
36	社家町	遺構:検出されず。遺物:検出されず。	—	(一)西宮港線電線共同溝整備事業	2004/11/24~11/25	確認 (県300241)	0	16	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所	中川 渉 柏原正民
37	本町・馬場町	遺構:検出されず。遺物:検出されず。	—	(一)西宮港線電線共同溝整備事業	2005/8/29~8/31	確認 (県300548)	0	18.5	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所	山上雅弘
44	馬場町9-3,9-7	遺構:検出されず。遺物:検出されず。	—	共同住宅	2006/3/9	確認	148.75	6	西宮市教育委員会	合田茂伸
58	社家町(西宮神社)	遺構:検出されず。遺物:検出されず。	—	電話線埋設	2006/4/6~4/13	立会	27.5	27.5	西宮市教育委員会	合田茂伸
59	社家町(西宮神社)	工事立会調査:遺構・遺物:検出されず。	—	電力線埋設	2006/4/6	立会	27.5	27.5	西宮市教育委員会	合田茂伸
88	馬場町26番1号	遺構:検出されず。遺物:検出されず。	—	店舗付住宅	2006/11/28	確認	172.02	4	西宮市教育委員会	合田茂伸
89	馬場町4-4(住=1-11)	遺構:検出されず。遺物:検出されず。	砂堆北端	共同住宅	2006/12/5	確認	226.15	7.5	西宮市教育委員会	合田茂伸
94	馬場町42-2,42-4	遺構:検出されず。遺物:検出されず。	—	住宅兼店舗	2009/1/20	確認	174.1	4	西宮市教育委員会	合田茂伸
221	社家町11番地	遺構:検出されず。遺物:検出されず。	—	その他建物(折構)	2009/11/17~11/18	確認	453.26	6.75	西宮市教育委員会	西川卓志
233	戸田町54-2	遺構:検出されず。遺物:検出されず。	—	事務所・車庫兼住宅	2010/7/20	立会	205.78	4.5	西宮市教育委員会	合田茂伸
323	産所町97,98-1,98-2	遺構:検出されず。遺物:G.L.-2.0m地点、土器細片(時期不明)	中世?	店舗付き住宅	2010/7/20	確認	365.19	6	西宮市教育委員会	森下真央
25	本町63番1,66番2	ガソリンスタンドとして既存建物等が所在。慎重工事実施。遺構:検出されず。遺物:検出されず。	—	共同住宅	2005/11/1	立会	233.08	0	西宮市教育委員会	合田茂伸
98	馬場町52-2	5月確認調査>延期の模様? 確認調査結果は?	—	共同住宅	—	確認	0	0	西宮市教育委員会	?
107	馬場町35-5(地番)	遺構:検出されず。遺物:検出されず。	—	個人住宅・店舗	2006/5/25	立会	0	0	西宮市教育委員会	合田茂伸
158	社家町1番17号	遺構:検出されず。遺物:検出されず。	—	既存消火栓の改良工事	2007/3/17	立会	26.3	26.3	西宮市教育委員会	西川卓志 合田茂伸
171	本町5番、12番	遺構:検出されず。遺物:検出されず。	—	上下水道の布設工事	2008/8/11	立会	0	0	西宮市教育委員会	合田茂伸
216	馬場町4-28~1-2	同一場所でのガス管の更新であるため、工事立会、遺構:検出されず。遺物:検出されず。	—	埋設ガス管の更新	2009/11/1	立会	0	0	西宮市教育委員会	合田茂伸
264	馬場町28番1	工事立会調査。遺構・遺物なし。	—	住宅改築	2010/8/6	立会	0	0	西宮市教育委員会	合田茂伸
352	社家町1 (国道43号沿い東南角)	報告書所収立会調査(3)(文化財資料第26号p.105) 中世土器。古墳時代前期土器、土錘。図書館蔵、市史第1巻p.342写真掲載。	古墳・中世	(ガス、水道管理設工事)	1939年	立会	500	500	西宮市教育委員会	田岡香逸
357	馬場町5番2	工事立会調査。遺構・遺物確認されず。	—	個人専用住宅	1997/1/20	立会	133.72	0	西宮市教育委員会	合田茂伸
360	本町82-4	遺構:検出されず。遺物:検出されず。	—	個人専用住宅	1998/1/15	立会	49.49	0	西宮市教育委員会	合田茂伸
361	馬場町37番	遺構:検出されず。遺物:検出されず。	—	個人専用住宅	1998/3/1	立会	0	0	西宮市教育委員会	合田茂伸
364	社家町11番地	工事立会 土器小片	中世?	事務所	1996/2/8	立会	1309.21	0	西宮市教育委員会	合田茂伸

調査箇所	所在地	調査概要	遺物年代等	調査原因	調査期間	調査種別	調査面積	本発掘調査主体者	本発掘調査担当者
393	社家町1番	古墳時代前期、平安末~中世期の土器など多数出土。遺構は検出されず。	古墳・平安末?室町	屋外便所の建設	1979/6/28~7/5	本発掘調査	40	西宮神社境内地発掘調査団	武藤 誠
58 59	本町・社家町・馬場町	古墳時代前期、平安末~中世期の土器、柱穴・土坑などの遺構を多数検出。	古墳・平安末?室町	(一)西宮港線電線共同溝整備事業	2005/10/12~2006/1/30	工事立会 (県2005173)	225	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所	深井明比古 村上泰樹 山上雅弘

第4図 西宮神社社遺跡の調査歴一覧表

## 第2章 歴史・地理的環境

### 第1節 地理的環境

中世以来、西摂の港湾都市として栄えた西宮は六甲山地の東南麓部に位置し、東の尼崎（川尻）、西の兵庫津とともに瀬戸内海航路の要港であった。さらに近世以後は上方海運の港湾となるが、酒蔵業の発展とともに都市として大きな位置を占めた。中世以前の西宮には現市域の東側に「武庫の入江」と呼ばれた入江が存在し、港湾としての発展を促す上で有利な地形を有していた。この入江は西宮神社の東側に延びる砂堆東端から湾入し、広田社の南前方まで広がっていたといわれ、現市域平野部の広い範囲を占めていたと考えられている。しかし、近世には埋没したようで現在ではその姿を垣間見ることはできない。

一方、西宮には西国街道（山陽道）が「武庫の入江」を大きく迂回して通り、西国に通じており、海運とともに陸路においても要衝であった。このように海陸の結節点であり、大規模な入江が良港としての地形を提供したことが、西宮を早くから発展させる要因となった。

### 第2節 歴史的景観

#### 周辺の遺跡

西宮市域における弥生時代は前期の越水山遺跡（34）・甲風園遺跡（8）が知られるが、これらは北背後の丘陵上に立地しており、前期・中期の段階では海岸部には今のところ見つかっていない。海岸部では後期の段階になってようやく甲子園口遺跡（7）と西宮神社社頭遺跡（1）の2遺跡が知られる。古墳時代は中期の津門稲荷山古墳・満地谷暮地内が知られるが、後期の群集墳は主としてやはり丘陵上に分布するようである。

また、市域では近年調査が進められている高畑町遺跡で古墳時代後期の竪穴住居跡や、平安時代中期の掘立柱建物などが検出され、北口町遺跡でも弥生前期の溝や中世の掘立柱建物が検出され、わずかではあるが集落遺跡の成果が蓄積されている。

ただし、西宮市域の海岸部ではこれまで大規模な発掘調査がなく、この地域の様相については不明な部分が多い。この意味では西宮神社社頭遺跡の調査は西宮市域海浜の遺跡として貴重な成果となった。

一方、西宮神社社頭遺跡周辺の周知の遺跡としては「武庫の入江」の東側対岸に立地した津門稲荷町9遺跡、津門稲荷山古墳、津門東芝遺跡、津門大塚山古墳などがある。海岸部において遺跡が立地できる安定した場所は地形的には西宮神社周辺がもっとも有力であるが、上記の遺跡の立地からすると対岸にも有力な場所が存在した可能性が考えられる。

西宮神社周辺の調査では西宮神社社頭遺跡のほか石在町銅銭出土地が知られている。同出土銭は昭和49年9月17日、石在町の国道43号線南側の歩道で下水道工事を行っていたところ発見されたもので、重機による下水溝掘削中に発見された。最古銭が開元寶（初鑄621年）、最新銭が宣徳通寶（初鑄1433年）で、銭種72種類、計19,803枚が出土した。銭貨には中国・朝鮮・安南（ベトナム）のものが含まれた。埋納容器は証言によれば長さ40cmの木箱といわれている。銭貨の埋納時期は15～16世紀頃と推定されている。

#### 歴史的経過

西宮周辺は古代から津門などの地名が示すように港湾として知られてきた。古墳時代には阿知使主が

応神天皇の命で呉国から招来させた職工女らが武庫に上陸した際（「日本書紀」応神天皇三七年条・四一年条）に、角の松原（現、松原神社）の松に船を係留したという伝承が残される。またこの周辺は武庫の入江が深く湾入したことで知られており、万葉集には武庫の浦（泊・海）や名次山・角（津努）の松原などが読まれ、港湾とともに景勝地として知られていた。

西宮神社については大治3年（1128）に南宮歌合が門妙社で行われ、承安2年（1172）に広田社歌合に西宮の夷神がみえるなど、平安後期頃から存在が知られる。ただし、承久5年（1194）の記事には「広田末社戎社」として紹介されており、当時の西宮神社は広田神社の末社南宮神社の1隅に存在した小祠であったという。広田神社は平安期に貴族層などからも信仰を集め、摂津の有力社の位置を占めた西宮の中心的な社であった。一方、西宮神社は、かつては広田神社の末社であった南宮社境内の戎社（ただし、元々戎社ではないとの異説もある。）として知られていたが、戎信仰の流行とともに信仰を集め、中・近世を通じて全国的に知られる神社となったといわれる。

西宮が経済的な活動を行った場所であることを示す史料としては貞応2年（1223）摂津国内の諸庄・市において地頭・神人以下の濫妨を停止し、檜物の交易を行わせることを命じた（「藏人所課案」東洋文庫蔵弁官補任紙背文書）ものや、「西宮最中」の南宮敷地内に市庭があり津料を徴収した事などがあげられる。また、奈良東大寺が兵庫関の漏船（脱税船）対策として広田社領の西宮に新関を設置しようとしたことから訴訟沙汰が起こっている（「吉田家日次記」）。さらに、町が存在した記事としては延徳2年（応安4・1371）の西宮大火の記事があげられる。この火災は地下番匠の自焼逐電が原因と噂され、約800軒が焼失したといい、中世の早い時期に多くの人家が存在したことが窺われる。

嘉吉元年（1441）頃には西宮の旨酒が知られ、近世以後の酒蔵業勃興の起源と見られている。また、文安元～2年（1444～5）の兵庫北関入船納帳には多数の西宮の船舶が兵庫北関に入津していたことが記され、応仁2年（1468）に「摂津州西宮津尉長塩備中守源吉光」が朝鮮に使節を派遣しており、海運業者の成長や貿易港としての存在が窺える。

ただし、西宮とされる場所は前述のように六甲山麓の広田社から海岸部の西宮神社周辺まで広い範囲に及ぶ。中世に入り西宮神社周辺が経済的な発展を見たことを示すものとしては、例えば市場祭文（延文6年1361武州文書）に「西のはまのゑひすの三郎殿のはまの市」と詠まれ、全国的に知られた市場であったことがあげられる。市場（市庭）では広田社の支配下で魚介類の売買なども行われていたが（貞和二年一〇月日「広田神官等陳状安」広田社旧記）、室町時代には多様な商品の売買が見られる。このことから西宮の戎社を核として海岸部に都市的な場の発展がみられたことが指摘されている。



第5図 恵比寿祭りで賑う本殿前（南から）



第6図 広田神社（南から）



- |               |                 |                 |
|---------------|-----------------|-----------------|
| 1. 西宮神社社頭遺跡   | 9. 津門稻荷町遺跡      | 16. 広田遺跡No 2 地点 |
| 2. 神楽町遺跡      | 10. 津門稻荷町 9 遺跡  | 17. 広田遺跡No 1 地点 |
| 3. 石在町銅銭出土地   | 11. 大塚山古墳       | 18. 具足塚古墳       |
| 4. 浜町本蔵遺跡     | 12. 津門王箇町遺跡     | 19. 高松町遺跡       |
| 5. 王子ヶ遺跡      | 13. 越水山遺跡・越水城跡  | 20. 高畑町遺跡       |
| 6. 西宮砲台 (国指定) | 14. 越木岩遺跡       | 21. 甲風園遺跡       |
| 7. 津門東芝遺跡     | 15. 広田遺跡No 3 地点 | 22. 北口町遺跡       |
| 8. 津門稻荷山古墳    |                 |                 |

第7図 周辺の遺跡

一方、永正年間（1504～1520）には広田神社の西側、越水の丘陵上に瓦林正頼が越水城を築城し、三好長慶も一時拠点を置くなどした。これによって城郭膝下には大規模な城下町が登場している（浅岡俊夫1985）。この時期、戎社を核とする海岸部の都市的な場と、城下町がどのような関係にあったかは不明であるが、戦国時代には2つの核が存在した可能性がある。

ただ、戦国時代に至っても『如意庵過去帳』では永正10年（1513）に屋号を持った商人とされる西宮町人の名がみえ、周辺の国人や寺院・町衆などにより西宮神社に連歌を奉納する「西宮千句講中」が結成（永正壱八年五月一二日「川原林幸綱契状案」・年末未詳六月一七日「松永久秀奉書案」岡本文書）されるなど都市としての繁栄が維持されていることがわかる。戦国時代末期には永禄12年（1569）織田信長が眼阿弥に西蓮寺住持職を安堵するが、天正5年（1577）信長家臣の滝川一益が伊丹城から乱入し、「一谷迄悉放火畢」を行っている。しかし、信長は同8年3月日付の禁制（西宮神社文書）で西宮における軍勢の乱暴狼藉を禁じており、町の統制について注意を注いでいたことが窺える。



第8図 越水城跡石碑（東南から）

江戸時代に入ると元和3年（1617）に戸田氏鉄が尼崎に入封し西宮も尼崎藩領となっている。この時、市域北部の六甲山東麓では、花崗岩露頭石の産出地が大坂城築城石の石切り場となった。その後、寛永12年（1635）戸田氏は美濃大垣へ転封し、篠山から青山氏が、宝永8年（1711）には続いて松平忠喬が入封するなど領主が変遷する。しかし、明和6年（1769）に兵庫津とともに西宮は幕府（大坂城代）に上知され、以後は明治時代まで天領に組み込まれている。これは、幕府が西宮や兵庫の経済的な価値に注目した結果と思われる。藩政時代の西宮には現戸田町に「西宮陣屋」が置かれ、上知ののちは陣屋を改築して「西宮勤番所」が設けられている。一方、産業面では宝永元年（1704）に西宮港から酒荷の江戸表廻漕がはじまり、この頃より酒蔵業による繁栄がはじまっている。

幕末の文久3年（1863）には勝海舟らが西宮・今津に砲台設置を決定し、慶応3年（1867）には長州藩兵1千余人が西宮を経由して上洛するなど、時代の流れを受けて重要港湾を巡る動きが目立っている。

西宮の人口は享保元年（1716）7000人余り、明和6年（1769）9776人と江戸中期まで増加をたどるがその後は微減となったようである。最大の町は浜東町で2000人を超えていたという。明治2年の西宮町・浜の合計は家数1671軒、人数は男3301人、女3605人、合計7207人であった。

ただし、近世の西宮では調査地点周辺が門前町として大きな核を形成したと考えられるが、酒蔵業など町の主要産業の生産現場は海岸側に移動したようで、浜方の台頭が目立ったようである。

#### （参考文献）

- 西宮市 1959・1960『西宮市史』第1・2巻 魚澄惣五郎編
- 西宮市教育委員会 1982『西宮神社境内地発掘調査報告書』
- 西宮市教育委員会 1982『西宮市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表（文化財資料第二十三号）』
- 西宮市教育委員会 1994『石在町出土銭と公智神社出土銭』
- 西宮市立郷土資料館 2009『よみがえる江戸時代の西宮—西宮町のすがた—』
- 神戸市立博物館 2004『よみがえる兵庫津—港湾都市の命脈をたどる—』
- 平凡社1999『兵庫県の地名Ⅰ 日本歴史地名大系29Ⅰ』
- 浅岡俊夫 1985「越水城跡」『日本城郭大系第12巻』

## 第3章 調査の成果

### 第1節 遺構の概要

今回の調査の対象範囲は、南北に走る一般県道西宮港線の東西両側の歩道部分、および一部車道にかかる電線共同溝に伴う掘削範囲である。調査に当たっては掘削範囲が限られることや、工事施工時の立会調査という点から、作業面で制約を受けざるを得なかった。特に柵設置個所以外の管路部分は、面調査を充分に行えなかった箇所が多い。さらに、各作業範囲は事業単位に掘削を行うため、図面作成や写真撮影などが細分された作業とならざるを得なかった。この他、事業地は通行量の多い車道において実施されていることから、開削した範囲は即日埋戻しまでの工程を行わなければならなかった。このため立会調査は柵・管の設置前の時間を活用して行っている。

なお、調査区は県道を挟んだ両側の歩道に分かれるため、西側調査区及び東側調査区に分けて報告を行った。また、報告は事業の作業単位ごとに名称を付して行っているためやや複雑なものとなっているが、上記の作業状況であることを勘案いただきご容赦願いたい。

### 第2節 西側調査区に伴う調査

一般県道西宮港線の西側歩道部分の調査である。調査区の範囲は西宮神社境内に隣接する地区である。特に、南側の表大門周辺は昭和54年度調査・西宮市史による調査などによって顕著な成果が見られた。

#### R1' 柵および以北管路（第9図・写真図版3参照）

工事の掘削深度内を調査したが、既存の管路掘削等により自然堆積層は見られなかった。

#### 横断116～119以西（第9図・写真図版3参照）

工事の掘削深度内を調査したが、既存の下水管掘削等により自然堆積層は見られなかった。

#### R1 柵（第9図・写真図版3参照）

R1 柵の掘削に伴い立会を行った。調査範囲は長さ1.5m、幅1mである。土層は上層から埋設管の埋め戻し土が充填され、堆積土は観察できなかった。また、出土遺物も確認できなかった。このため、掘削は攪乱の深度内におさまったものと考えられ、上記のR1' 柵および以北管路地点と同様と考えられる。

#### 西側道路照明①（第9図・写真図版3参照）

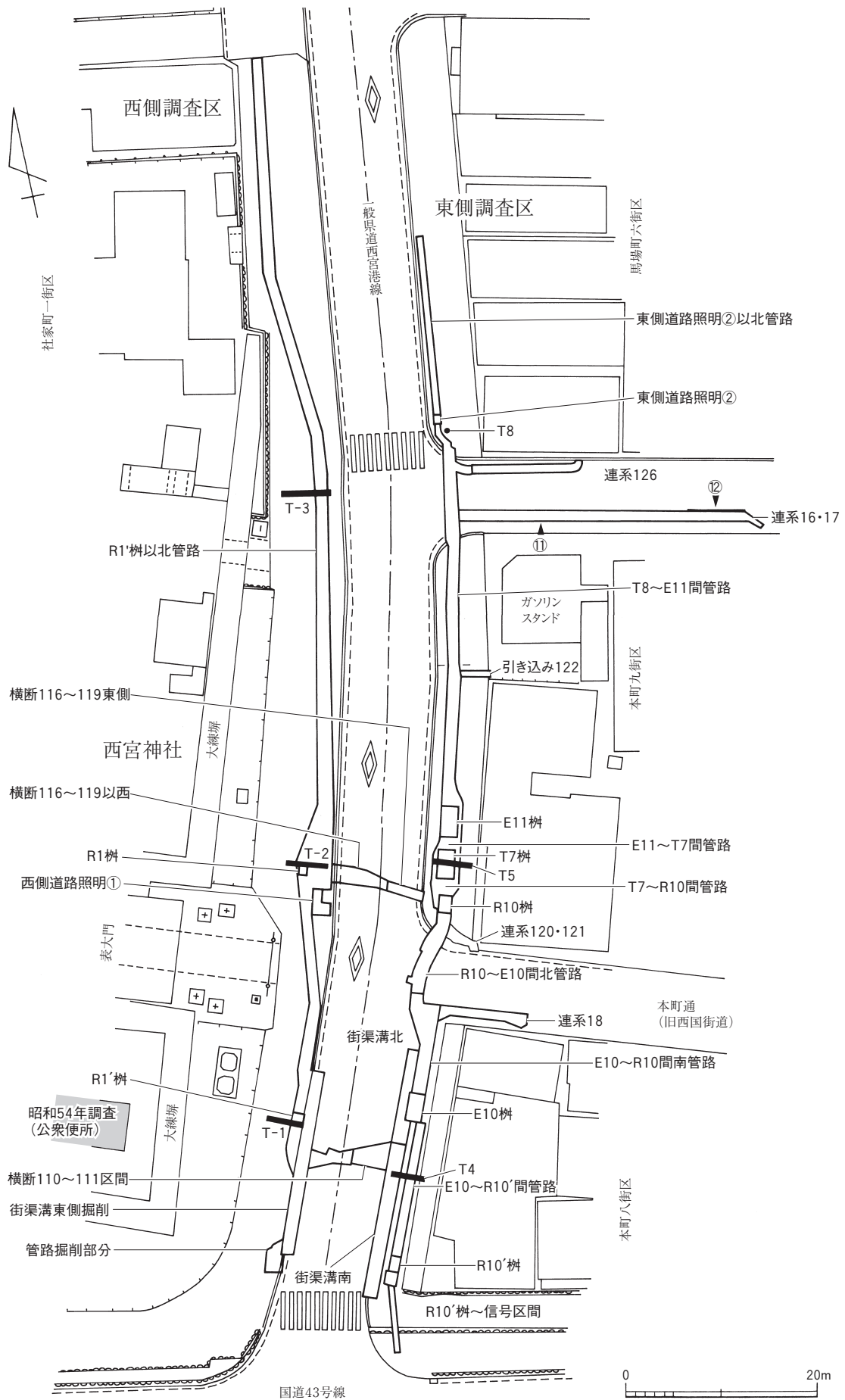
R1 柵南東の西側道路照明灯の設置に際して基礎部分掘削に伴い立会を行った。調査範囲は基礎部分の掘削範囲とR1 柵からの管路掘削部である。

土層はG.L. -70cmまでが1層灰黄色極粗砂（攪乱）、G.L. -155cmまでが2層黄褐色極粗砂（遺物包含）、G.L. -155cm以下は3層黄色極粗砂（ベース）となる。出土遺物は1層から近代以降の陶器片、2層から弥生後期の甕胴部細片（未掲載）、中世の土師器片、近世以降の瓦片（112）、時期不明のアカガイ（赤貝）と考えられる二枚貝が出土した。なお、この地点は表大手門の東15m、大練堀の東10mに位置することから、これらの建造物や周辺町屋との関連性も考えられよう。

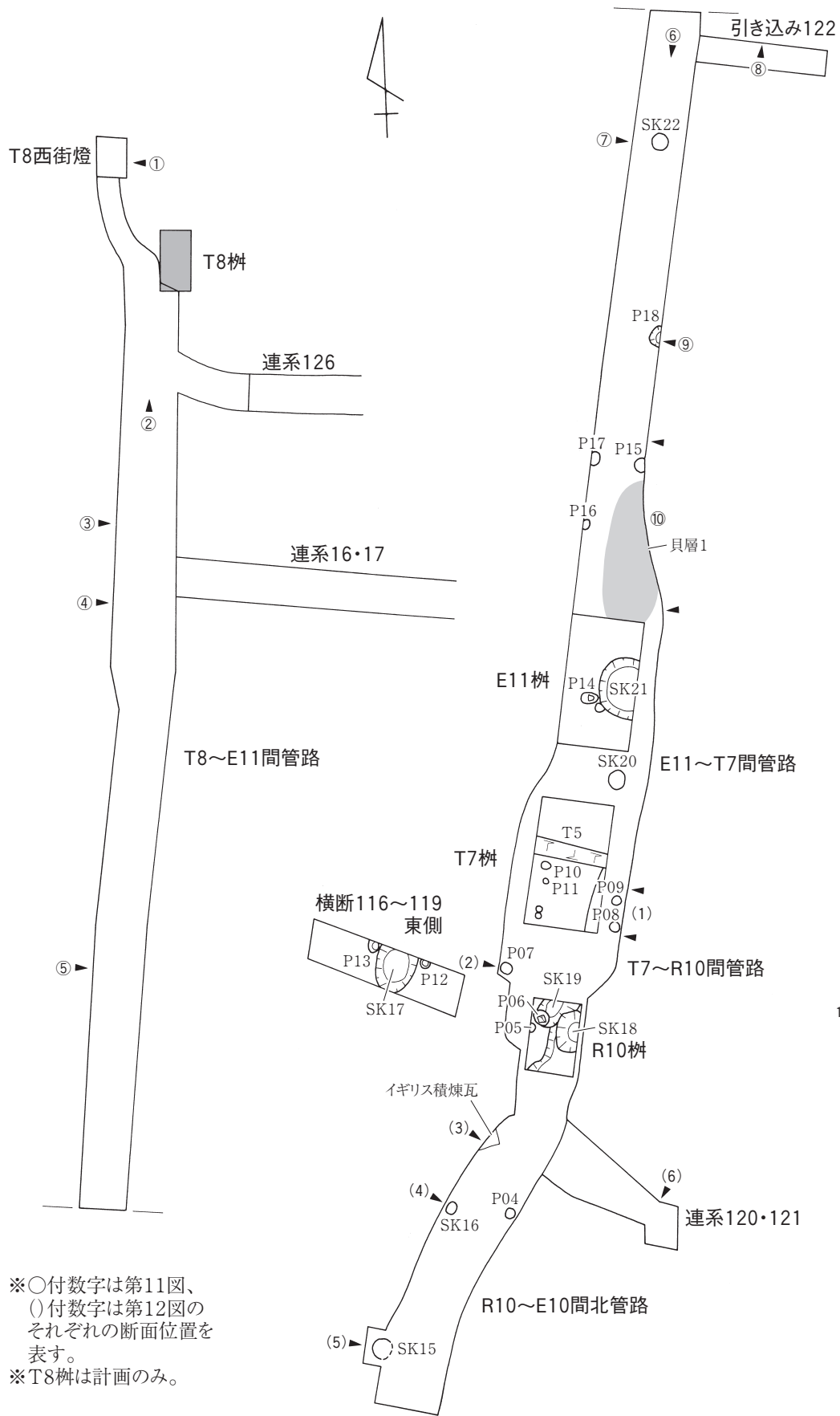
#### 管路掘削部分（第9図・写真図版3参照）

この調査区は戎町歩道橋下部にあたる。この地区はガス管等の既設管によって攪乱を受け、掘削深度内では遺構は確認できなかった。ただし攪乱土内より中国産白磁や土師器鍋（未掲載）が出土している。また、宮水調査に伴う調査では周辺の調査が行われ遺構面の残存を確認すると共に中世の遺物が出土して





第9図 調査区全体図



※○付数字は第11図、  
 ()付数字は第12図の  
 それぞれの断面位置を  
 表す。  
 ※T8樹は計画のみ。

第10図 東側調査区 北側平面図

いる。このため周辺に中世遺構が残存する可能性は高いと考えられる。

#### 街渠溝東側掘削（第9図・写真図版3参照）

この調査区は戎町歩道橋沿いにあたる。掘削深度内を調査したが、既存の下水管掘削等により攪乱され自然堆積層は見られなかった。なお、既存掘削内で煉瓦等が出土した。

### 第3節 東側調査区に伴う調査

一般県道西宮港線の東側歩道部分の調査である。調査区の範囲は西宮神社参道である本町筋から北側につながる範囲である。なお、本報文中のT8柵（設置計画位置は第10図参照）は計画のみで実際には設置されなかった。調査時点では隣接地をT8～E11管路と呼称するなど、調査地区名称にT8が使用されているがこれらはすべて設計図上のT8柵からの距離を示したものである。

#### 東側道路照明②以北管路（第9図参照）

掘削深度内を調査したが、既存の管路掘削等により自然堆積層は見られなかった。

#### 東側道路照明②（第10図・写真図版4・5参照）

東側道路照明②では近世遺物が見られたが、明確な中世包含層は検出されなかった。

#### T8～E11間管路（第10・11図参照）

T8～E11間管路は調査区北端から南へ延長35m前後の地区である。この区間では市道との交差点で近世～近代遺物が出土したが、それ以前の明確な包含層は検出されていない。断面①の3層暗灰色粗砂層、断面②の5～7層・灰色～灰黄色粗砂層、断面③の4・5層褐灰色細砂層などは砂堆の堆積層と考えられるが上層の旧表土は失われていた。地形的には南側から北側に向かって低く、砂堆地形の北斜面にあたる。

ガソリンスタンド（連系16・17と引込み122の区間、第9図参照）西側付近は下水道掘方によって攪乱されるが、この区間の北端では旧建物基礎のコンクリートを検出した。これは戦後、西宮港線の道路拡幅に伴って建物を撤去した基礎部分と推測される。

T8の南26m地点付近から南方にかけてはタイルが目立って出土した。中には淡陶(株)製の裏型Gの可能性のあるものや、OSAKAやJAPANの型が見られた。OSAKAは大阪窯業製の可能性が高い。

T8南31.5mでは地表下1.0cm付近で、黄褐色の中世包含層を確認した。さらに包含層の下部では東壁でP18を検出し、内部からは多くの土器が出土している。これらは13世紀頃を中心とするものである。

T8南34.5m～38.5mでは中世の貝層2（貝の浅い堆積の広がり）やP15（土師器細片などを含む）などを検出した。この貝層2はE11柵で検出した貝土坑であるSK21に近接しており、一連のもの可能性が高い。

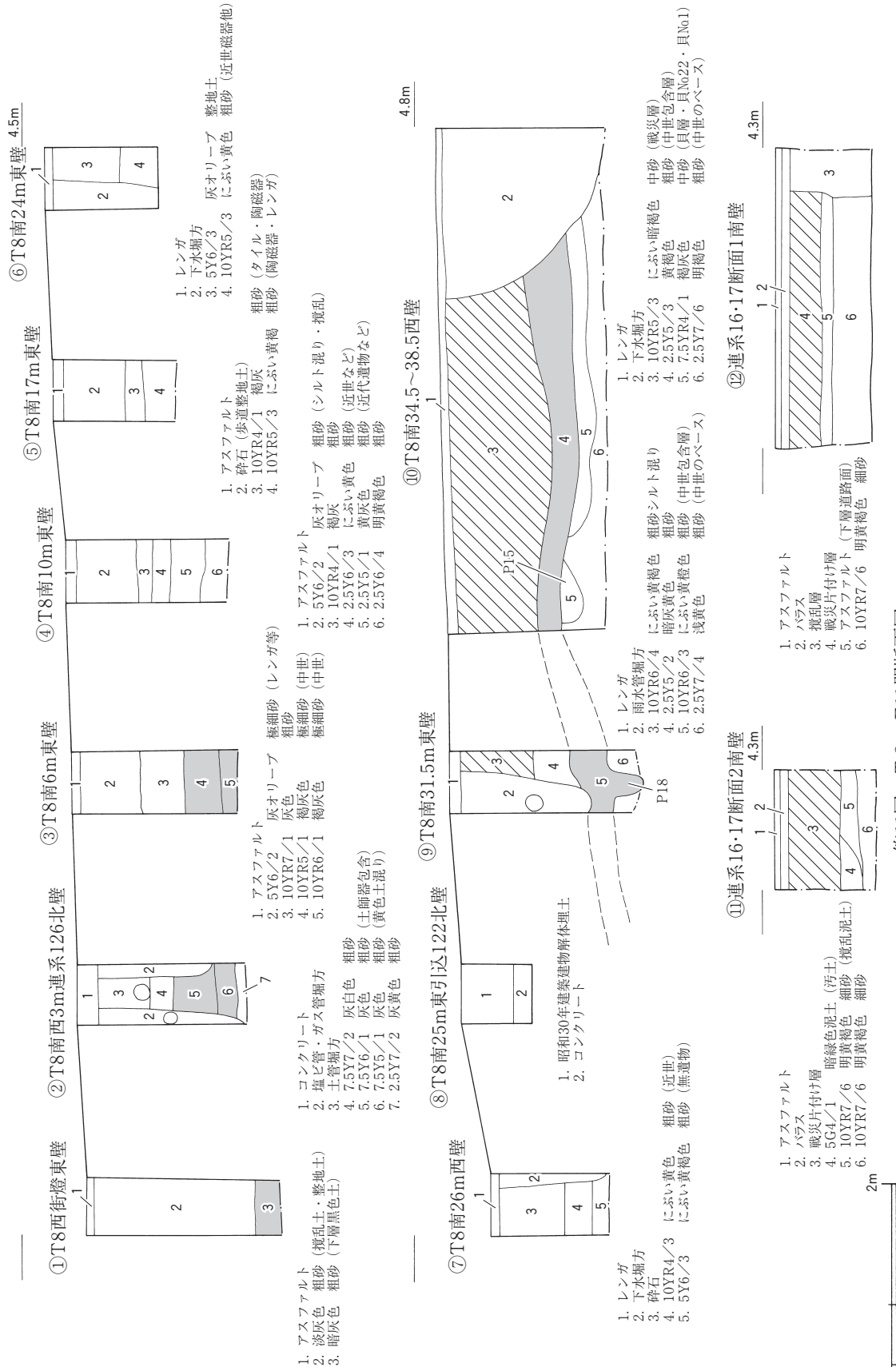
#### 連系126（第9図・写真図版4参照）

連系126ではT8から東の市道に曲がる地点においての土層を確認した。地表下0.8cmにて中世と考えられる包含層を検出した。旧国道から離れているにもかかわらず、色調は淡くなるが浅い深度で中世包含層が存在する。ベースになる面は地表下1.0m程度と考えられる。東側は既存の水道管掘削内に重なるため攪乱されていた。

#### 連系16・17（第9・11図・写真図版5参照）

T8南に接続する東側の市道への連系地区である。道路の北側は連系126となる。

調査区の標高は4.2m前後、掘削深度は東端で1m前後、その他は80～90cm前後である。地形的には南



第11図 T8～E11間断面図

側の本町筋からは70cm前後下がることとなる。

基本層序はアスファルト・バラス層の直下に戦災層が認められた。この戦災層は高温の被熱を受けた土砂あるいは瓦礫が30~40cm堆積し、下層には明黄褐色細砂層が堆積するが、明確な中世包含層は確認されなかった。遺物は戦災層周辺から近世遺物が出土し、明黄褐色細砂層から中世の土師器皿（28）と時期不明の土師器壺（29）が出土した。

引込み122（第10・11図・写真図版4参照）

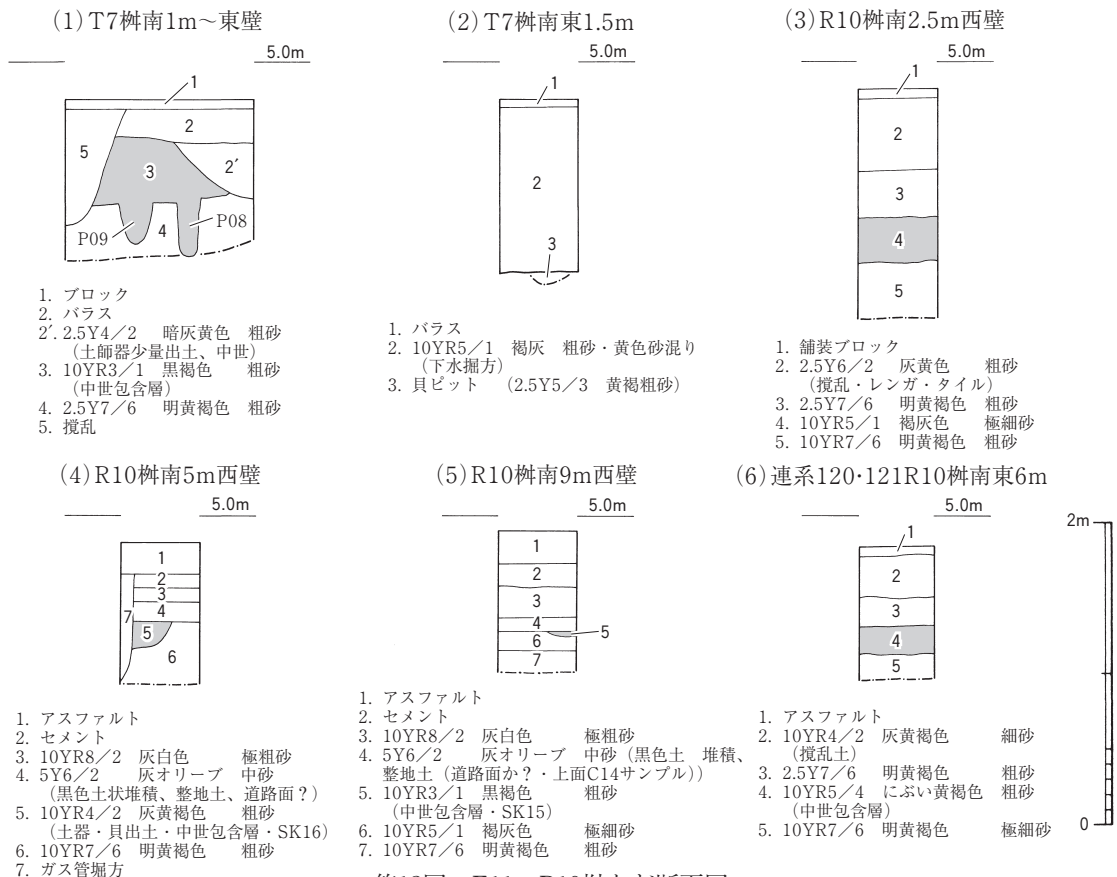
T 8 南25m地点にて東に延びる引込み122を掘削した。管堀方の掘削は50cm程度と浅かったものの、近世後半の染付鉢（27）が出土した。これらはいずれも昭和30年代に西宮港線が拡張した際に、解体されたコンクリート基礎を埋め立てた中から出土したものである。

E11柵（第13図・写真図版7参照）

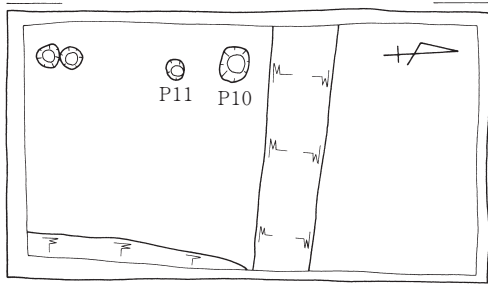
E11柵は部分的に現代の攪乱を受けているが5層明黄褐色粗砂層上面で中世土坑SK21を検出した。SK21からはアカガイ・トリガイ・アカニシなどの貝類が堆積して検出され、合わせて土師器・瓦器（未図化）が出土している。近辺には柱穴も検出されP14内からは土師器細片が出土している。5層上層にはもともと3層黒褐色粗砂が表土として堆積していたが、周辺では上層の攪乱のために部分的に残されるのみであった。また、下層の6層褐灰色極細砂も旧表土層と考えられる。

T 7 柵（第13図・写真図版6参照）

T 7 柵では調査区中央に確認調査時のトレンチ5が掘削されている。さらに、近代の攪乱土坑からはレンガとともに湿式タイルが出土した。これは確認調査時(T 5 トレンチ)から出土したものと同一である。

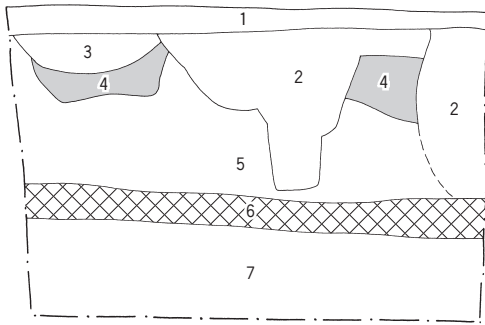


T7樹



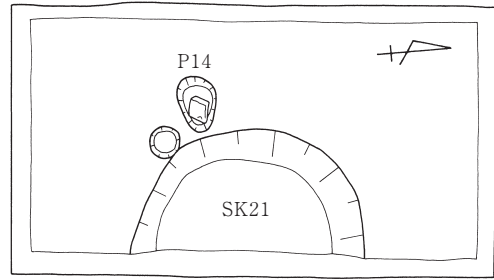
西壁

4.9m



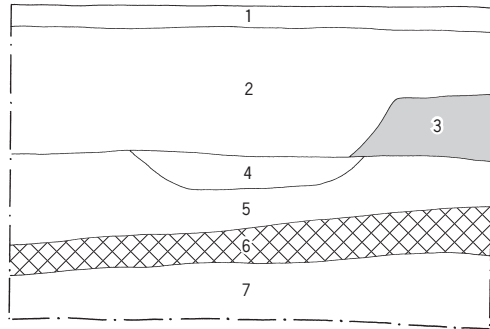
1. 2.5Y6/2 灰黄色 粗砂 (攪乱・レンガ・タイル)
2. 攪乱 (T5トレンチ)
3. 2.5Y6/2 灰黄色 粗砂 (攪乱・レンガ・タイル)
4. 10YR3/1 黒褐色 粗砂 (中世包含層)
5. 2.5Y7/6 明黄褐色 粗砂
6. 10YR5/1 褐灰色 極細砂 (E11樹6層より暗色)
7. 10YR7/6 明黄褐色 粗砂

E11樹



東壁

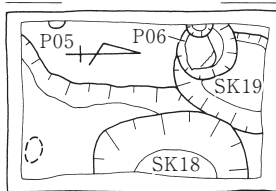
4.7m



1. 舗装ブロック
2. 2.5Y6/2 灰黄色 粗砂 (攪乱・レンガ・タイル)
3. 10YR3/1 黒褐色 粗砂 (中世包含層)
4. 10YR4/1 褐灰色 粗砂 (SK21埋土、貝出土、土師器、瓦)
5. 2.5Y7/6 明黄褐色 粗砂
6. 10YR5/1 褐灰色 極細砂
7. 10YR7/6 明黄褐色 粗砂

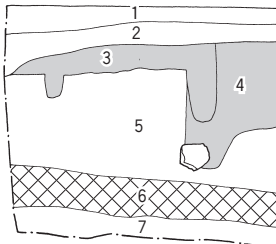
R10樹

横断116~119

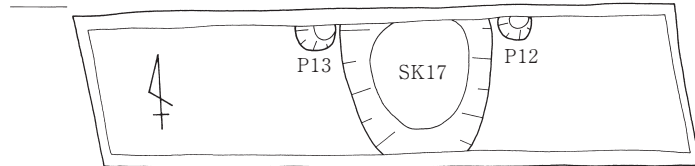


西壁

5.0m

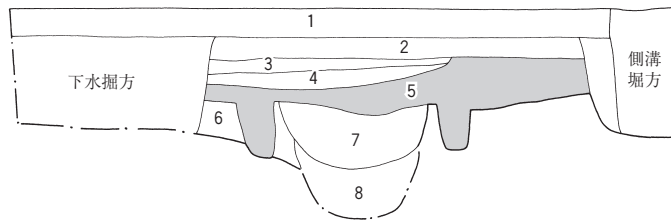


1. 舗装ブロック
2. 2.5Y6/2 灰黄色 粗砂 (攪乱・レンガ・タイル)
3. 10YR3/1 黒褐色 粗砂 (中世包含層)
4. 10YR3/1 褐灰色 粗砂 (SK19埋土、貝出土、中世包含層)
5. 2.5Y7/6 明黄褐色 粗砂
6. 10YR5/1 褐灰色 極細砂 (下層包含層)
7. 10YR7/6 明黄褐色 粗砂

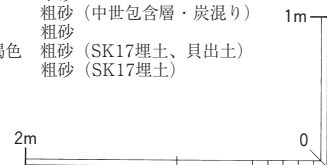


南壁

4.9m



1. コンクリート
2. 碎石
3. 10YR5/2 灰黄褐色 中砂
4. 2.5Y7/3 浅黄色 中砂
5. 10YR3/1 黒褐色 粗砂 (中世包含層・炭混り)
6. 2.5Y7/6 明黄褐色 粗砂
7. 10YR4/3 にぶい黄褐色 粗砂 (SK17埋土、貝出土)
8. 2.5Y7/6 明黄褐色 粗砂 (SK17埋土)



第13図 E11・T7・R10・横断 116~119 平・断面図

5層上面ではP10・11を検出した。P10からは土師器小皿(70)・瓦質土器羽釜(71)が出土した。

この他、5層からは弥生後期～古墳時代初頭の壺(78)が出土した。ただし、壁の崩落が著しくこれらの遺物が遺構内出土かどうかは不明である。この他、攪乱層からは近世磁器(76・77)が出土している。

#### R10柵(第13図・写真図版7参照)

R10柵はG.L.-20cm前後で3層黒褐色粗砂(中世包含層)が確認され中世の土坑(SK18・19)、柱穴(P05・06)などを検出した。さらにP06には底に根石を据える。小規模な調査区であるがこれらの遺構に伴う土器も出土しており、周辺は(E11柵～E10柵の範囲)遺跡の中心をなす場所である可能性が高い。地形的にも3層上面で4.7m前後と、周辺では最も高い場所に位置し、砂堆の頂部に位置する可能性が高い。

#### E11～T7間管路(第10・12図・写真図版6参照)

E11～T7管路部分では中世の貝集積土坑であるSK20が検出された。北側の貝層1・E11柵SK21などととも周辺には貝の廃棄土坑が集中する。

#### T7～R10間管路(第10・12図・写真図版6参照)

T7～R10間管路では西壁で中世のP07が検出された。埋土は黒色砂層で底部には根石を据えている。内部からは須恵器・土師器が出土した。同じく東壁ではP08・09(第8図断面(1))が検出されている。

#### R10～E10間北管路(第10・12図・写真図版6・7参照)

本町筋の現道路面から歩道にかけての範囲でR10柵から南へ10mの範囲である。北側で掘削深度0.9m、南側で1.4mである。周辺の標高はこの付近の最頂部を測るもので、4.8m前後である。

表土下70～80cmは攪乱が著しい。北側で道路面(表土下30～60cm)を検出し、南側で黒褐色土層の遺物包含層を検出した。層中からは弥生時代後期～古墳時代初頭の甕(83・84)・製塩土器(82)・貝類などが出土した。このほか、出土位置の詳細は不明であるが近世の磁器碗(85)が出土している。

#### E10～R10間南管路(断面c～c'・d～d'・第14・15図・写真図版9参照)

E10柵からR10柵間の南側管路部分である。同区間では、1層上面で近代～現代の遺物を包蔵する土坑、2層上面で近世の土坑、3層(砂層)上面で柱穴をそれぞれ土層断面の観察で確認した。また3層下より土壌化層(旧地表)を確認している。

遺構は調査区の南端で近世の土坑、北半部で近世土坑、柱穴を検出した。遺物は北端の近世土坑より多量の貝殻、瓦、陶器片などが出土した。

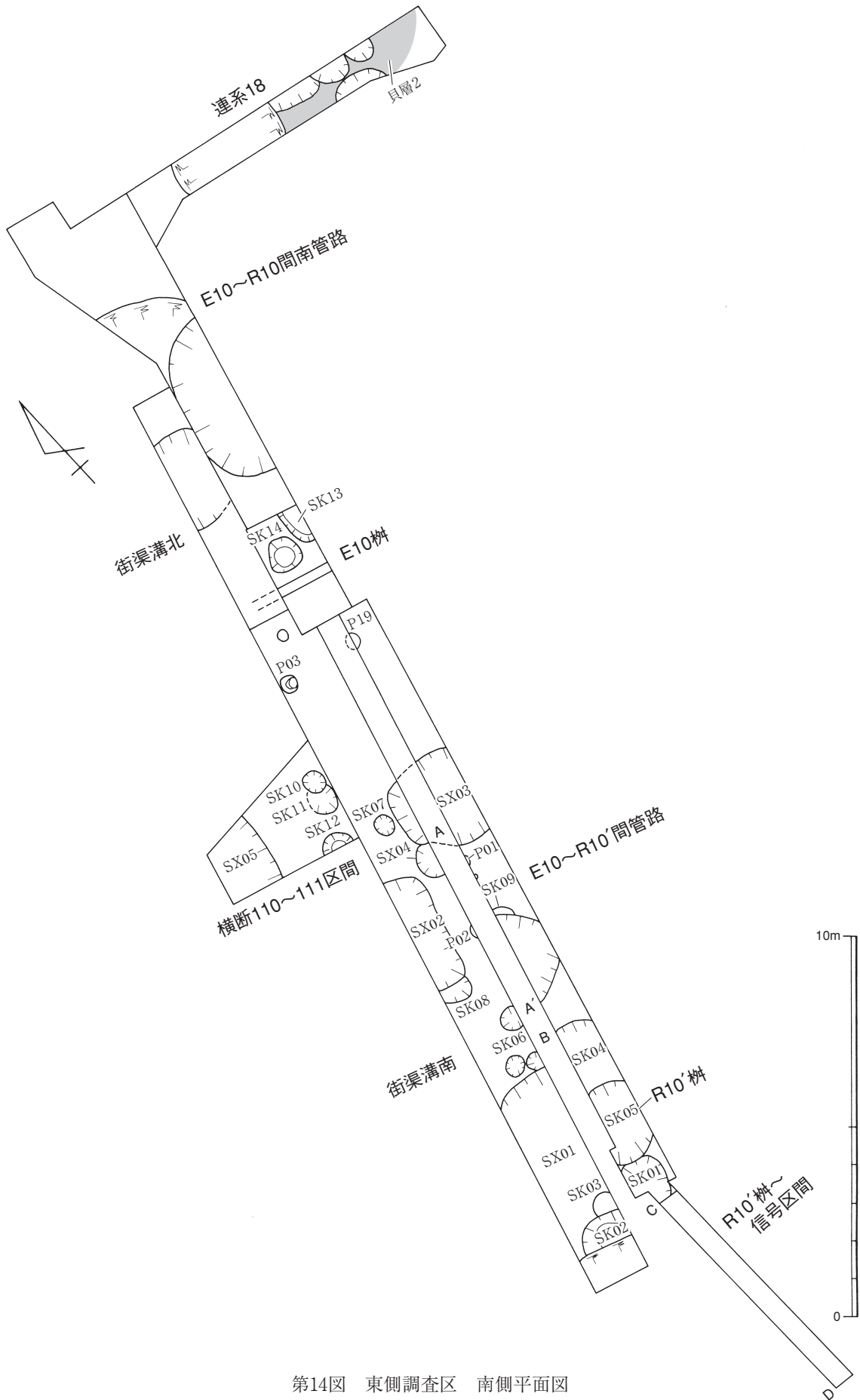
#### 連系120・121(第10・12図・写真図版6参照)

R10柵の南西に曲がる地点である。個人住宅南西隅で僅かに自然堆積が確認された。地表下-50cmで4層の下層包含層対応層が確認されたが出土遺物はなかった。周辺では浅いレベルで中世包含層が検出される。その他の箇所は大半が従前の掘削で攪乱されていた。

#### 横断116～119東側(第13図・写真図版8参照)

横断116～119東側の掘削はR10柵から西に道路を横断する管路で、このうちの東側に相当する。東側縁石から1.8～2.7mまでの範囲である。地表下0.6mにおいて5層下部の中世のSK17が検出され、道路下にも遺構が存在することが確認できた。SK17は北壁では90cm、南壁では60cmの幅があり、7層において一面に貝の集積が認められた。厚さは最大で40cmにもおよぶ。土坑底は全掘できていないが、部分的な掘削によって検出面から60cm前後まで下がることを確認できた。

出土遺物は土師器、須恵器鉢などの細片がある。その他、土坑底からはやや扁平な石材が出土した。



第14図 東側調査区 南側平面図



柱穴 (P12・13) はSK17の東西に近接して検出されたもので、特に貝の集積は見あたらないが、土師器等の小片が出土している。また、本地点の東端は下水の掘方により大きく掘削されるが、中世遺構が検出され遺構面が遺存した意義は大きい。

#### E10柵 (第15図・写真図版9参照)

本地点は柵の掘削に伴うものであるが、E10柵北側の断面 (断面A-A') では2面の包含層を検出した。ただ、本地点は中央に既存の管理設のための掘削坑があり、南半分は攪乱されていた。このため、遺構が遺存する範囲は北側のわずかな部分であった。

上層の包含層は3層黒褐色粗砂で厚さ10cm前後堆積する。この直下からはSK13・14が検出された。これらの土坑からは中世の土師器皿 (90) が出土しているため、中世のものと考えられる。ほかにも3層黒褐色粗砂周辺からは土師器鍋 (88)・瓦器碗 (89) が出土した。また、同層には近世段階の攪乱が著しいが、層中から丹波焼播鉢 (91) も出土している。このことからすると同層は近世段階まで地表であった可能性が高い。その他、出土遺物には和釘 (F1) がある。

下層の包含層は地表下0.5~1m前後の3層の明褐色粗砂層である。層中には弥生後期の甕 (92・95)・台付鉢 (93)・高杯 (94) を包含するが遺構は検出できなかった。現地表の標高は4.8m前後、掘削深度は標高3.2m前後である。

#### 連系18 (断面a~a'・b~b'、第15図・写真図版8参照)

調査地点は旧西国街道にあたる。掘削深度は東側でG.L. -1.1m、西側でG.L. -1.0m、現地表は標高4.9mを測る。上層は広く攪乱を受けるが、東端 (断面a~a') で旧道の道路面と道路の盛土 (6~8層) を確認し、貝層2 (下層の9層黒褐色細~中砂層) からはアカガイ・トリガイなどの貝類のほか、中世の土師器小皿 (86) が出土した。他に、調査区内からは肥前系磁器碗 (85・87) が出土している。道路の盛土層は数回の変遷を経るもので、地盤を硬化させていた。時期的には近世から近代に至るものと考えられる。

また、僅かに旧堆積層を残す断面b~b'層でも貝を含む土層が観察されたが攪乱が著しい。このことから旧地形が残されているならば、周辺にも広く中世包含層が存在したと考えられる。

#### 街渠溝北 (第14・15図・写真図版11参照)

本地点はE10柵の西道路際の調査区である。柱穴底部には礎板石が置かれていた。遺物は柱穴内より土師器皿片が出土している。

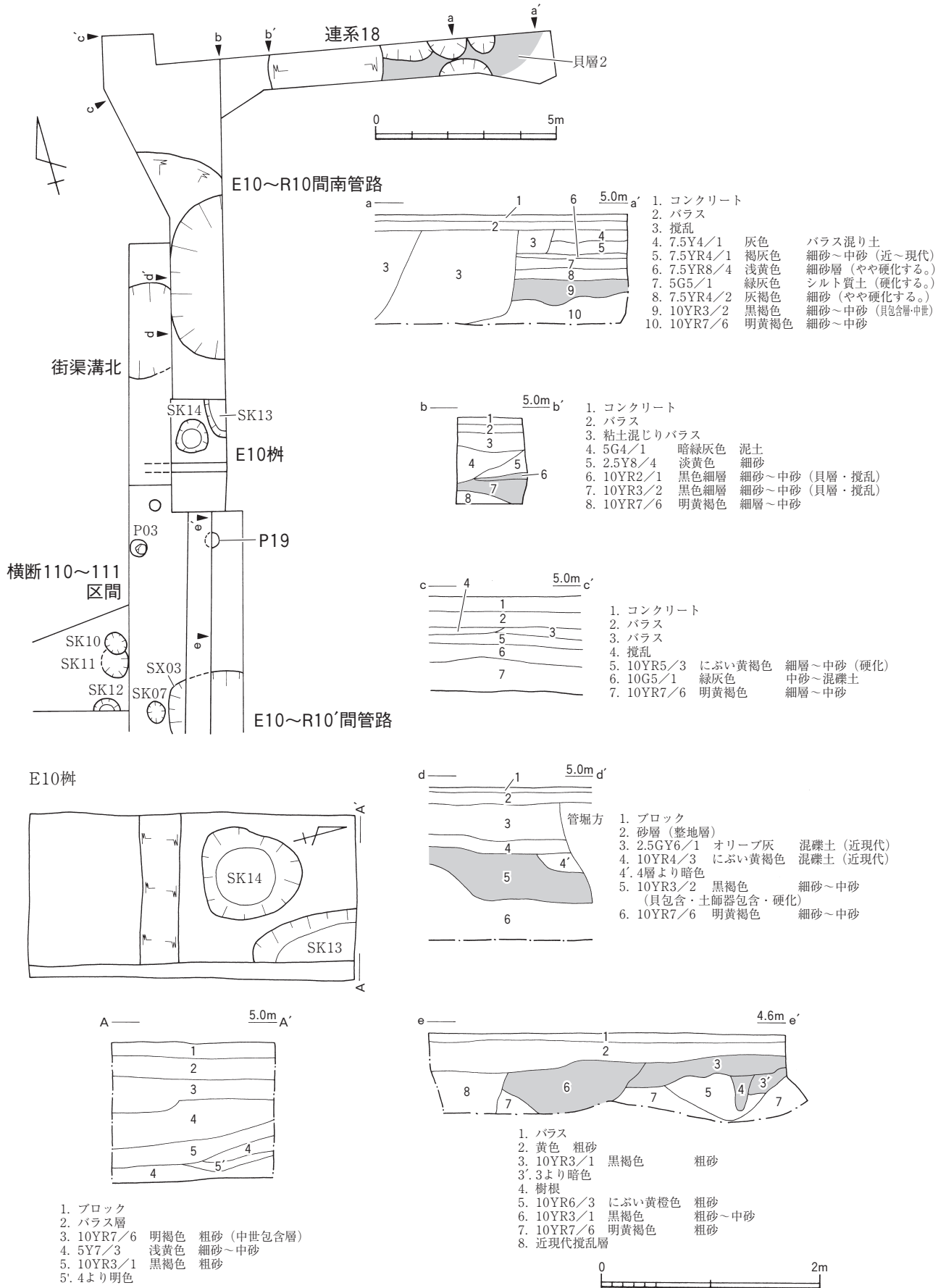
#### 街渠溝南 (第14・16図・写真図版11参照)

この地区はE10柵・街渠溝の南側の道路際の調査区である。南端部の一部は工事により攪乱されていたが、ほぼ全域で近世土坑 (SK02・08、SX01・02・03他) と中世の柱穴 (P2・3)・土坑 (SK03・06・07、SX04) が確認された。

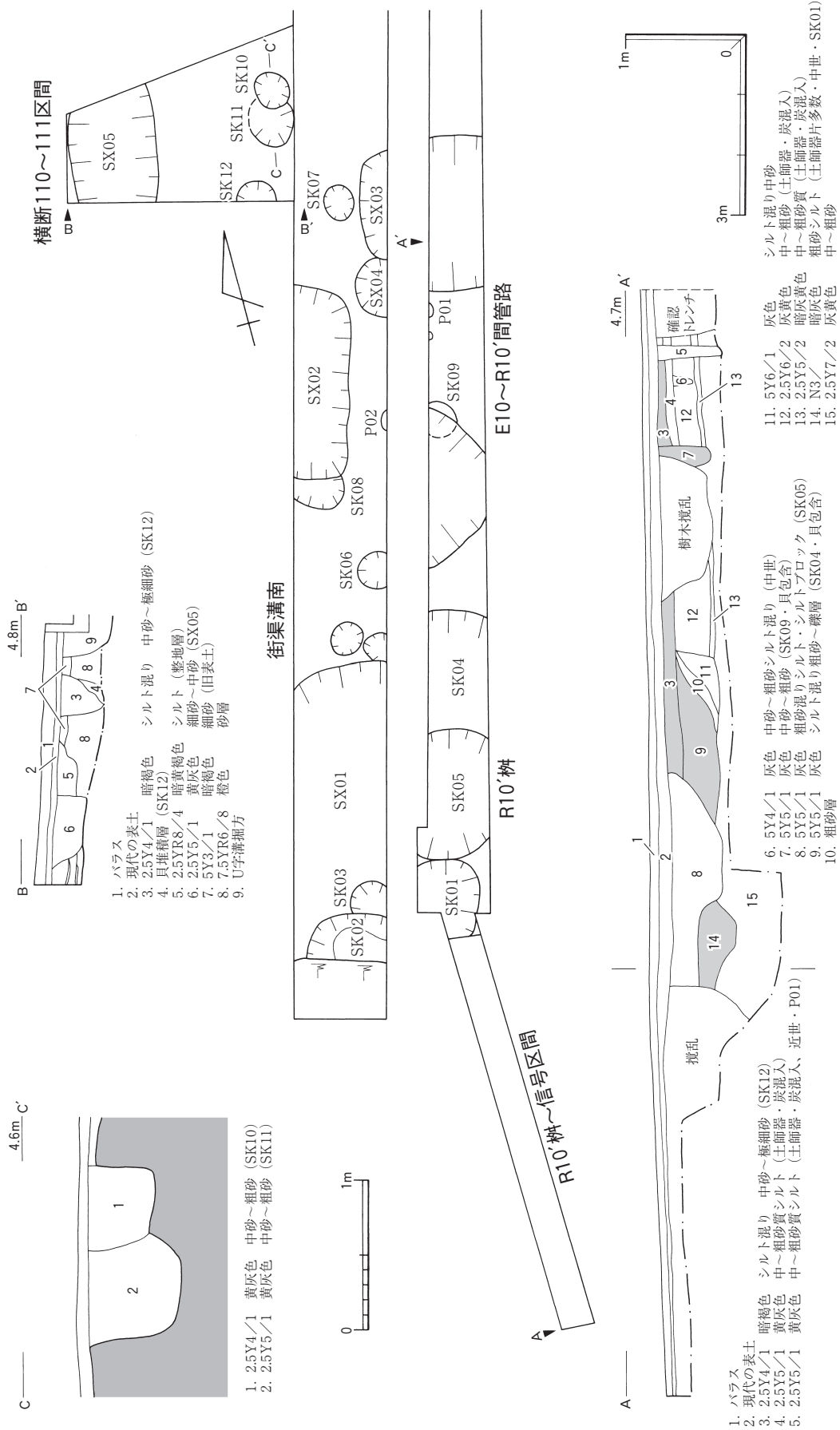
遺物は、中世の土坑であるSK03より土師器皿 (102~104)、SK06より13世紀代の須恵器鉢が出土している。また、近世の土坑であるSX02より丹波焼播鉢 (108)、SK01より磁器仏飯具 (109)、SK02より肥前系染付蓋 (110) が出土している。SX03下層からは貝類細片が出土した。

#### 横断110~111区間 (断面B~B'・c~c'、第14・16図・写真図版10参照)

同区間の土層堆積は7層の暗褐色土層が厚さ10cm前後観察され、その上面から遺構が検出された。この7層は近世段階の整地層と考えられ、西端部では7層上面より切り込まれたSX05 (近現代) が確認された。一方、東端部では近世後半の土坑群 (SK10~12) が検出された。遺物はSK12の4層から土師器



第15図 E10~R10' 管路・E10樹・連系18など平・断面図



第16図 E10~R'10管路・横断110~111区間・R10信号区間平・断面図

皿(101)やSK10・11から土師器皿、SX05の下層から須恵器鉢(105)が出土している。このほか近世の陶磁器片が出土している。

#### E10～R10' 間管路(断面A～A'北側、第14～16図・写真図版9・10参照)

本地点の北側はE10柵とともに実施した。このため遺構図は北側を第15図、南側を第16図で示した。

第12図の範囲は大きく近世～近代の攪乱坑(SK01・04)や樹根による攪乱が見られた。わずかに中世の遺構としてP09やSK05・09などの柱穴・土坑が検出された。

ただし、北側は断面観察(e～e'断面)のみを行った。3層黒褐色粗砂層直下からP19を検出し、層中からは土師器細片が出土した。下層包含層は掘削範囲内では検出されなかった。周辺の標高は4.5m前後、掘削深度は標高3.6m前後まで実施した。

#### R10' 柵(第14・16図・写真図版10参照)

R10' 柵は、近現代の土坑(SK04・05)を確認した。ただし、本地点はE10～R10' 間管路とともに一括で調査を行っているため、報告は前述のとおりである。

#### R10' 柵～信号管路(断面A～A'、第14・16図・写真図版10・11参照)

同区間は近年の工事により遺構が破壊されている。工事掘削深度内では遺構は確認できなかった。

## 第4節 小結

西側調査区(西宮神社東側歩道)では従前の開発による攪乱が著しく、遺物包含層や遺構の残存状況は良好ではなかった。これは地下埋設物による開削の影響が大きい。今回の共同溝も従前の埋設物と同様、歩道のほぼ中央を設置箇所としたため、既往の掘削溝と同範囲の掘削となったことが原因であろう。このため、周辺隣接地点の大部分は旧地形が残されている可能性は極めて高い。また、東側調査区および昭和54年度の調査成果からすると、表大門周辺は地形的にも砂堆頂部にあっており本遺跡の中心部分に位置する可能性が高い。このため周辺の調査には十分な留意が必要となろう。

東側調査区ではT8柵の以南において中世・近世を中心とする遺構を確認し、弥生から近代までの遺物が出土した。これによって現在まで不明であった中世の遺構面と遺構の様相の一部が明らかになった。

昭和54年度調査では包含層のみの検出であったが、今回の調査によって表大門から東に延びる西国街道沿線には広く遺構が残されることも確認された。これらの範囲は旧西国街道に沿うもので、西宮の中心である本町筋に面した門前町の中核部分である。地形的にも表大門から東に伸びる砂堆上にあたる場所で周囲に比べ安定した立地をもつ、このため西宮の門前町がこの表大門前の本町筋を中心に発展したという指摘は今回の調査においても検証されたといえる。

さらに、今回の調査では近世・近代の遺物も出土したが、これらの遺物の組成からすると磁器が多く含まれるが、日常生活品が多数を占めており町屋の様相を示している。一方、境内地である昭和54年度の調査では近世遺物の出土がほとんど認められないが、これは境内地と街道沿いの町屋との差を表しているものと考えられる。

また、近代においても先進的な煉瓦やタイルが出土した点からは、西宮が常に都市的な変化を遂げたことを傍証したといえる。

さらに、T8～E11間管路および連系16・17地点などで観察された夥しい戦災による焼土層の検出がある。これらの焼土層は南側の本町筋周辺の戦災層を片付けた際のものと考えられるが、今回の調査によって西宮の町が第2次大戦の被害を蒙っていたことを改めて明らかにした意義は大きい。

## 第4章 出土遺物

### 第1節 弥生時代～近代の土器・陶磁器・瓦

今回の調査では弥生時代～古墳時代、古代、中世、近世後半～近代の遺物が出土した。なお、本章の記述は第1節で土器・陶磁器・瓦・鉄製品、第2節で近代～現代のタイル・磚子などを報告した。また、遺物の記述は調査地点ごとに行ったが、個々の遺物の出土地点の詳細については、観察表も合わせて参照していただきたい。

#### 1. T8～E11間管路の出土遺物（第17～20図参照）

T8南側から出土した遺物は大半が戦災片付け層や攪乱、下水掘方などからのものである。これらの遺物は近世～近代のものが多数を占めるため、他の時代の遺物に比べ限定的な掲載に留めた。ただし、中世段階のものではP18などにおいてまとまった出土が見られるのでできる限り掲載に努めた。

本地点周辺は戦災による被災層が表土直下に残され、下層に中世の遺物を出土する遺構ないし遺構面が部分的に検出された。また、近世～現代に至る陶磁器を廃棄した堆積が随所に確認された。

近世後半～近代の陶磁器には肥前系磁器・関西系陶器・瀬戸系陶器・丹波焼・産地不明磁器と土師器で器種不明(29)のものがある。肥前系磁器には染付碗(1～8・30～32)・同猪口(34)・同皿(13～15・18・19・26)・同鉢(21・22・27・38)・同仏飯具(20・35)、青磁染付碗(33)、白磁碗(11)・同皿(16・17)がある。

染付碗は小型のものが多くいずれも日常雑器で、湯呑み碗の類に近い器形が大半を占める。8は筒形碗である。染付皿は13・14のような小皿と18・19のような鉢に近い器形のものがある。白磁の皿では16が見込みを蛇の目釉ハギし、17は型打ち皿で菊花を表す。20・35の染付仏飯具は小型のもので外面に斜格子文を描く。

このほか近代の磁器として珉平焼(12)や染付湯呑み碗(9・10)・皿(39)がある。12は淡陶社製の三彩碗で、淡路島で焼成された製品である。9・10は産地不明の磁器である。

関西系陶器では行平鍋(23)、蓋(24)などがある。瀬戸系陶器の皿(36)は内外面に透明釉を施釉し、底部は碁笥底のものである。丹波焼は徳利(25)、甕(41)がある。

P18から出土した遺物は前述のように中世の一括遺物である。土師器小皿(42～47)・皿(49～56)・鍋(58)、瓦質土器羽釜(59)、瓦器碗(60)、須恵器碗(57)・鉢(61・62)を図化した。

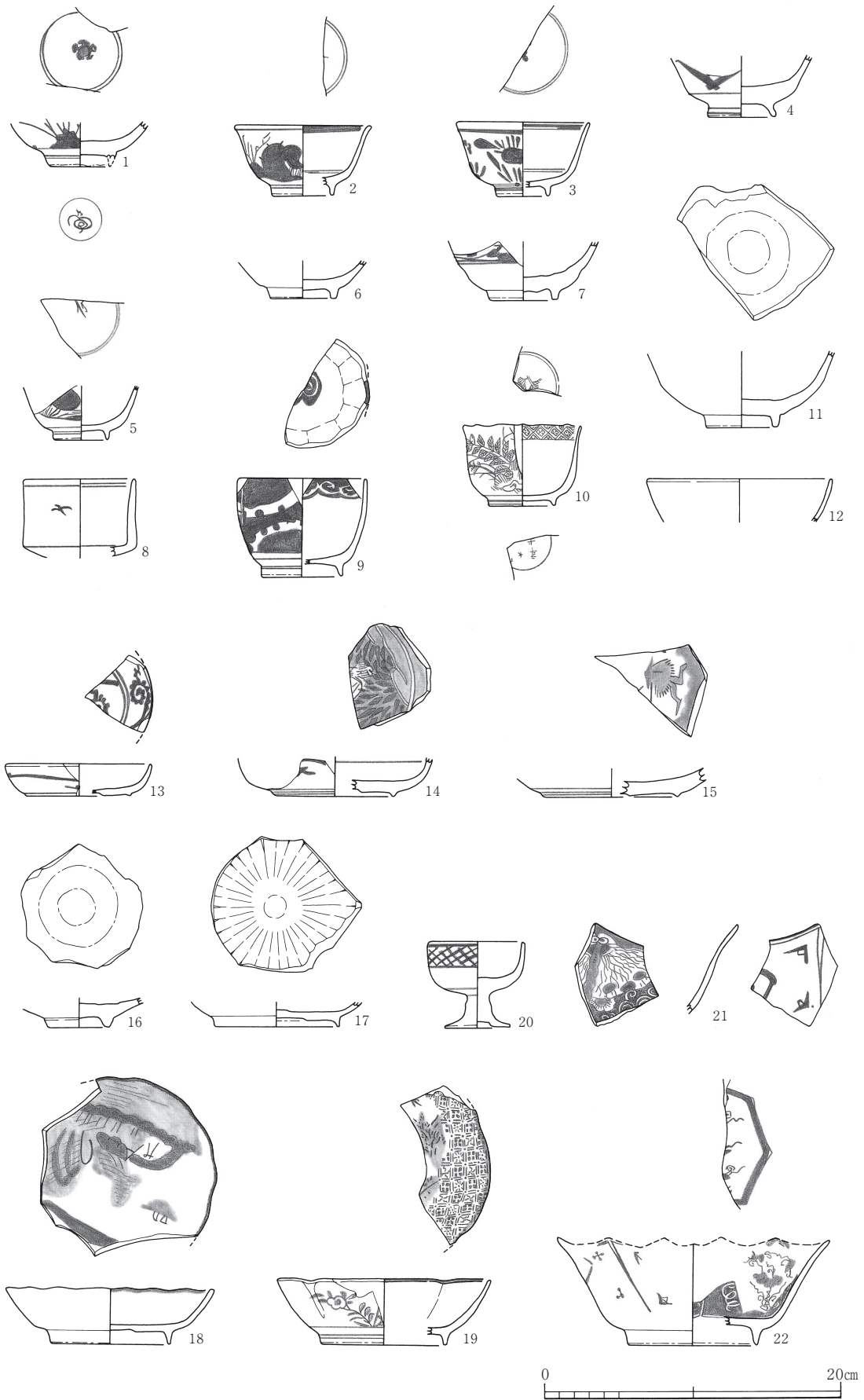
土師器小皿は体部がくの字に折れ、内外面を横ナデする。外面下半を中心に指頭痕跡が認められるものが多い。45・46は底部がへそ皿状に持ち上がる個体である。皿も全体に口径が小さく内外面を横ナデし、体部がくの字に折れる特徴を持つ。外面下半は未調整で指頭痕跡を顕著に残す。

土師器鍋58は受け蓋になる個体である。細片であるため詳細は不明であるが、瓦質の可能性も残される。内外面を横ナデし口縁部をやや内側に折る個体である。

瓦器碗60は底部の破片で、内面に暗文が観察される。瓦質土器59は羽釜である。口縁下に小さな鏝をもち、内面には板ナデが観察される。須恵器碗57は口縁部の細片である。須恵器鉢(61・62)は口縁部が肥厚し端部を上方につまむものである。

#### 2. E11・T7柵・R10柵周辺の出土遺物

本町通り北側に面した地区から出土した遺物である。主として中世前半の土器がまとめて出土した。ここでは遺物の取り上げ単位ごとに報告を行う。



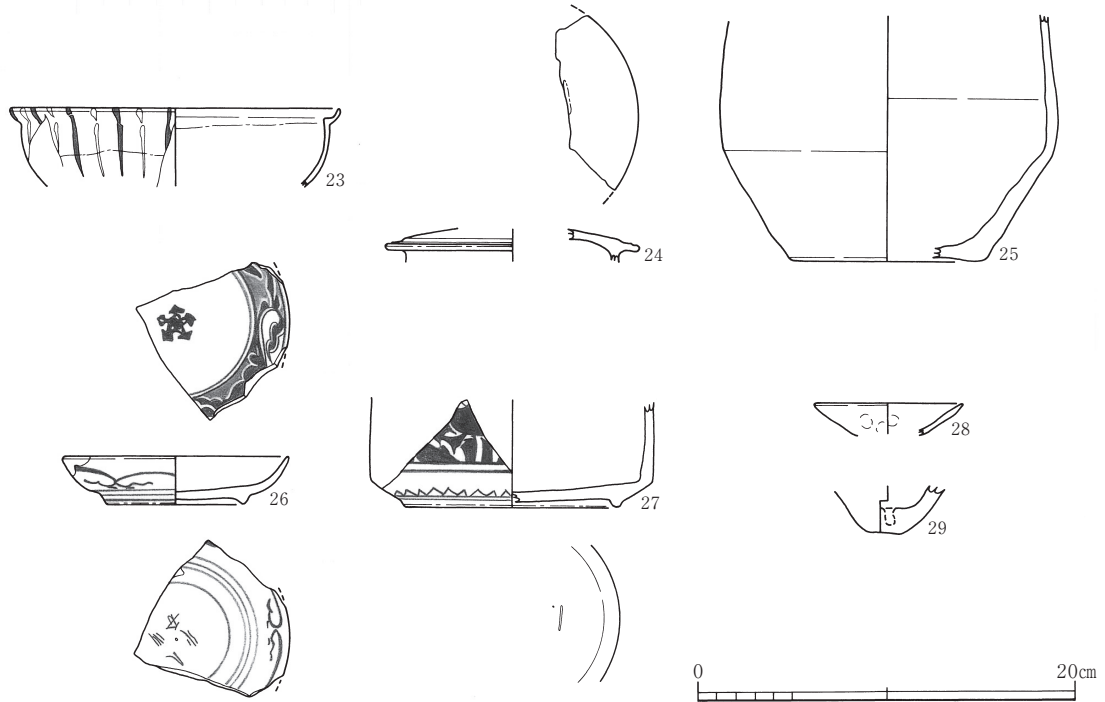
第17図 出土遺物 土器・陶磁器など1 磁器



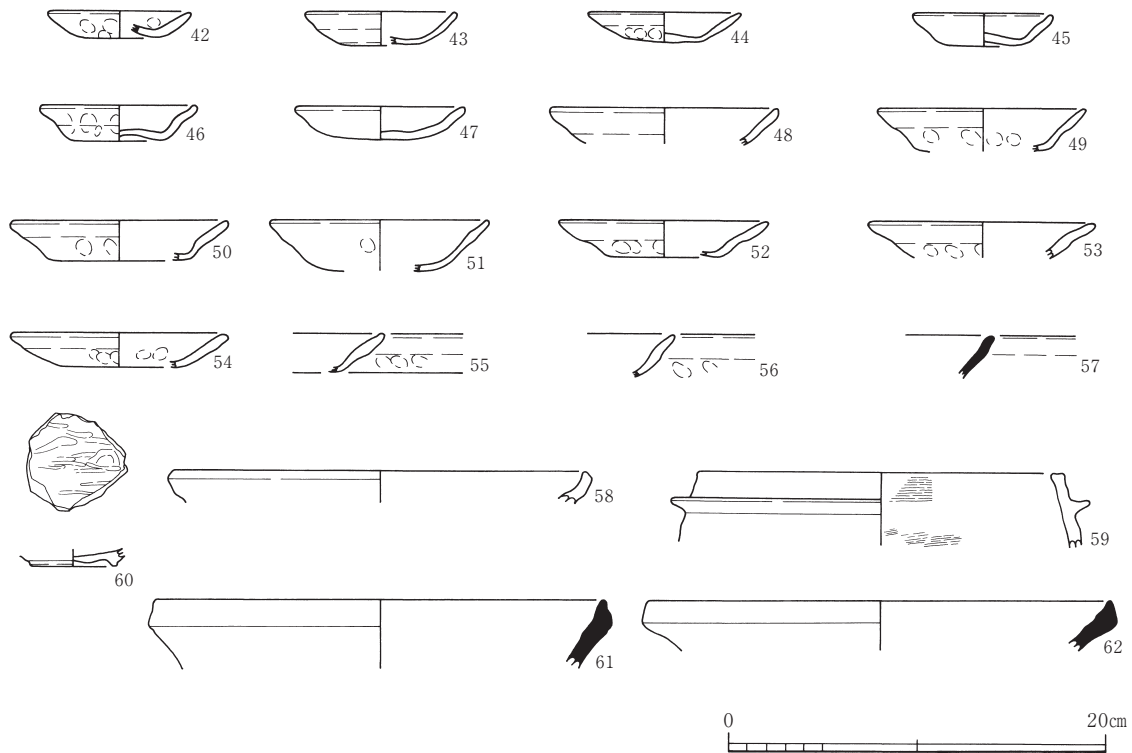
### 3. 横断110~111・E10柵より南の遺物

R10~E10間南管路（第22図参照）

この地区からは弥生時代後期~古墳時代初頭の土師器甕（83・84）・製塩土器（82）、中世の土師器小皿（86）、近世後半の肥前系染付碗（85）が出土した。出土層位はいずれも近代以降の攪乱層である6・7層から（第15図断面c~c'参照）である。

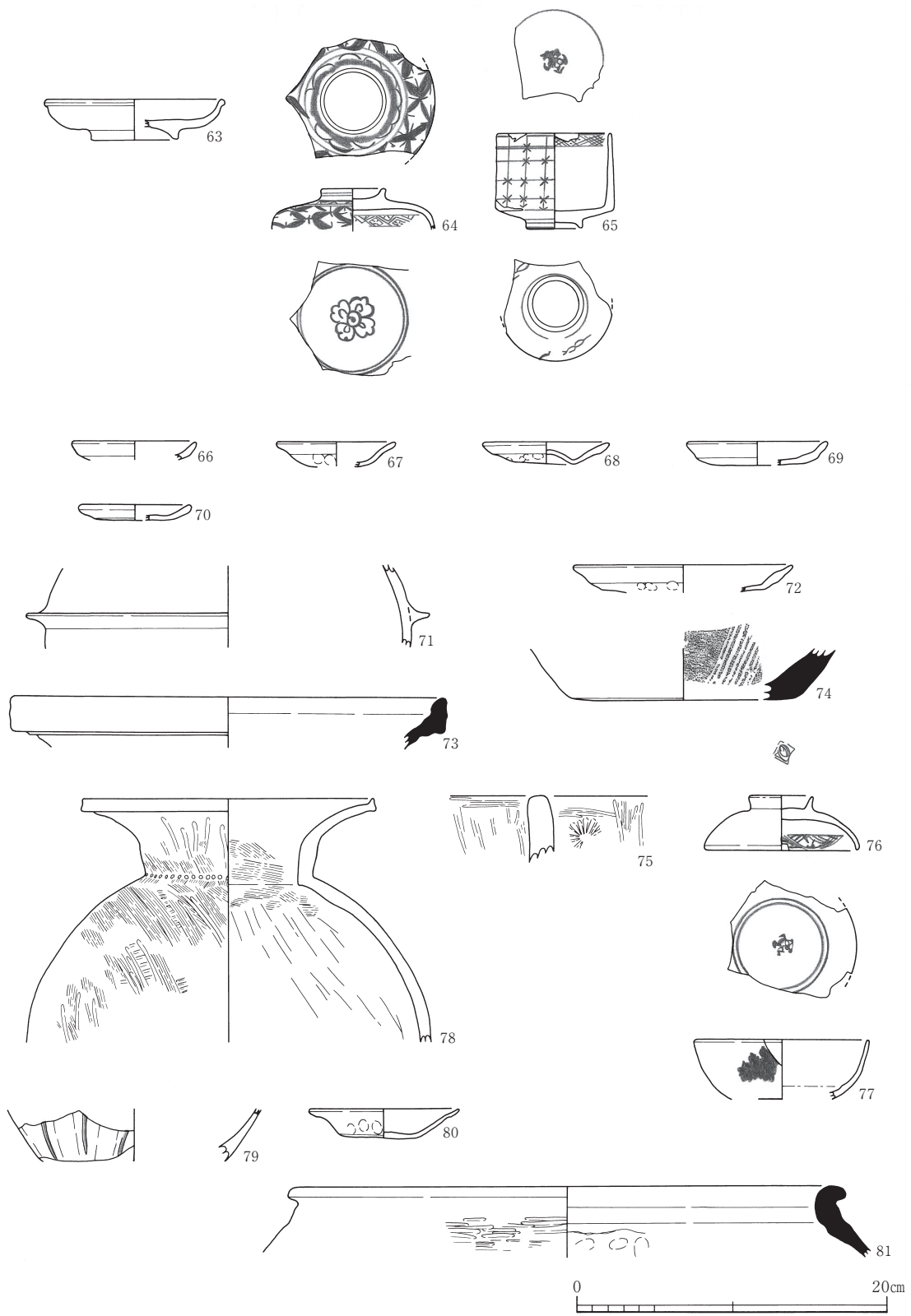


第19図 出土遺物 土器・陶磁器など3 陶器・磁器



第20図 出土遺物 土器・陶磁器など4 土師器・須恵器・瓦器





第21図 出土遺物 土器・陶磁器など5 土師器・陶器・磁器

### 連系18 (第22図参照)

中世の土師器小皿(86)と近世後半の肥前系青磁染付碗(87)がある。86は底部がやや持ち上がるタイプで、外面に指頭痕跡が残る。87は小型の筒茶碗で小さな高台をもつ。86は下層からの出土であるが明確な層位は不明、87は上層からの出土である。

### E10柵 (第22図参照)

弥生時代後期～古墳時代初頭の甕(92・95)・高杯(94)・台付鉢(93)、中世の土師器小皿(90)・鍋(88)、瓦器碗(89)、近世の丹波焼播鉢(91)がある。

### E10～R10' 区間 (第23図参照)

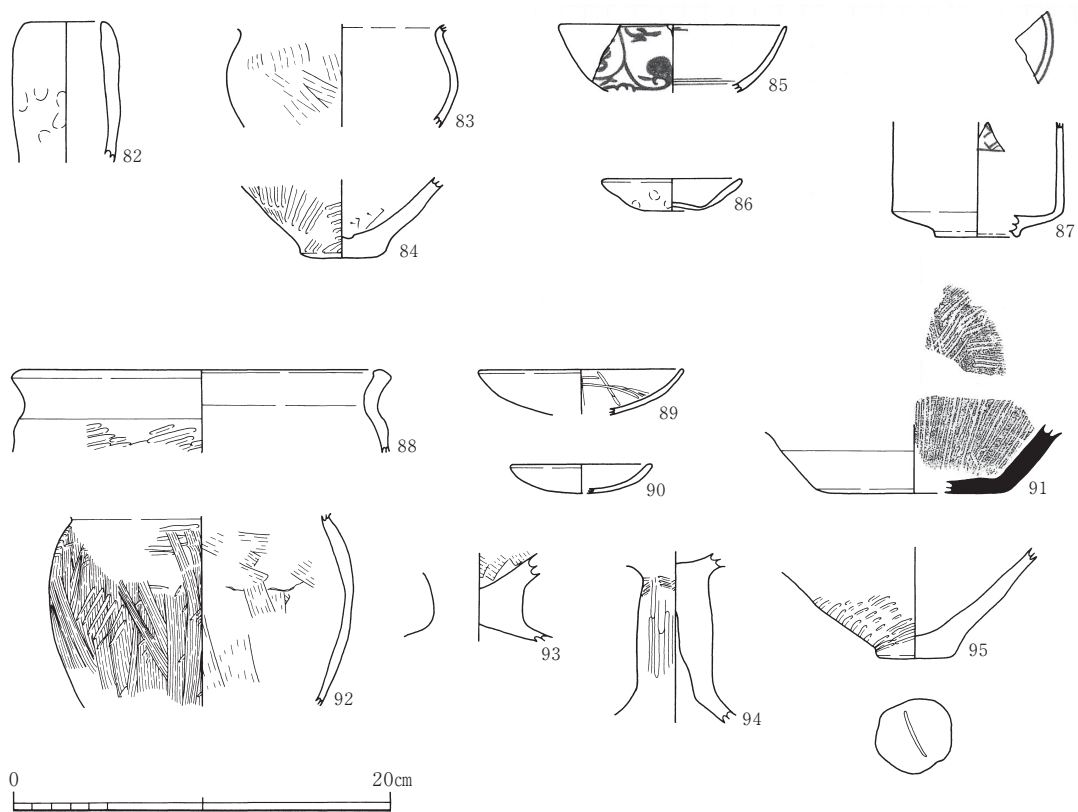
弥生時代後期～古墳時代初頭の鉢(100)、中世の土師器小皿(96～98)、近世の丹波焼播鉢(99)がある。100は手づくね成形で外面に指頭痕跡を残す。土師器皿は14世紀代、丹波焼播鉢17世紀後半のものである。

### 街渠溝 (第23図参照)

南北の街渠溝をまとめて報告する。中世の土師器小皿(104)・皿(102～103)、須恵器碗(106)・鉢(107)、近世の丹波焼播鉢(108)、肥前系染付磁器仏飯具(109)・同蓋(110)がある。土師器小皿・須恵器碗は13～14世紀代、その他は近世後半の遺物である。103・104はSK03、106はSK06から出土した。

### 横断110～111 (第23図参照)

土師器皿(101)、須恵器鉢(105)、肥前系施釉陶器皿(111)・道具瓦(112)や近世の磁器・土師器などがある。土師器皿(101)・須恵器鉢(105)は13～14世紀代、肥前系施釉陶器皿(111)は近世後半のものである。道具瓦(112)は螻羽瓦の可能性があり、刻印が側面に観察される。



第22図 出土遺物 土器・陶磁器など6 土師器・須恵器・瓦器・陶器

#### 4. 調査区西側の出土遺物

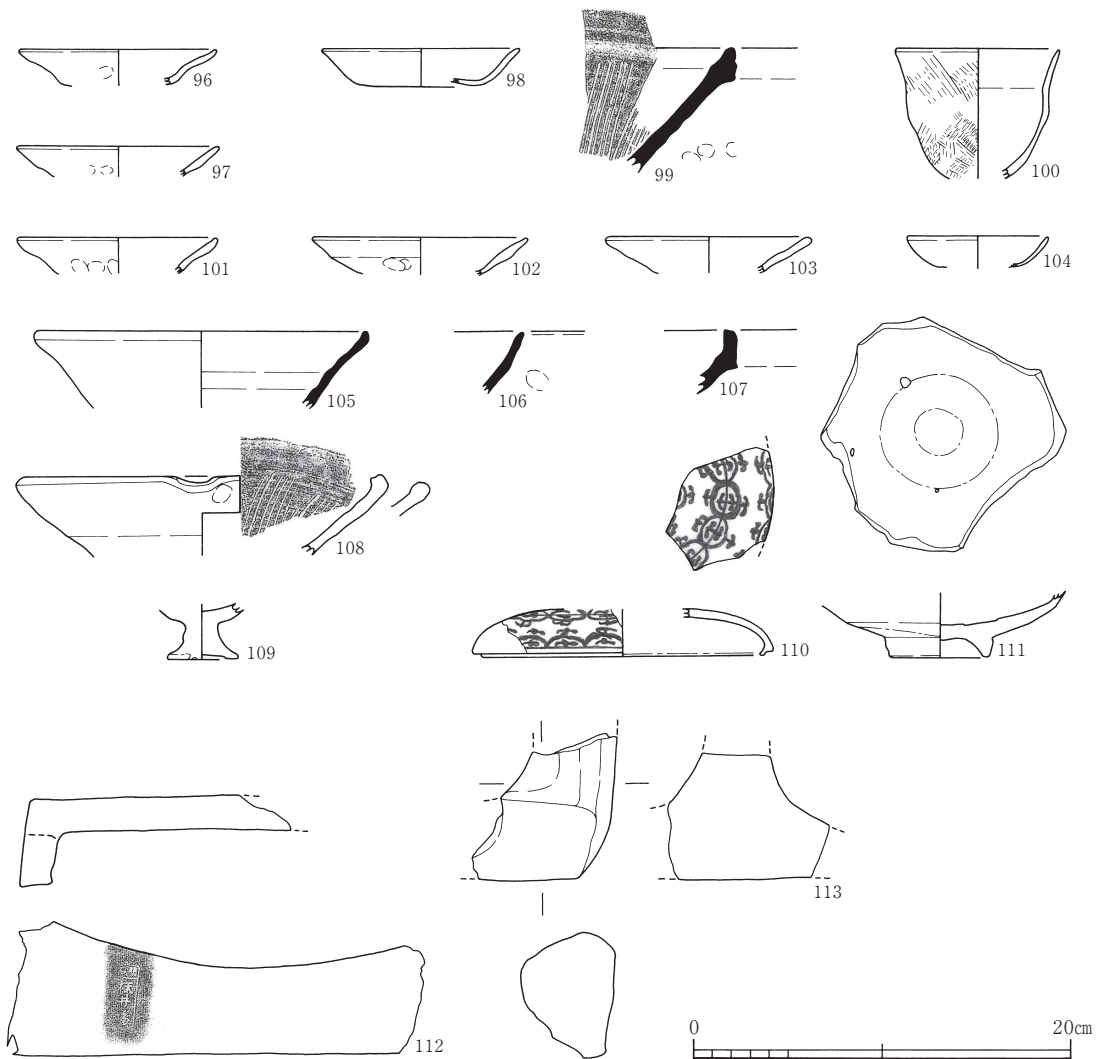
西側道路照明（第23図参照）

瓦（113）を図化した。獅子口ないしは鬼瓦などの破片と考えられる。均質な磨きと光沢のある燻しが施された製品である。近世後半～近代のものと考えられる。このほか、13～14世紀頃の土師器皿・近世後半の陶磁器などが出土したが細片のため図化していない。これらの様相は東側の出土状況とおおむね相異はない。

#### 5. 確認調査の遺物（第25図参照）

確認調査で出土した遺物は土師器小皿（114・115）・皿（116～118）、須恵器鉢（119・120）、丹波焼甕（121・122）、肥前系陶器皿（123）鉢がある。

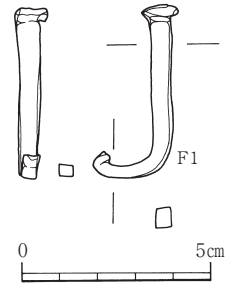
それぞれの出土位置は1トレンチから土師器小皿（114・115）、4トレンチから土師器皿（116・117）、須恵器鉢（119・120）・丹波焼（121・122）、3トレンチから肥前系陶器皿（123）、5トレンチからは土師器皿（118）がそれぞれ出土した。



第23図 出土遺物 土器・陶磁器など7 土師器・陶器・磁器・瓦

## 6. 鉄製品・その他 (第24図参照)

釘 (F1) はE10柵出土である。頭巻の和釘で、下半が折れ曲がる。

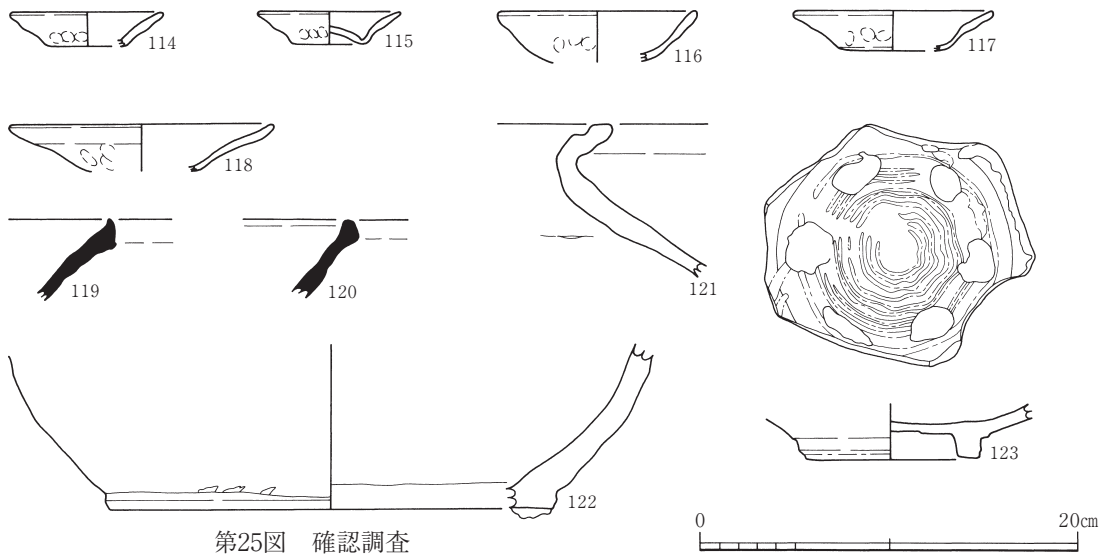


第24図 出土遺物 鉄製品

## 7. 小結

今回の調査で出土した遺物は弥生時代後期～古墳時代初頭、中世、近世後半～近代に大きく大別される。

弥生時代後期～古墳時代初頭の遺物は、大半が破片であるが、E10柵3'層では下層の黒色包含層からも出土しており、比較的下位の層位からの遺物が多い。昭和54年度調査においても弥生時代～古墳時代



第25図 確認調査

の土器が多く出土しており、当該期の集落遺跡が周辺に存在する可能性が示唆される。

中世の遺物は14世紀前半前後の遺物が多くを占め、T7柵などでは中世遺構が検出された。これらの遺構は黒褐色砂層をベースとする包含層から切り込むもので同層が当該時期の遺構面であることが確認された。ただし、遺物群の様相をみると、土師器皿が圧倒的に多数を占め、土師器鍋・羽釜・須恵器椀・鉢、瓦器碗、中国産青磁などが含まれるものの少量であった。瓦器や須恵器皿・椀・甕などの器種が少ないことは遺物の中心時期が14世紀に偏ることを物語っていると思われるが、昭和54年調査に比べると組成に偏りが認められた。西宮神社境内地周辺「市庭」に隣接する地点とその周辺のエリアの差も想定され、今後の検討が望まれるところである。

中世後半の遺物は備前焼播鉢74などわずかではあるが含まれていた。ただし、14世紀代に比べると遺構から出土したものもなく、詳細を分析できる材料にはならない。

近世の遺物は大半が近世後半、特に幕末期～近代前後のものに集中している。日常雑器が中心で、器種は小型の碗・皿が中心である。その一方、大皿や壺などの高級品は含まれず、器種組成の点でも供膳具が多く、播鉢などの調理具や甕などの貯蔵具が少ない印象である。これらから考えられることは調査地周辺が一般町人層の町屋であることを推測させる。

今回の調査は遺跡の立地と広がりという点では昭和54年度の調査をあらためて検証する成果をえることができた。特に中世段階では13～14世紀頃の様相が加えられ、神社東側の東西に延びる砂堆上に遺跡が広がるのがより明確になった点で成果の意義は大きい。

No.	出土地点	時代	種別	器種	法量			残存率		備考
					口径	器高	底径	口縁部	底部	
1	T8～E11間管路T8南24m 西壁G.L.-70cm におい黄褐色粗砂	近世後半	染付	碗	—	(3.0)	(4.0)	—	1/2	肥前系磁器。内面見込=五弁花・外面=草花文・高台=渦福
2	T8～E間管路暗T8南17m 植栽掘方 褐色 腐植土	近世後半	染付	碗	(9.0)	4.8	(8.1)	2/7	1/5	関西系磁器。内面見込=二重圏線・外面=岩に樹文
3	T8～E11間管路・下水掘方・T8南24～17m	近世後半	染付	碗	(8.8)	5.0	(3.4)	1/3	3/7	肥前系磁器。内面見込=二重圏線・外面=1重回線・花文
4	T8～E11間管路・下水掘方・T8南24～17m	近世後半	染付	碗	—	(4.1)	(4.6)	—	3/5	肥前系磁器。外面=斜格子の窓文
5	T8～E11間管路・下水掘方・T8南24～17m	近世後半	染付	碗	—	(3.7)	3.7	—	1/2	肥前系磁器。外面=花文・見込=不明
6	T8～E11間管路近現代攪乱・T8南12～17m 褐灰色粗G.L.-70cm前後砂	近世後半	白磁	碗	—	2.6	4.5	—	完存	肥前系磁器。
7	T8～E11間管路・T8南17m～G.L.-80cm におい黄褐色粗砂	近世後半	染付	碗	—	(4.0)	(4.6)	—	3/4	肥前系磁器。外面=草花文
8	T8～E11間管路・T8南24～27m・下水掘方	近世後半	染付	碗	(7.3)	(5.3)	—	1/6		肥前系磁器。筒茶碗・外面=鳥文
9	T8～E11間管路・T8南24～27m・下水掘方	近代	染付	湯呑み碗	(8.5)	6.7	(5.3)	1/8以下	1/2	外面=図案状文様・口縁内面・見込=図案化した雲文
10	T8～E11間管路・T8南8m・G.L.-100 灰色粗砂	近代	染付	湯呑み碗	(8.0)	5.5	4.3	1/5	1/3	口縁部は輪花状に波打つ。下膨れの体部を持つ。外面=草花文、内面口縁部=四方禪文。見込に草文
11	T8～E11間管路・T8南24m・現代 下水掘方 暗褐色土	近世後半	白磁	碗	—	(5.2)	4.8	—	完存	肥前系磁器。見込は蛇ノ目軸ハギ。
12	T8～E11間管路・T8南24m・下水掘方	近代	珉平焼	碗	(12.2)	(2.9)	—	1/8以下		淡陶社製の三彩碗
13	T8～E11間管路・T8南24m・下水掘方	近世後半	染付	皿	(9.6)	2.2	(6.9)		1/5	肥前系磁器。口縁内面=蛸唐草、外面=唐草文
14	T8～E11間管路・T8南24m・下水掘方	近世後半	染付	皿	—	(2.6)	(7.8)		1/4	肥前系磁器。外面=唐草文・内面=口縁に二重回線・見込に水草文
15	T8～E11間管路・T8南17m～・現代 下水掘方 暗褐色土	近世後半	染付	皿	—	(1.9)	(9.0)	—	1/7	肥前系磁器。内面=飛脚文
16	T8～E11間管路・T8南24～27m・G.L.-80cm におい黄褐色粗砂	近世後半	白磁	皿	—	(2.0)	4.2	—	完存	肥前系磁器。見込は蛇ノ目軸ハギ。
17	T8～E11間管路・T8南27～30m・下水掘方	近世後半	白磁	皿	—	(1.7)	8.4		ほぼ完存	肥前系磁器。型打ち皿。見込み輪花を表現。
18	T8～E11間管路・T8南24m・下水掘方	近世後半	染付	皿	(14.0)	3.7	8.1	3/8	完存	肥前系磁器。型打ち皿(輪花)、口縁は鉄錆。内面=図案化した山水文と帆掛け舟
19	T8～E11間管路・T8南24～27m・現代 下水掘方 暗褐色土	近世後半	染付	皿	(14.2)	4.4	(8.4)	1/3	1/3	肥前系磁器。型打ち皿、口縁部は輪花および口さび。内面=型紙摺り文様と木樹文・外面=草花文
20	T8～E11間管路・T8南24～27m・下水掘方	近世後半	染付	仏飯具	(6.2)	5.8	4.4	1/6	ほぼ完存	肥前系磁器。外面口縁=圏線に格子文。
21	T8～E11間管路・T8南24～27m・下水掘方	近世後半	染付	鉢	—	(6.0)	—	1/8以下		肥前系磁器。内面=昆虫文・外面=幾何学文様・区画線
22	T8～E11間管路・T8南24m 西壁・G.L.-70cm におい黄褐色粗砂	近世後半	染付	鉢	(18.4)	(7.2)	(8.6)	細片	1/4	肥前系の型打皿(八角形)。内面=扇面窓に葡萄蔓草文・外面=昆虫文・植物文
23	T8～E11間管路・T8南34.5～38.5m・10YR5/3 におい黄褐色・G.L.-60cm	近世後半	施釉陶器	鍋	(17.2)	4.2	—	1/4		関西系陶器。外面にイッチンで縦線を表現。
24	T8～E11間管路・T8南24～27m・下水掘方・貝取り出し	近世後半	施釉陶器	蓋	—	(1.8)	—	1/5		関西系陶器。細片のため詳細不明。
25	T8～E11間管路・T8南10m・G.L.-90cm 黄褐色粗砂	近世後半	丹波焼	徳利	—	(13.0)	(10.0)		1/2	底部片。
26	連系126・表土直下 攪乱内	近世後半	染付	皿	(12.0)	2.6	(7.0)	1/8以下	1/3	肥前系磁器。内面=見込にコンニャク印判の五弁花・口縁に回線と雲文、外面=唐草文、高台に『富貴長春』銘。
27	引込122・G.L.-40cm 5YR3/2 暗赤褐	近世後半	染付	鉢	—	(5.7)	(11.1)		1/2	肥前系磁器。外面に2重圏線と植物文、腰部に鋸歯文。
28	連系16・17・下層 明黄褐色砂層	13世紀	土師器	小皿	(7.8)	(1.7)	—	1/3		手づくね皿、外面に指頭痕跡を観察する。
29	連系16・17・明黄褐色砂層(下層)	不明	土師器	壺	—	(2.6)	1.6		完存	底部片。内面に刺突痕跡。
30	T8～E11間管路・5層中世包含層	近世後半	染付	碗	(9.2)	4.3	(3.4)	1/4	2/3	肥前系磁器。外面=格子窓に桐文。
31	T8～E11間管路・5層中世包含層	近世後半	染付	碗	(9.4)	4.8	4.4	1/4	1/5	肥前系磁器。外面=回線と牡丹文、内面=口縁圏線と見込一重圏線。
32	T8～E11間管路・5層中世包含層	近世後半	染付	碗	(10.5)	4.9	(4.2)	若干	1/4	肥前系磁器。外面=二重網手・腰部=二重圏線
33	T8～E11間管路・5層中世包含層	近世後半	青磁染付	碗	—	6.0	4.7	1/6	完存	見込=蜜柑・2重圏線、高台=渦福
34	T8～E11間管路・5層中世包含層	近世後半	染付	猪口	(6.9)	6.7	4.9	1/8	ほぼ完存	肥前系磁器。蕎麦猪口。外面=松枝文
35	T8～E11間管路・5層中世包含層	近世後半	染付	仏飯具	(7.8)	4.2	(4.1)	1/4	2/3	肥前系磁器。外面=雨降り文
36	T8～E11間管路・5層中世包含層	近世後半	瀬戸焼	皿	(7.8)	1.6	(3.5)	1/3	1/3	透明釉を施釉する。

第26図 土器・陶磁器など出土遺物観察表1

No.	出土地点	時代	種別	器種	法量			残存率		備考
					口径	器高	底径	口縁部	底部	
37	T8～E11間管路	近代	施釉陶器	小鉢?	—	(1.4)	6.8	—	完存	型成形。底部外面に刻印「○89」
38	T8～E11間管路	近世後半	染付	鉢	—	(4.3)	(8.7)		1/4	肥前系磁器。内面=唐草・笹文に帆掛船、外面腰部=蓮弁文
39	T8～E11間管路	近代	染付	皿	(15.8)	2.4	9.0	わずか	1/5	内面=銅版転写文様
40	T8～E11間管路	近代	施釉陶器	鉢・甌?	—	(3.1)	(10.8)	—	2/3弱	型成形、外面に貫入が観察される。
41	T8～E11間管路	近世後半	丹波焼	甌	—	(3.5)	(18.6)	—	1/3強	底部に焼台痕跡が残る。
42	T8～E11間管路・P18	13世紀	土師器	小皿	(7.3)	1.4	(3.6)	1/5	1/5	内面および外面上半手づくね調整、外面に指頭痕跡
43	T8～E11間管路・P18	13世紀	土師器	小皿	(7.8)	1.8	(4.4)	3/7	3/7	内面および外面上半手づくね調整、外面に指頭痕跡
44	T8～E11間管路・P18	13世紀	土師器	小皿	7.9	1.6	3.6	4/5	9/10	内面および外面上半手づくね調整、外面に指頭痕跡
45	T8～E11間管路・P18	13世紀	土師器	小皿	(7.1)	1.7	(3.4)	2/5	1/3	内面および外面上半手づくね調整、外面に指頭痕跡
46	T8～E11間管路・P18	13世紀	土師器	小皿	(8.0)	1.9	(4.6)	—	—	内面および外面上半手づくね調整、外面に指頭痕跡
47	T8～E11間管路・P18	13世紀	土師器	小皿	(8.7)	1.8	(4.7)	1/4	1/4	内面および外面上半手づくね調整、外面に指頭痕跡
48	T8～E11間管路・P18	13世紀	土師器	皿	(11.8)	(1.9)	—	1/6	—	内面および外面上半手づくね調整、外面に指頭痕跡
49	T8～E11間管路・P18	13世紀	土師器	皿	(10.7)	(2.3)	—	1/3	—	内面および外面上半手づくね調整、外面に指頭痕跡
50	T8～E11間管路・P18	13世紀	土師器	皿	(11.8)	2.2	(6.0)	1/8	—	内面および外面上半手づくね調整、外面に指頭痕跡
51	T8～E11間管路・P18	13世紀	土師器	皿	(11.3)	(2.7)	—	1/8	—	内面および外面上半手づくね調整、外面に指頭痕跡
52	T8～E11間管路・P18	13世紀	土師器	皿	(10.8)	1.9	(5.6)	1/8	1/8	内面および外面上半手づくね調整、外面に指頭痕跡
53	T8～E11間管路・P18	13世紀	土師器	皿	(11.6)	(1.9)	—	1/8	—	内面および外面上半手づくね調整、外面に指頭痕跡
54	T8～E11間管路・P18	13世紀	土師器	皿	(11.1)	1.8	(6.0)	1/8	1/8	内面および外面上半手づくね調整、外面に指頭痕跡
55	T8～E11間管路・P18	13世紀	土師器	皿	—	2.1	—	細片	細片	内面および外面上半手づくね調整、外面に指頭痕跡
56	T8～E11間管路・P18	13世紀	土師器	皿	—	(2.3)	—	細片	—	内面および外面上半手づくね調整、外面に指頭痕跡
57	T8～E11間管路・P18	13世紀	須恵器	椀	—	(2.3)	—	細片	—	口縁部の細片。口縁部の内外面を横ナデ丸く肥厚させておえる。
58	T8～E11間管路・P18	13世紀	土師器	鍋	(21.6)	(1.7)	—	細片	—	受け蓋状の口縁部をもつ鍋の細片である。口縁端部を上方に折り曲げておえる。
59	T8～E11間管路・P18	13世紀	瓦質土器	羽釜	(19.1)	(3.9)	—	細片	—	口縁部片。内傾気味の体部をもち、口縁部上端に面をもつ。口縁下に小さな銕を持つ。内面に板ナデ痕跡。
60	T8～E11間管路・P18	13世紀	瓦器	椀	—	(0.9)	4.2	—	完存	底部片。内面に暗文が観察される。高台は小さなもので断面台形。
61	T8～E11間管路・P18	13世紀	須恵器	鉢	(23.5)	(3.7)	—	細片	—	東播磨系須恵器。口縁端部を上方につまむ。
62	T8～E11間管路・P18	13世紀	須恵器	鉢	(24.2)	(2.6)	—	細片	—	東播磨系須恵器。口縁端部を上方につまむ。
63	E11榊	近世後半	青磁	皿	(11.2)	2.6	(5.3)	1/5	1/3	肥前系磁器、口縁部を玉縁状に肥厚させる。
64	E11榊	近世後半	染付	蓋	—	(2.8)	4.0		体部1/2	肥前系磁器、内面口縁部=四方襷文、天井部=菊花文・二重圏線、外面=図案化した花文
65	E11榊	近世後半	染付	碗	(7.2)	6.1	3.6	1/8以下	完存	肥前系磁器、半筒碗。外面=格子に×、内面口縁部=四方襷文・見込み、コンニャク印判五弁花。
66	T7～R10榊間管路・3層包含層	13世紀	土師器	小皿	(7.8)	(1.2)	—	1/4	—	内面および外面上半手づくね調整、外面に指頭痕跡
67	T7榊周辺・P09	13世紀	土師器	小皿	(7.4)	(1.6)	—	1/4	1/4	内面および外面上半手づくね調整、外面に指頭痕跡
68	T7榊周辺・P09	13世紀	土師器	小皿	(8.0)	1.4	3.8	4/7	7/8	内面および外面上半手づくね調整、外面に指頭痕跡
69	T7榊周辺・P07	13世紀	土師器	小皿	(8.7)	1.5	(5.9)	細片	—	内面および外面上半手づくね調整、外面に指頭痕跡
70	T7榊・4層上面 P10	13世紀	土師器	小皿	(6.8)	1.0	(5.2)	1/5	—	内面および外面上半手づくね調整、外面に指頭痕跡
71	T7榊・4層上面 P10	13世紀	瓦質土器	羽釜	—	(5.3)	—		細片	胴部の破片。胴部最大径に小さな銕を貼り付ける。
72	T7榊周辺・P09	13世紀	土師器	皿	(13.8)	(1.8)	—	細片	—	手づくね皿、外面下半に指頭痕跡を観察する。
73	T7榊周辺	近世初頭	備前焼	播鉢	(27.4)	(3.3)	—	細片	—	縁帯が肥厚し、内面に段をもつ。
74	T7榊周辺・P08	16世紀後半	備前焼	播鉢	—	(3.4)	(14.3)		細片	底部片、密な描目が観察される。8本単位の描目が観察され、使用痕跡が顕著。
75	T7榊周辺・P07	15～16世紀	瓦質土器	火鉢	(15.8)	(4.3)	—	1/8	細片	口縁部の細片。外面に密な磨き痕跡。菊のスタンプ文。
76	T7榊・2層	近世後半	青磁染付	蓋	(9.6)	3.5	(4.0)	1/7	—	肥前系磁器。内面口縁部=圏線及び四方襷、外面天井部=角福
77	T7榊・2層	近世後半	染付	碗	(11.0)	(3.9)	—	1/8	—	肥前系磁器。外面=桐文、内面=五弁花のコンニャク印判・二重圏線
78	T7榊・5層	弥生～古墳	弥生／土師器	壺	(18.6)	(15.7)	—	1/2	細片	口縁部は端部を上方につまむ。外面、平行叩の後ミガキ調整。頸部に刺突文
79	R10榊 西側	13～14世紀	青磁	碗	—	(3.4)	—		体部1/8	竜泉窯系蓮弁文椀。
80	R10榊・SK16	13～14世紀	土師器	皿	(9.6)	1.9	5.2	1/3	1/3	内面および外面上半手づくね調整、外面に指頭痕跡
81	R10～E10間北管路	15～16世紀	須恵器	甌	(33.8)	(4.5)	—	1/8以下	—	湊焼の甌、短い頸部と、肥厚し大きく外反する口縁部。外面に平行タタキ、内面に指頭痕跡が観察される。
82	R10～E10間北管路 黒褐色土層	弥生～古墳	弥生／土師器	製塩土器	(3.8)	(7.5)	—	1/4	—	蛸壺型土器。手づくね成形、外面に指頭痕跡。
83	R10～E10間北管路 黒褐色土層	弥生～古墳	弥生／土師器	甌	—	(5.5)	—	1/8以下	—	胴部の破片。外面不定方向のハケ目調整。

第27図 土器・陶磁器など出土遺物観察表2

No.	出土地点	時代	種別	器種	法 量			残存率		備 考
					口径	器高	底径	口縁部	底部	
84	R10~E10間北管路 黒褐色土層	弥生~古墳	弥生/ 土師器	甕	—	(4.3)	4.4	—	完存	底部片。外面タタキ痕跡、内面ハケ目調整。
85	R10~E10間北管路	近世後半	染付	碗	(11.8)	3.6	—	細片	—	肥前系磁器。外面=唐草文、内面見込=二重園線
86	連系18・暗褐色包含層 貝層 (西側)	14世紀	土師器	小皿	(7.2)	1.7	(2.8)	1/3	—	内面および外面上半手づくね調整、外面に指頭痕跡。底部はへそ皿様にやや持ち上がる。
87	連系18・上層 攪乱	近世後半	青磁染付	碗	—	(6.1)	(4.2)	1/8以下	—	筒型碗。外面=文様不明、
88	E10榦	14世紀	土師器	鍋	(18.8)	(4.4)	—	1/8以下	—	小さくくの字に折れた頸部から、やや肥厚した口縁部を持つ。口縁部端部をやや内側につまむ。外面に平行タタキ。
89	E10榦	13世紀	瓦器	椀	(10.7)	2.4	—	1/3	—	内面に粗い磨き調整。退化した器形で低い器高をもつ。
90	E10榦・SK13	13世紀	土師器	小皿	(7.3)	(1.6)	—	1/3	—	手づくね皿。丸い底部から内湾気味に立ち上がる体部を持つ。
91	E10榦	17世紀後半	丹波焼	播鉢	—	(3.6)	(10.2)	—	1/5	底部片、密な播目が観察される。
92	E10榦・黒褐色砂層・(下層包含層)	弥生~古墳	弥生/ 土師器	甕	—	(10.1)	—	1/8	—	外面に密な縦ハケ調整。内面に縦ハケが部分的に観察される。
93	E10榦・黒褐色砂層・(下層包含層)	弥生~古墳	弥生/ 土師器	台付鉢	—	(4.7)	—	—	脚部1/4	脚部片、内面に刷毛目痕跡。
94	E10榦・黒褐色砂層・(下層包含層)	弥生~古墳	弥生/ 土師器	高坏	—	(9.0)	—	—	脚部1/3	脚部片、外面にミガキ痕跡。
95	E10榦・黒褐色砂層・(下層包含層)	弥生~古墳	弥生/ 土師器	甕	—	(5.9)	4.0	—	完存	底部片。外開き気味の体部と、小さな底部を持つ。外面に引くタタキ痕跡。
96	E10~R10'間管路・トレンチ5m分A-A'・2層 中世包含層	14世紀	土師器	小皿	(10.3)	(2.0)	—	1/4	—	内面および外面上半手づくね調整、外面に指頭痕跡
97	R10' 土坑 (1層)	14世紀	土師器	小皿	(10.5)	(1.6)	—	1/6	—	内面および外面上半手づくね調整、外面に指頭痕跡
98	E10~R10'間管路・トレンチ5m分A-A'・2層 中世包含層	14世紀	土師器	小皿	(10.2)	2.0	(5.2)	1/4	—	内面および外面上半手づくね調整、外面に指頭痕跡
99	E10~R10'間管路・B'~C・SK04	17世紀後半	丹波焼	播鉢	—	(6.6)	—	1/8以下	—	上下に拡張し、縁帯状に肥厚した口縁部を持つ。
100	R10'~E10間管路・P1	弥生~古墳	弥生/ 土師器	鉢	(8.4)	(6.9)	—	1/5	—	外面ハケ目調整。
101	横断 110~111・SK12	14世紀	土師器	皿	(10.4)	(2.0)	—	1/8	—	内面および外面上半手づくね調整、外面に指頭痕跡
102	街渠溝南・SK03	14世紀	土師器	皿	(11.2)	(2.0)	—	1/4	—	内面および外面上半手づくね調整、外面に指頭痕跡
103	街渠溝南・SK03	14世紀	土師器	皿	(10.2)	(1.5)	—	1/7	—	内面および外面上半手づくね調整、外面に指頭痕跡
104	街渠溝南・SK03	14世紀	土師器	皿	(7.3)	(1.7)	—	1/4	—	内面および外面上半手づくね調整
105	横断 110~111・SX05下層	13世紀	須恵器	鉢	(17.2)	(4.1)	—	1/8以下	—	体部は外反気味で口縁部を上方に拡張する。
106	街渠溝南・SK06	13世紀	須恵器	椀	—	(3.4)	—	細片	—	体部上方で小さく屈曲し、口縁部をとり気味に終える。
107	街渠溝南・攪乱	14世紀	須恵器	鉢	—	(2.6)	—	1/8以下	—	口縁部を上方に拡張する。
108	街渠溝南・SX02	17世紀後半	丹波焼	播鉢	(18.8)	(4.3)	—	1/8以下	—	近世。口縁部を内傾し玉縁状に肥厚させる。口縁下に区画線を引き播目境とする。
109	街渠溝南・SK01	近世後半	磁器	仏飯具	—	(2.9)	3.7	—	脚部	底部片。
110	街渠溝南・SK02	近世後半	染付	蓋	(14.6)	(2.5)	—	1/8以下	—	内面にかえりを持つ。外面天井部に環状文
111	横断 110~111・SX05 (下層)	近世後半	施釉陶器	皿	—	(3.5)	5.3	—	完存	肥前系磁器。見込みを蛇の目に軸ハギする。
112	横断 110~111・SX05 (刻印瓦)	近世後半	瓦	道具瓦	(14.3)	1.8	高 4.65	—	—	側面に銘「」が観察される。
113	西側道路 照明 (2層 黄褐色極細砂)	近世後半	瓦	道具瓦	(7.9)	(7.7)	高 (6.65)	—	1/8以下	道具瓦の破片。刻印有り。
114	1トレ (土器包含層)	14世紀	土師器	小皿	(8.0)	(1.8)	(7.6)	1/6	—	内面および外面上半手づくね調整、外面に指頭痕跡
115	1トレ (土器包含層)	14世紀	土師器	小皿	(7.5)	1.7	(1.8)	1/5	1/2	内面および外面上半手づくね調整、外面に指頭痕跡
116	4トレ	14世紀	土師器	皿	(10.4)	(2.7)	—	—	—	内面および外面上半手づくね調整、外面に指頭痕跡
117	4トレ	14世紀	土師器	皿	(10.4)	(2.1)	(5.8)	1/6	—	内面および外面上半手づくね調整、外面に指頭痕跡
118	5トレ	14世紀	土師器	皿	(13.7)	(2.5)	—	1/5	—	内面および外面上半手づくね調整、外面に指頭痕跡。いわゆる京都系土師器皿。
119	4トレ	14世紀	須恵器	鉢	—	(4.3)	—	1/8以下	—	東播系。口縁部を肥厚させ、端部を上方につまむ。
120	4トレ	14世紀	須恵器	鉢	—	(4.2)	—	1/8以下	—	東播系。口縁部を肥厚させ、端部を上方につまむ。
121	4トレ	14世紀	丹波焼	甕	—	(5.8)	—	1/8以下	—	稲荷山期の製品、口縁内面に凹線状の沈線をもつ。
122	4トレ	14世紀	丹波焼	甕	—	(8.7)	(23.4)	—	1/7	底部片。底部にトチン痕跡を持つ。
123	3トレ	17世紀後半	陶器	皿	—	(3.0)	9.1	—	完存	肥前系陶器。内面に刷毛目、5つのトチン痕跡を残す。

鉄製品観察表

No.	出土地点	時代	種別	器種	法 量			残存率	備 考
					口径	器高	底径		
F1	E10榦	不明	鉄製品	釘	6.0	0.9	0.6	完存	和釘で頭巻釘である。下半が折れ曲がる。

第28図 土器・陶磁器など出土遺物観察表3

## 第2節 近代の煉瓦・タイルなど

本節では近代の遺物のうち、陶磁器を除く煉瓦・タイル・碇子・ガラスを報告する。

### 1. 煉瓦

我が国の煉瓦建造物で現存最古の例は明治元（1868）年に建てられた、長崎製鉄所の小菅ドック巻き上機小屋である。また日本の近代化において必要不可欠なものの一つに製鉄があげられる。製鉄には耐火煉瓦が必要であり、その生産は嘉永3（1859）年、佐賀藩が最初とされている。以降、官営や民間企業の多くの建物、各種構造物等に煉瓦が多用される。これらの煉瓦構造物の多くは建替等により解体され、付近に投棄されたものも多い。

当遺跡で出土した煉瓦は建築用煉瓦（赤煉瓦）であり、別表のとおり、調査区R10南東の連系120、121、T7西側の攪乱坑や西側歩道橋付近の近代に相当する土層から出土している。調査時は今回報告する点数以上の出土はみたものの、兵庫県埋蔵文化財調査基準にもとづき、近代遺物で同種規格であることから、刻印を有するもの、形態・製法・焼成が異なる各種の選択的取り上げを行ったものを報告する。

当遺跡出土における構造物の一端が判る資料は西宮神社の東南に位置する重要文化財西宮神社表大門（通称：赤門）東方20m付近のT7柵南東1.5mおよびR10柵南4mにおいてイギリス積みの煉瓦塊が確認された。

### 製法と種類

煉瓦には木製の型枠に人手により粘土素地を押し込めて作る技法「手抜き技法」と機械により素地を練り出す方法「機械成型技法」などがあるが、当遺跡出土の煉瓦はすべて手抜き技法である。

手抜き技法による煉瓦は、平面の長辺両側近くに僅かな凹線が残る。その他の面は顕著な調整は見あたらず、全体的にナデ調整が伺える。

形状は長方形の立法体であるが、コーナーの一部に曲面をなすものがある。大きさは長さ212～238mm、幅98～115mm、厚さ52～51mmに収まる。

印には、B2に「SRK」山陽煉瓦株式会社、B3に社印「×」<sup>(1)</sup>の岸和田煉瓦株式会社と「二」の責任印<sup>(2)</sup>がある。B4には「賣」と考えられる印があり<sup>(3)</sup>、姫路市の豆腐町遺跡で、明治21年に開業した旧山陽鉄道姫路駅構内で煉瓦で構築された機関車用転車台が発掘され、「賣」の刻印された煉瓦も発見されている。B6・B7には「一」の責任印がある。

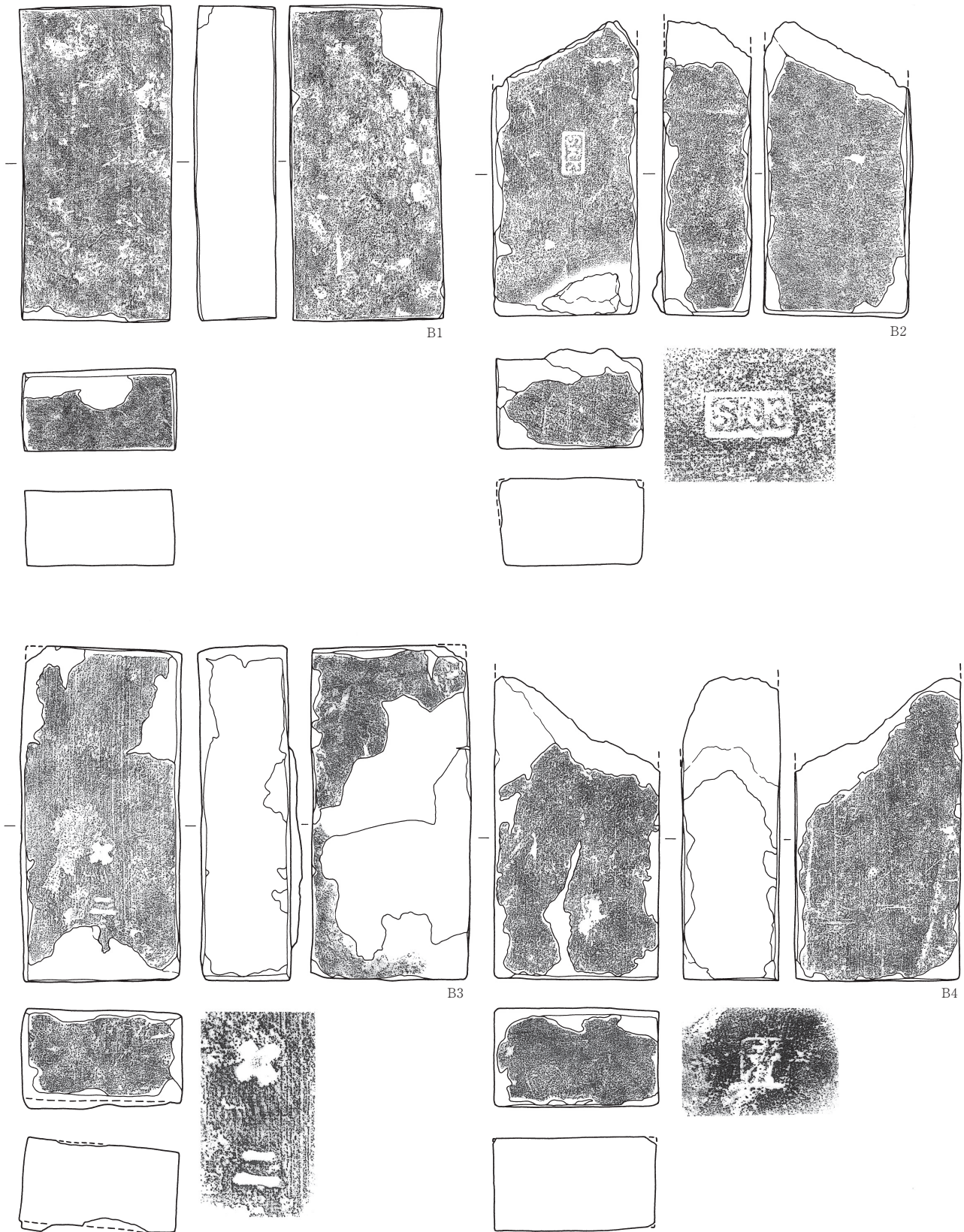
焼成についてはB8は焼成温度が低くオレンジ色を呈するが、他は茶色を呈する。

これらの煉瓦は規格や製作技法等の特徴から明治時代中頃から昭和30年代ごろに生産されたものと考えられる。また街路東側南端寄りのR10南4mから出土した煉瓦の塊では目地のモルタルが荒く、丁寧

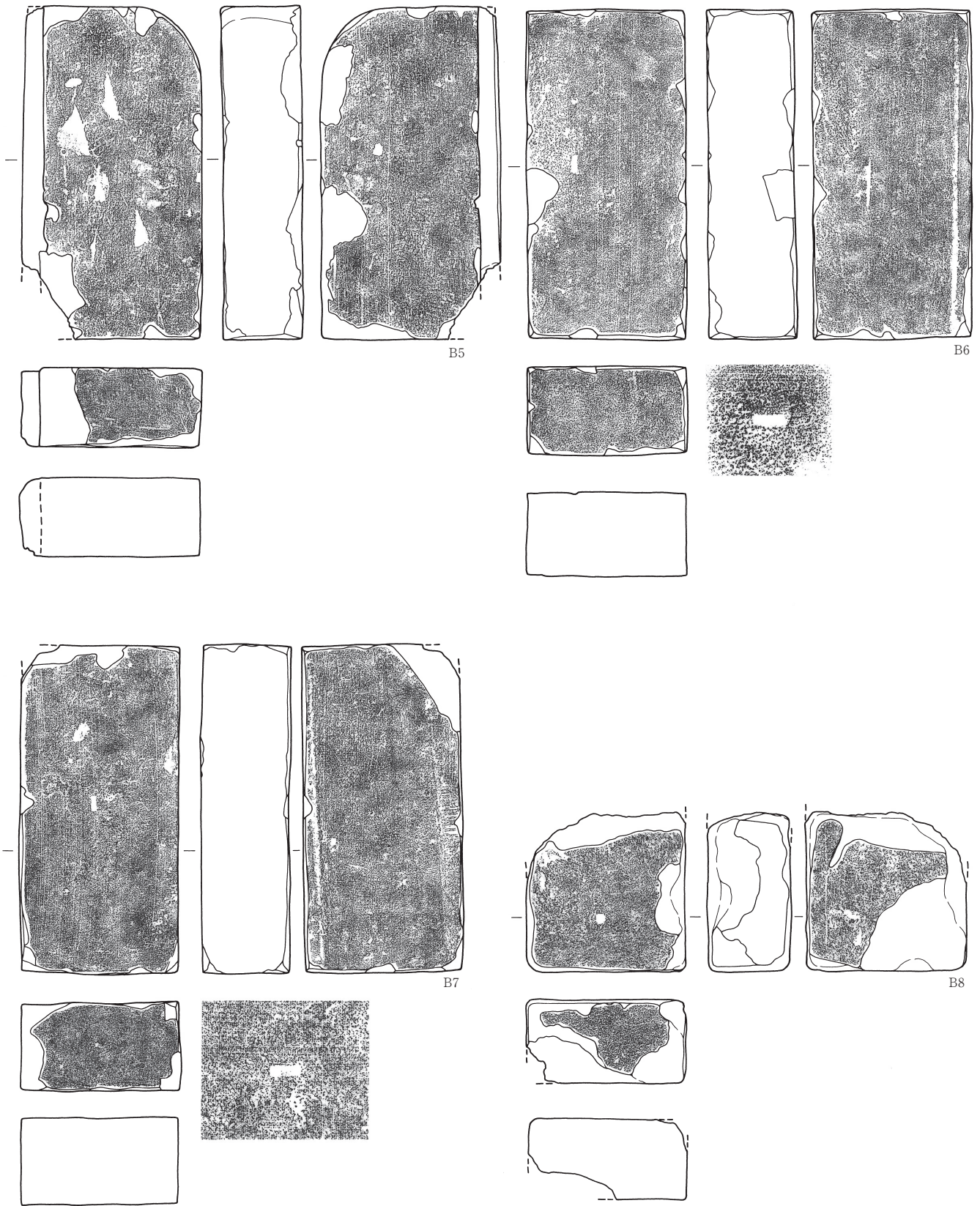
報告No.	出土地	成形	寸法mm ( ) 残存値			焼成	印など	生産者	備考
			長さ	幅	厚さ				
B1	T7柵 西側 攪乱	手抜き	220	103	52	良	長方形凹み		
B2	R10南東 連系120、121ガス管等掘方内	手抜き	(102)	98	60	良	SRK	山陽煉瓦(株)	
B3	R10南東 連系120、121ガス管等掘方内	手抜き	230	115	59	良	「×」「二」印	岸和田煉瓦(株)	
B4	T7 西側 攪乱坑	手抜き	212	115	64	良	四角凹み中に「賣」		「賣」印は旧山陽鉄道姫路駅構内転車台に使用例
B5	T8南34m GL-60cm	手抜き	238	115	55	良			コーナー煉瓦
B6	西側歩道橋横 外きよ 東側掘削	手抜き	235	111	60	良	「一」印		
B7	西側歩道橋横 外きよ 東側掘削	手抜き	235	112	61	良	「一」印		
B8	西側歩道橋横 外きよ 東側掘削	手抜き	(114)	112	56	不良			焼成温度低く軟質

第29図 出土遺物 タイル・煉瓦など 1 煉瓦一覧表





第30図 出土遺物 タイル・煉瓦など2 煉瓦実測図1



第31図 出土遺物 タイル・煉瓦など3 煉瓦実測図2

な仕上げが認められない。この状態の煉瓦は高砂市の旧東照館の煉瓦塀で見られるように、外面は比較的丁寧な仕上げがなされているのに対して、内面は粗雑な仕上げが見られることから、塀などに用いられた一部が投棄されたものかもしれない。その他、一端の隅が局面を示す煉瓦でコーナー煉瓦がみられることから、建物や造築物の局面をなす隅部分に使用されたものと考えられる。

## 2. タイル

当遺跡において出土したタイルは床面に使用された「床タイル」、建造物の内装に使用された「内装タイル」、外壁に使用された「外装タイル」、あるいは建造物の各所に使用された「モザイクタイル」等が出土した。出土箇所は別表のとおり、街路東側のT7やT8南方付近（西宮神社南大門から東に向かう旧街道付近）の攪乱坑など、近代に相当する土層から出土している。調査時は70点程度の出土はあったが、形態の全容が判明したもの、表面や裏面の文様等が明確な遺物を資料化した。

### タイルの種類

我が国における近代タイルの文様や裏型変遷を工業史として大略的に説明したものに「日本のタイル工業史」<sup>(4)</sup>がある。一方、近代のタイルを含む遺物を埋蔵文化財の対象として兵庫県南あわじ市北阿万伊賀野の珉平焼窯跡<sup>(5)</sup>を発掘した。その報告書において考古学的な類型分類、編年がはじめて報告された。珉平焼窯跡から出土した淡陶<sup>(6)</sup>製のタイルの素地や成形技法は陶器づくりの素地を用いる「湿式タイル」と、水分が少なく金型を用いて成形する「乾式タイル」に大別される。

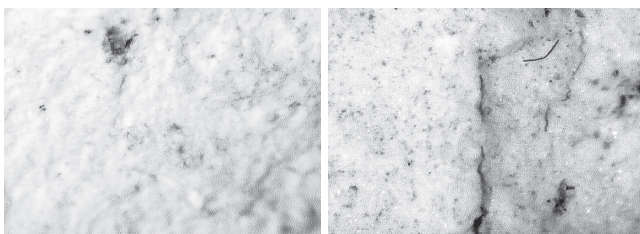
湿式タイルは前述のとおり敷瓦や陶器作りの流れをくむもので、主に明治20年代から本格的に生産されはじめ、明治後半に最盛期を迎え、その後は数量を減じながらも生産されている。

乾式タイルの生産は岩石等の粉末を水分が7%程度で練りあげたものを素地とし、表と裏面に金型で圧縮成形する。この金型技法が、明治41年に名古屋の不二見焼と淡路の淡陶により相次ぎ開発され、国内生産が本格化した。当時のタイル生産技術はイギリスを手本としており、規格は「吋:インチ」、文様は「ビクトリアン調」になっている。なお当遺跡からは湿式および乾式タイルはいずれも出土している。

湿式タイルはT1～T3の3点がある。いずれも街路東側で旧西国街道北側から出土したもので、6インチ（152mm）正方形、表文様には花文があり、3種釉薬を塗り分けられているところから型紙技法が用いられたと考えられる。また裏面調整はクシガキ7本単位による格子状の剥落防止の調整がある。素地はやや黄色味がかった白色系土を使用しており、規模・形態・調整は淡陶の湿式タイルと酷似する（第32図参照）。しかし淡陶の湿式タイルの出土品や現存品には型紙刷りと考えられる文様の施文手法はみられず、このタイルの生産者は特定できない。T3の裏面や側面には使用状態を表すモルタルが付着しており、二寸ばかりの間隔をおいて貼られていたことが判る。またタイル四方の側面は表面方向からの一瞬の加圧による剥離が見られることから、下駄等が勢いよく当たったため、剥離に至ったことが想

像される。したがってこのタイルは間隔を空けず床一面に敷き詰められたというよりは、庭先や通路などで一定間隔をおいて貼られた床タイルと考えられる。

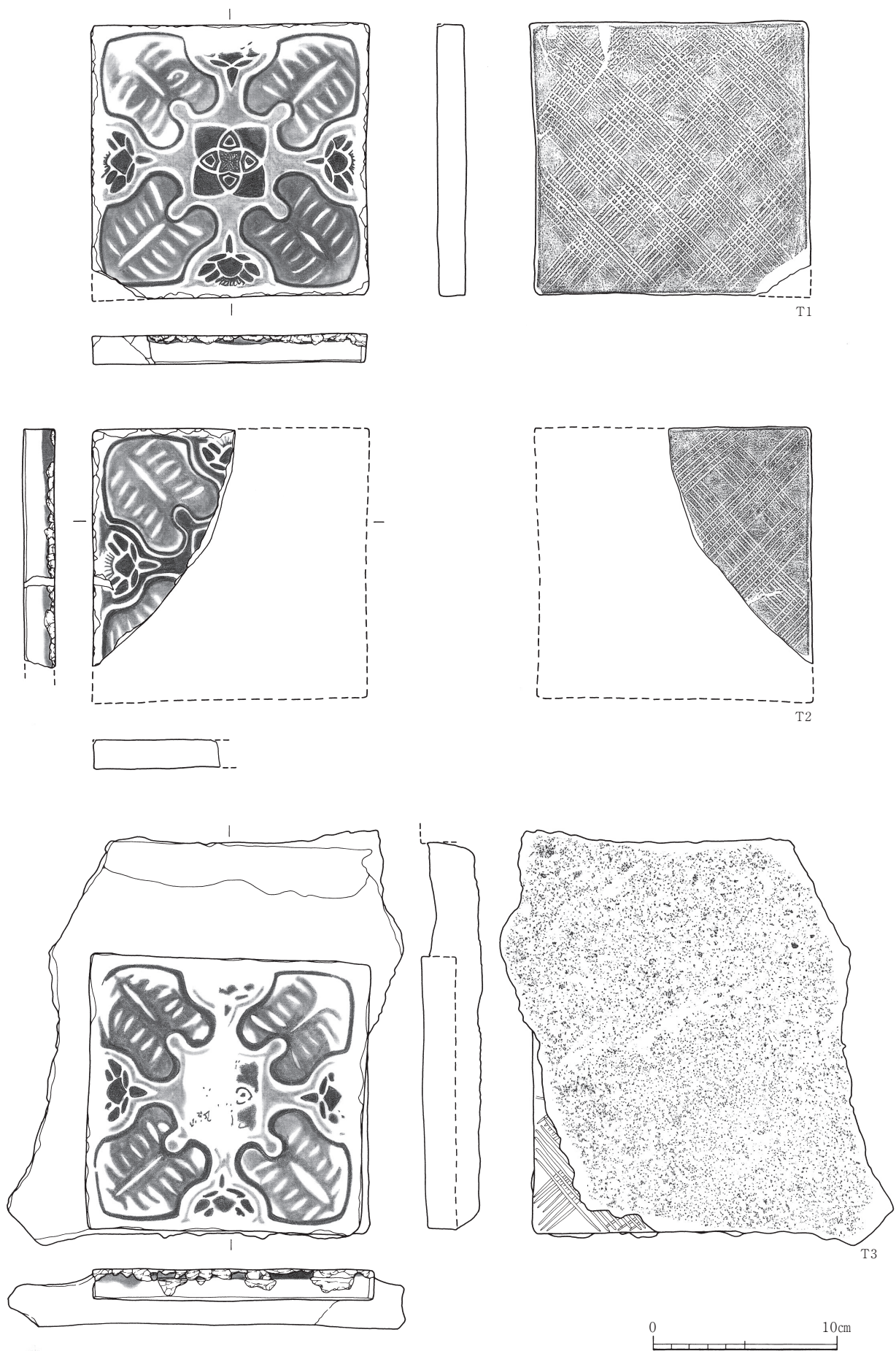
乾式タイルはT4～42の39点がある。T4～27は内装白無地タイル、T28～38は外装タイル、T39～42は各所に使用されたモ



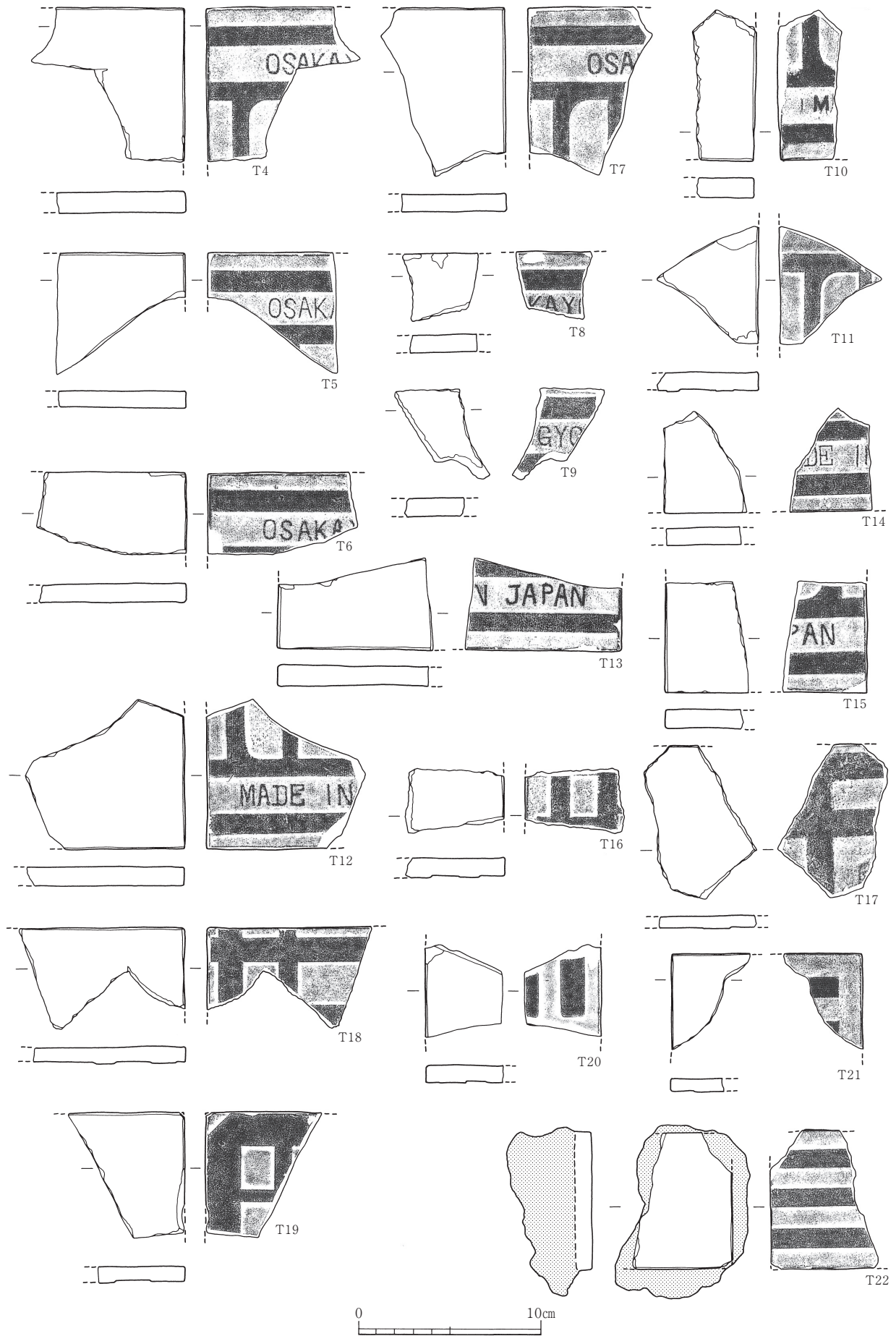
西宮神社遺跡 T2  
珉平焼窯跡 T9  
第32図 タイル・煉瓦など4 湿式タイル断面拡大写真

報告No.	出土地	成形	形状	形態	寸法mm( )残存値	表面	表色	裏面	生産者	その他
			縦横(インチ)		規模mm	表種別		裏・印など		
T1		湿式	6"×6"	正方形	(149×149)×14	草花文	緑・茶・黄	クシガキ7条は淡陶湿式タイルに酷似	不明	周縁に加压剥離多数あり床面タイルとして使用。
T2		湿式	6"×6"	正方形	(135×75)×16	草花文	緑・茶・黄	クシガキ7条は淡陶湿式タイルに酷似	不明	周縁に加压剥離多数あり床面タイルとして使用。
T3	T7 西側掘乱	湿式	6"×6"	正方形	(148×148)×16	草花文	緑・茶・黄	クシガキ7条は淡陶湿式タイルに酷似	不明	周縁に加压剥離多数あり床面タイルとして使用。
T4	T8南24m現代 下水掘方暗褐色土	乾式	6"×6"	正方形	(84×82)×10.5	無地	白	「OSAKA□」	大阪窯業	
T5	T8南24～27m 下水掘方	乾式	6"×6"	正方形	(67×65)×9	無地	白	「OSAKA□」	大阪窯業	
T6	T8南30m 雨水掘方 G.L.-80付近	乾式	6"×6"	正方形	(81×43)×10	無地	白	「OSAKA□」	大阪窯業	
T7		乾式	6"×6"	正方形	(68×92)×10	無地	白	「OSA□」	大阪窯業	
T8	T8南27～30m 下水掘方	乾式	6"×6"	正方形	(40×36)×9	無地	白	「□KAYO□」	大阪窯業	
T9	T8南30m 雨水掘方 G.L.-80付近	乾式	6"×6"	正方形	(48×48)×9.5	無地	白	「□GYO」	大阪窯業	
T10	T8南24～27m 下水掘方	乾式	6"×6"	正方形	(81×34)×10	無地	白	「M□」	大阪窯業	
T11	T8南24～27m 下水掘方	乾式	6"×6"	正方形	(62×55)×9	無地	白		大阪窯業?	
T12	T8南24～27m 下水掘方	乾式	6"×6"	正方形	(86×80)×9	無地	白	「MADE IN□」	大阪窯業	
T13	T8南25m 東への引込122 G.L.-40cm 5YR3/2 暗赤褐	乾式	6"×6"	正方形	(85×48)×10	無地	白	「□N JAPAN」	大阪窯業	
T14	E11棟 2層 灰黄粗砂 掘乱	乾式	6"×6"	正方形	(45×55)×9	無地	白	「□DE IN□」	大阪窯業	
T15	T8南27～30m 下水掘方	乾式	6"×6"	正方形	(45×61)×10	無地	白	「□PAN」	大阪窯業	
T16	T8南27～30m 下水掘方	乾式	6"×6"	正方形	(36×53)×10	無地	白	四角区画	佐治タイル?・佐藤タイル?	大正～昭和初期?カタログ9版に類似(ダントー所蔵)
T17	E11棟 2層 灰黄粗砂 掘乱	乾式	6"×6"	正方形	(60×82)×6	無地	白	縦横区画、中央に印(シャチ?)	不二見焼?	昭和10～20年代
T18	T8南25m 東への引込122 G.L.-40cm 5YR3/2 暗赤褐	乾式	6"×6"	正方形	(88×54)×8	無地	白	縦横区画。民平報告E2・E3類似	不明	
T19	T8南24～27m 下水掘方	乾式	不明	不明	(63×68)×8.5	無地	白	凹四角、隅切三角	不明	
T20	E11棟 2層 灰黄粗砂 掘乱	乾式	6"×6"	正方形	(40×50)×9.5	無地	白	淡陶裏型F類	淡陶	
T21	T8棟 連系126 表土直下掘乱内	乾式	4.3"×4.3"	不明	(52×43)×6	無地	白	横凸帯。淡陶B12途切れ類似	淡陶の可能性も?	
T22	T8南24～27m 下水掘方	乾式	3"×?	不明	75×(60)×8	無地	白	凹4条、凸3条	不明	
T23	T7棟 東側掘乱	乾式	6"×6"	正方形	(99×110)×8	無地	白	縦横区画内細線「OSAKA YOGYO □社印 MADE IN□」	大阪窯業	
T24	T8南25m 東への引込122 G.L.-40cm 5YR3/2 暗赤褐	乾式	6"×6"	正方形	(86×86.5)×8	無地	白	◇DK淡陶6"型式	淡陶	昭和10年代
T25	T8南25m 東への引込122 G.L.-40cm 5YR3/2 暗赤褐	乾式	不明	正方形	(33×27)×6	無地	白	細横線+印?	淡陶?	
T26	T8南25m 東への引込122 G.L.-40cm 5YR3/2 暗赤褐	乾式	不明	不明	(44×45)×7	無地	白	横凹線(淡陶G系?)	淡陶?	
T27	T8棟 連系126 表土直下掘乱内	乾式	6"×6"	正方形	(50×40)×7	無地	白	横細線	淡陶?・日本タイル工業?	雑司ヶ谷出土日本タイル工業・流道跡出土淡陶に類似
T28	T8南27～30m 下水掘方	乾式	二丁掛?	長方形	62×(49)×16	微細な凹凸	青緑	平坦	不明	
T29	T8南24m現代 下水掘方暗褐色土	乾式	二丁掛	長方形	226×61×13	微細な凹凸	青緑	凸横線4条。朝日印「日の出」文字	日の出?	
T30	T8南30m 雨水掘方 G.L.-80付近	乾式	6"×3"?	長方形	62×(70)×12	無地	白	凸横線5条	不明	
T31	T8南24～27m 下水掘方	乾式?	6"×3"?	長方形?	(68×44)×10	擬石	茶褐	横凸帯	不明	
T32	T8南24～27m 下水掘方	乾式	二丁掛?	長方形?	62×(48)×10	線状	薄茶まだら	凸横線5条	不明	
T33	R10棟 南側 掘方内	乾式	二丁掛?	長方形?	61×(46)×12	線状	茶	凸横線2条	不明	
T34	R10南5m ヒューム管掘方内	乾式	二丁掛	長方形	61×(63)×10	方形凹凸	茶系	凸横線2条	不明	2丁掛・T8と同一文様。同上
T35	R10南5m ヒューム管掘方内	乾式	二丁掛	長方形	61×(91)×10	方形凹凸	茶系	凸横線2条	不明	2丁掛・T9と同一文様。戦後?生産。雑司ヶ谷ゾウエイL区K-20-1と表面文様同一。裏凸4条
T36	T8南17～24m G.L.-65cm 褐灰粗砂	乾式?	二丁掛?	長方形?	59×(60)×10	擬石	灰褐	横凸帯3条	不明	
T37	T8南17～24m G.L.-65cm 褐灰粗砂	乾式?	二丁掛?	長方形?	60×(33)×9.5	擬石	灰褐	横凸帯3条	不明	
T38	T8南17～24m G.L.-65cm 褐灰粗砂	乾式?	二丁掛?	長方形?	62×(48)×11.5	擬石(モルタル付着)	クリーム色	横凸帯3条	不明	
T39	T8南24～27m 下水掘方	乾式	6"×6"を小口に改変?	長方形	55×(31)×6	無地	白	四角凸帯内数字?印	不二見焼?	表2次焼成?。一方カットして使用
T40	T8南24～27m 下水掘方	乾式	不明	正方形?	(40×28)×4	凸	青	平滑	不明	
T41	T8南24～27m 下水掘方	乾式	1"×1"	正方形モザイク	25×25×4.5	無地	乳白	横凸帯3条	不明	磁器質
T42	T8南24～27m 下水掘方	乾式	6"×1.6"	竹割り	40×(90)×9.5	無地	白	平滑	不明	

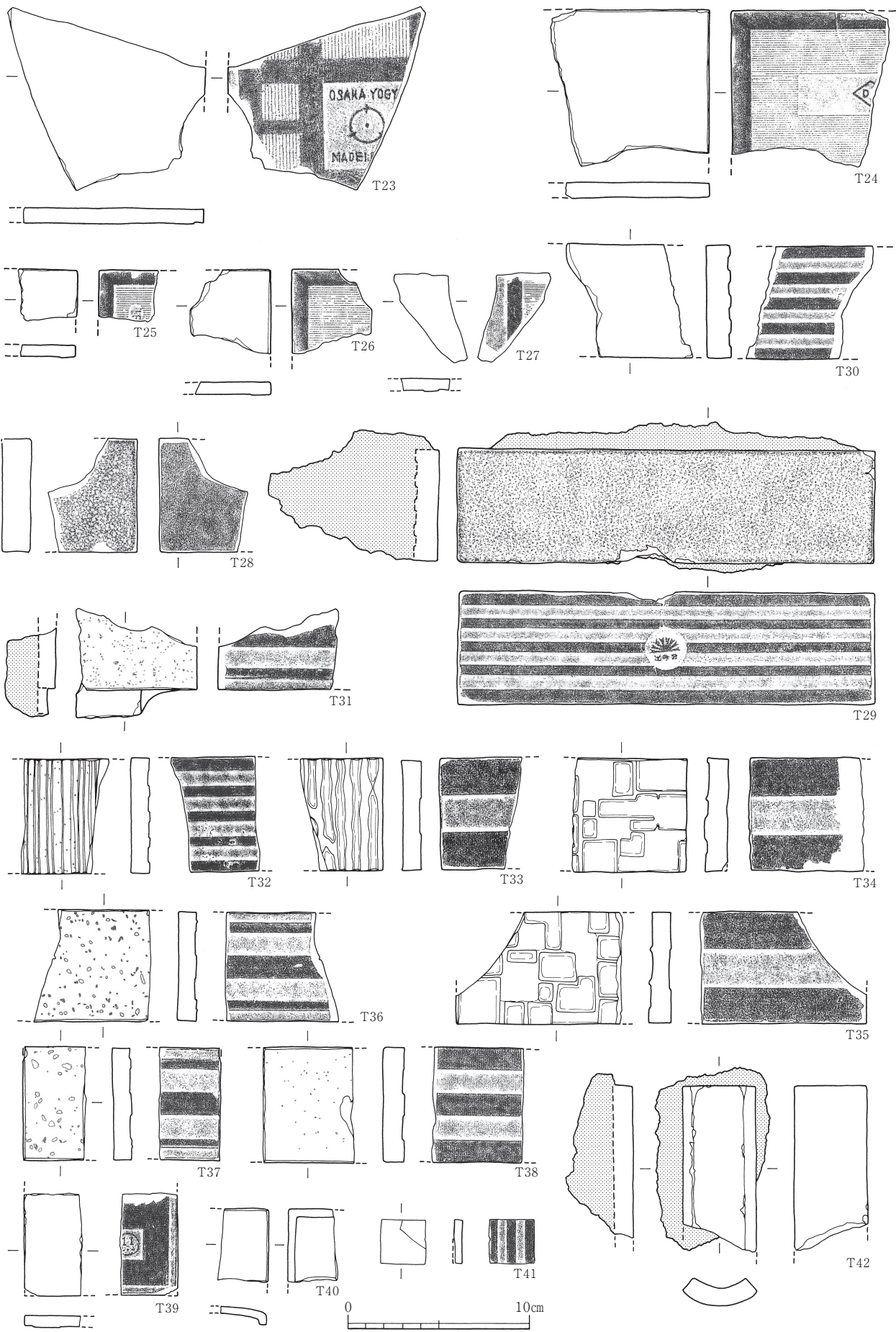
第33図 出土遺物 タイル・煉瓦など5 タイル一覧表



第34図 出土遺物 タイル・煉瓦など6 タイル実測図1



第35図 出土遺物 タイル・煉瓦など7 タイル実測図2



第36図 出土遺物 タイル・煉瓦など8 タイル実測図3

ザイクタイルや役物タイルである。

T4～15は6インチ正方形の白無地タイルで、裏面上段には「OSAKA YOGYO」下段には「MADE IN JAPAN」のアルファベットが見えることから大阪窯業<sup>(7)</sup>の製品と判明した。ただし裏面中央部は出土しておらず社印の有無等は不明である。なお裏面文様構成は淡陶裏型Cタイプと似るほか、神山陶器<sup>(8)</sup>など当時多数存在した日本のタイル生産各社が同類の裏型文様を大正時代中頃～後半頃に使用していた。大阪窯業がタイル生産を開始したのは大正10年であることからこのタイプの裏型を持つタイルの時期は大正時代後半ごろと考えられる。T16は6インチ正方形のタイル周縁に近い部分であり、佐治タイルか佐藤タイルの裏型と同様であるが中央の社印部分が不明であることから、いずれの生産者であるのかは断定できない。なお両社のカタログの一部が保存されており、その使用年代から本製品は昭和時代初期ごろの生産品と考えられる。T17は社印の一部と考えられる凸部が残る。外周の5mm幅の枠が一段薄くなり、幅18mmの方形区画、中央部の2段に区画された中に文字或いは文様の一部がある。またT39は外周が5mmが薄くなっており、20mmの間隔において17mmの方形区画がある。この区画の中心に円形の皿状の凹みがあり、数字状の文様が残る。T17の裏型にみえる二段の方形区画には「シャチ」マークが向かい合い、その尾の一部に「TRADE MARK」の文字の一部が残る部分と考えられる。これらから不二見焼<sup>(9)</sup>タイルの裏型で四隅の方形区画内に円形凹みがみとめられることからこの部分に相当するものと考えられる。このタイプの裏型を使用したタイルはシンガポールのプラナカン(Peranakan)文化<sup>(10)</sup>の建造物にも使用されている。T39は残存部中心付近に印はあるが社印ではなく、四隅に刻まれた生産ライン番号等の符号であると考えられる。なお外縁の一段薄くなるタイルの生産時期は昭和10年頃と考えられる。T18は淡陶裏型E2に類似するが、凸帯の幅に違いがあり、生産者は限定できない。淡陶の編年を参考にすれば、外縁が一段薄くなる手法から昭和初期ごろの可能性はある。T19は裏面に長方形の凹部区画があり、隅は焼き締め効果を上げるために薄く仕上げたものである。生産者は不明である。T20は淡陶の裏型F類の一部で6インチ正方形である。T21は4.3インチ正方形と考えられ、裏型は淡陶B12に類似する。T22は3インチ正方形の可能性はあるが、生産者は不明である。T23は社印が「○」と「三方に伸びる線」を組み合わせたマークがあり、社名は「OSAKA YOGYO」と「MADE IN」が確認できることから大阪窯業の製品であることが判明した。なお方形区画内に細線があることから昭和10年以降の製品と考えられる<sup>(11)</sup>。T24は淡陶裏型G1であり、外周は縁辺に向かって薄くなる。昭和10年から戦後のものと考えられる。T25～27は外周縁辺にかけて薄くなり、その内側は細線で構成され、淡陶の製品に似る。昭和10年から戦後までのものと考えられる。

T28～38は外装タイルである。T28～29は緑色の凹部文様の二丁掛タイル<sup>(12)</sup>である。T29の裏面には5条の凸部と4条の凹部があり、中央に「朝日印と下に日の出」の文字がみられるが、現段階では生産者は不明である。なお青緑色系の発色は昭和初期に生産されたものと考えられる。T32～33は二丁掛の線状タイル<sup>(13)</sup>である。T32は直線的な筋があり、線状タイルである。T33は太い線条を押し引いた文様が見られる。主に昭和10年代に流行したものである。T34～35は方形凹凸が配置された二丁掛タイルである。これらは同型のもので、生産者を記す社印等はない。出土例としては東京都豊島区雑司が谷遺跡<sup>(14)</sup>、使用例は神戸市中央区元町の松尾ビル、大阪市淀川区西三国3丁目の集合住宅門柱、台北市迪化街や康定路などのビル外壁や柱に見られる。使用時期の明確なものとして松尾ビルは大正14年に竣工しているが、昭和30年の増築部に使用されている。西三国の集合住宅は昭和8年、台湾の資料については北投タイルで生産されていた可能性があり、昭和戦前から戦後(昭和30年ごろ)にかけての生産品と考えられる<sup>(15)</sup>。





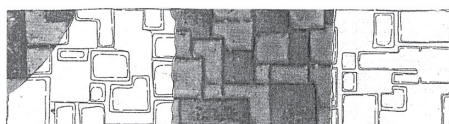
T4～T15 (大阪窯業) T23 (大阪窯業) 社印等 T24 (淡陶) T29 (日の出)

第37図 出土遺物 タイル・煉瓦など9 タイル裏面の社印等集成図

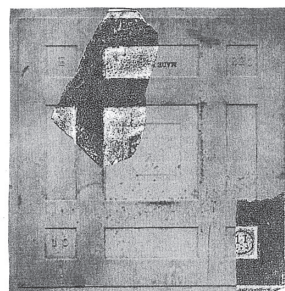
T36～38は褐色地に灰色の斑点を施し、花崗岩を模した「擬石タイル」である。主に外壁に使用されたものと考えられる。ビル等への使用年代から大正末～昭和初期に生産された可能性がある。T40～41はモザイクタイルである。T40は表面が大きく凸部をなし、青色を呈する。昭和戦前から戦後にかけて生産されたものか。T41は乳白色を呈するモザイクタイルである。戦後の生産か。T42は白無地の竹割り状で内面に施釉されていることから、この面を見せるように仕上げられている。主に大正時代～昭和戦前にかけて生産されたと考えられる。

裏型 (第37・38図参照)

裏型の全容としてタイル裏面に残る社印については、裏型の特定ができて社名等が明確なものは、「大

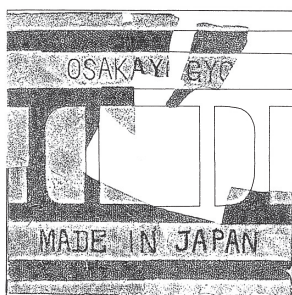


T34・35  
表文様全容

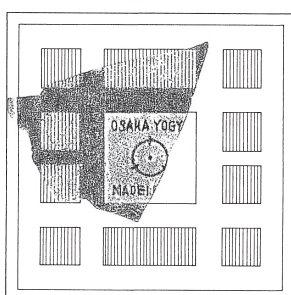


T17・39 (不二見焼)

阪窯業・淡陶・佐治タイル或いは佐藤タイルがあり、推測されるものとして不二見焼がある。その他に日の出印が社名であればこれらに追加することができる。



T4～15 (大阪窯業)

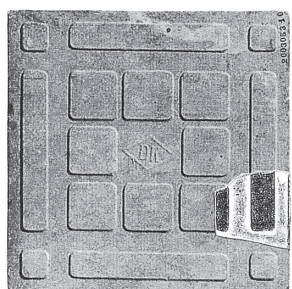


T23 (大阪窯業)

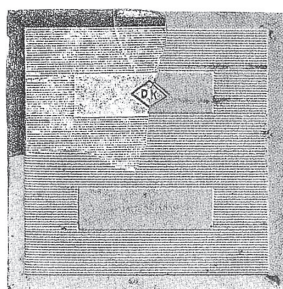


T16 (佐治タイル或は佐藤タイル)

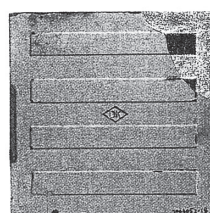
大阪窯業のタイルには二種類あり、T4～T15はアルファベットで「上段にOSAKA YOGYO 下段にMADE IN JAPAN」が浮き彫りされている。裏型の型式は不二見焼にも見られるもので、大正時代後半のタイルと考えられる。



T20 (淡陶)



T24 (淡陶)  
裏型全容



T21 (淡陶?)

第38図 出土遺物 タイル・煉瓦など10 タイルの表文様及び裏型の全容

T23は四角の区画

内に細かな凹凸線があり、中央区画に「○」と三方に向かって伸びる線を組み合わせた社印を示し、「OSAKA YOGYO」の文字が見えるものである。このマークは四角の区画内に細かな線が入るものは昭和10年頃から見られる。大阪窯業についてはタイル生産は大正時代10年に京都府向日町の工場にて生産された記録はあるが、製品の実態は不明であった。今回発掘された大正時代後半と昭和10年代の資料と考えられる資料のほか、赤穂市田淵氏邸の炭小屋に収蔵されているタイルの中に大阪窯業の小口タイルがある。社印が明確で、厚さが6mmと薄いことから昭和戦前の製品と考えられる<sup>96</sup>。大阪窯業は煉瓦生産の大手企業として社印も知られているが、タイル製品については不明な状態であった。今回の資料は今後の近代遺物の時代の指標となろう。

佐治タイル或いは佐藤タイルの資料は昭和時代初期と考えられるカタログ<sup>97</sup>に掲載されているものと同型である。幅15mm程度の凸線が方形に配置され、中央部に社印が施される。この資料は中央部が欠損するため社名は判読できないが、これまでの裏型調査においては前述の2社が想定できる。なお両社の裏型変遷についてはこの型以外の型式は不明である。

淡陶の製品と判明した資料の内、T20は珉平焼窯跡の出土遺物にあり、裏型F類である。中央の社印は欠損しているが、方形の凸部が配置されており昭和時代初期から戦前にかけて生産されたものである。T24は同報告のG類にあたり、昭和10年頃から戦後にかけて生産されたと考えられる。T25やT26は同系統の細線が見られるが、細片のため断定できなかった。

タイルの変遷は主に裏型の型式分類によりその変遷を追うことが可能である。

これらの中で、もっとも古いのは湿式タイルT1～3である。裏面のクシガキ調整は明治時代後半頃のものと考えられる。乾式タイルは生産初期に当たる明治時代末から大正時代前期のものは見あたらないが、大正時代後半と考えられるものには大阪窯業の資料がある。大きな文様の流れとしては淡陶や淡路製陶、不二見焼のものと似る。いずれも上部に「社名」、中央に「社印」、下部に「MADE IN JAPAN」の配列が見られ、アルファベット表記は輸出を意識した製品である。この時期は四方の隅部の三角形部分を薄く仕上げる手法は見られない時期である。

続く時期は昭和時代初期の資料であり、淡陶のFタイプの裏型の存在から判る。また佐治タイル又は佐藤タイルもこの時期であろう。なおこの時期は我が国のタイルメーカーは数十社におよぶ窯業の隆盛期であり裏型が多様化される時期にもあたる。

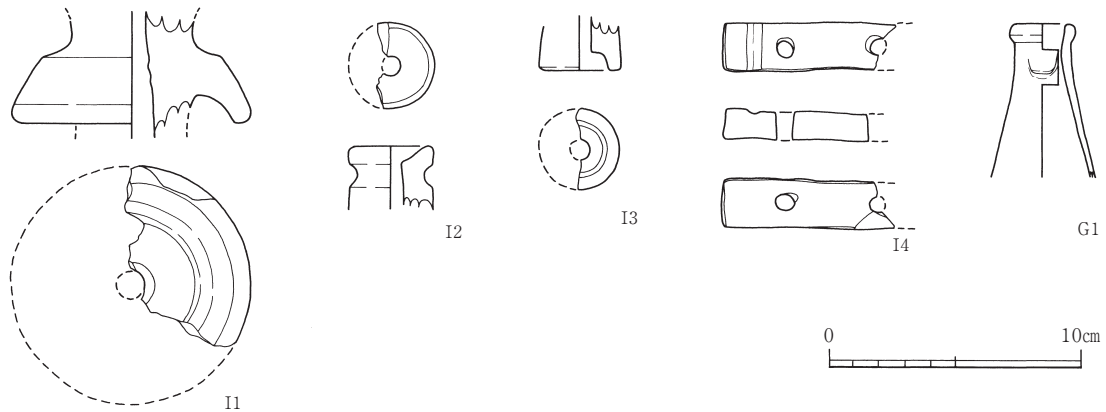
昭和10年代の資料として細線による裏型をもつ淡陶を代表とするものがある。その他の特徴として裏側全体に白色系の釉薬の痕跡があり、厚さが薄くなっていることから判る。

### 3. 碇子

当遺跡で出土した碇子は4点があり、電力線等の通電遮断のための磁器製絶縁体である<sup>98</sup>。別表のとおり、街路の東方T8から南24m付近の下水管堀方から集中して出土した。

I1は茶台碇子と考えられる。直径90mm、残存高50mmで、光沢のある白色系の磁器質である。外形はすばまった上部から、下方にかけて傘型に広がり下端は欠損する。中心部分には10mmの孔が貫通する。全体形状は上方に傘型のものもう一つあり全長は90mm程度の中型のものであろう。茶台碇子は通常高圧配電線の引留用の絶縁部に用いられる。時期は同時に出土した遺物等から昭和30年以前のものと考えられる。

I2はノップ碇子と考えられる。直径31mm、残存高25mm、白色で磁器質である。全体は筒状を呈し、外



第39図 出土遺物 タイル・煉瓦など11 罫子・ガラス実測図

報告№	名称	出土地	形態	質	規模mm
I1	茶台罫子	T8南24~27m 下水掘方	ラッパ状	磁器質	径90×h(50)
I2	ノップ罫子	T8南24~27m 下水掘方	筒状	磁器質	径31×h=(25)
I3	ノップ罫子	T8南24~27m 下水掘方	筒状	磁器質	径34×h=(25)
I4	クリート罫子	T8南34.5~38.5m G. L.-60cm	棒状	磁器質	(68)×18×12

第40図 出土遺物 タイル・煉瓦など12 罫子一覧表

報告№	出土地	形態	成形	規模mm	表色	生産者
G1	T8南30m 雨水掘方G.L.-80付近	ボトル口部	合わせ製法、内側に凸部	h=60 口径25	透明	不明

第41図 出土遺物 タイル・煉瓦など13 ガラス一覧表

面上部に近い部分で幅8mmの凹部が巡る。上部内面はすり鉢状に凹み、中央には8mmの穿孔がある。この種の罫子は電気絶縁させるため、天井などに配線をする時にコードをむき出しにして固定する部分に使用された物であろう。I3もノップ罫子の下端と考えられる。下端内側は26mm程度凹み、中央に5mmの孔が貫通する。同時に出土した遺物等から昭和30年以前のものと考えられる。

I4はクリート罫子である。復元長84mmの棒状を呈し、断面は長方形を呈する。上面両端付近に電線を通すための凹みがあり、中心寄り2カ所に止め穴がある。一般家屋や小規模建築の内部配線で2つ一組で、溝に電線をはさんで配線し断縁固定支持台として使用する器具である。同時に出土した遺物等から昭和30年以前のものと考えられる。

#### 4. ガラス

当遺跡で出土したガラス製品としては瓶1点が、T8南30mの水道管掘方から出土した。

G1は口径25mm、残存長60mmで胴体以下が欠損する液体瓶である。ガラスは若干白濁しており、内部には気泡が若干入ることから透明感に欠ける。口縁部外側には王冠を被せるための突起があり、口縁内面の上方にはガラスの凸部がみとめられ、中央部に合わせ目があることを考慮すれば、合わせ技法により成型された痕跡であると考えられる。この製法は近代全般にわたり用いられたものである。形態から主に昭和戦前から30年代を中心に生産されたものと考えられる。

#### 5. 遺物からみる近代の西宮神社周辺

西宮神社の南東に位置する重要文化財西宮神社表大門（通称：赤門）東方には西国街道が延びており、神社創建以来、商家や集落等が立ち並んでいたと考えられる。これらの集落は現代に至るまで継続して存在しており、各時代の文献等でも確認することができる。ただし近代の当地域の建物について詳細に記載されたものはなく、今回出土した遺物が往時の建物の外壁等の一端を忍ぶものと考えられる。

出土した遺物の多くは近現代の埋設管敷設による掘方部分からのもので、遺構や純粋な包含層ではない。しかし埋め戻し材料には近隣の土砂等が一般的に用いられたと考えられることから、遺物は周辺の

西暦	時代	外装・床・モザイクタイル(表・裏)	内装タイル(裏)
1900	明治		大阪窯業 淡陶 佐治・佐藤 不二見焼 不明
1910			
1920	大正		
1930			
1940	昭和 (戦前)		
1950			
1960	昭和 (戦後)		
1970			

スケール1/8

第42図 出土遺物 タイル・煉瓦など14 タイル消長表

建物等の状況を示すものと考えられる。

なお今回の調査では東側の調査区での出土遺物が多数を占めている。これは街路西側にあたる西宮神社の東辺は重要文化財の表大門やそれにとりつく重要文化財の大練塀が中世以来存在していることから、当然、西側には存在せず、遺物も極端に少ない。これに対して街路東側は近代の遺物が多く見られることから集落が展開していたことが判る。

また煉瓦は構造物の一端を示す塊で出土しているが、鉄筋やコンクリート等とは一体化しておらず、しかも塊の一面が目地がはみ出すなど仕上げは雑なため、個人住宅に伴う花壇や塀などに使用されたものと考えられる。

タイルには床タイル、外壁タイル、内装タイル等がある。床タイルは庭園の通路等に飛び石状に配されることもある。外壁タイルには大正時代から昭和初期に流行ったものが含まれており、付近のビルに使用されていた可能性がある。また白色無地の内装タイルはビルや一般家屋にも使用されることから、それらの建造物に使用されたものかも知れない。また未検出であった湿式タイルや全容が不明であった大阪窯業の乾式タイル裏型の二例が判明するなど、今後の近代遺跡や近代化遺産の時期決定等に有効な資料になると考えられる。

#### (参考文献)

- 日本のタイル文化編集委員会編.1976.『日本のタイル文化』淡陶株式会社  
柿田富蔵ほか.1991.『日本のタイル工業史』株式会社INAX  
山本正之ほか.1983.『日本のタイル』INAX出版  
世界のタイル博物館編.2000.『世界のタイル・日本のタイル』INAX出版  
堀込憲二ほか.2003.『流光凝煉方寸間』臺灣與荷蘭老磁磚展 臺北縣鶯歌陶瓷博物館  
佐藤一信ほか.2004.『ゴッドフリート・ワグネルと万国博覧会』愛知県陶磁資料館  
酒井一光.2006.『窓から読みとく近代建築』学芸出版社

#### (註)

- 1 「×」は大阪窯業(株)創業者の山岡尹方がキリスト教徒であったことからセント・アンドリュース・クロスから用いたもの
- 2 責任印は作業者が仕事を行った証を印に記す行為として押印したと考えられる。
- 3 「賣」の判読や類例については兵庫県立考古博物館長濱誠司の教示による。
- 4 柿田富蔵ほか「日本のタイル工業史」INAX出版 1995
- 5 珉平焼窯跡は南淡路広域農道事業により発見され、兵庫県教育委員会が平成15(2003)年、江戸時代から近代にわたる窯跡の作業場や物原を発掘調査した。我が国でも希少な近代を中心とした窯業資料である。珉平焼は淡路島の南、伊賀野の庄屋に生まれた賀集珉平が文政元年(1818)に京都の陶工、尾形周平に師事し、珉平焼(淡路焼)を創業した。以来、多種多様な造形や釉薬技法により阿波藩の国焼きとして全国に珍重された。また、明治18年(1885)地元有力者が珉平焼の後を継ぎ、淡陶社を設立し陶磁器・工芸品等を生産した。
- 6 淡陶株式会社は商法改正により明治26年(1893)に株式会社として組織され、国内外向け洋陶磁器・工芸品・タイル等を生産した。この頃には湿式タイル(陶板・本業敷瓦)も製作したとされる。江戸時代以来培った焼成・釉薬などの技法をタイル作りに遺憾なく発揮し、明治41年には乾式タイル製法に成功し、大正・昭和とタイル生産をリードしてきた。日本のタイルはイギリスのタイルに比べて見劣りしない品質と価格を武器に、アジアをはじめ、全世界に輸出され、建物の外装や内装に多用された。淡陶は昭和50年「ダントー株式会社」に名称変更し、現在も伝統あるタイルメーカーとして生産が続けられている。
- 7 大阪窯業(株)は明治27年京都府向日町で設立された。主に赤煉瓦を生産し、大正6年には愛知県の平坂煉瓦(株)を買収し、普通煉瓦、貼付煉瓦、テラコッタを製造した。大正10年から向日町の工場でタイルを生産した。
- 8 神山陶器は戦前、大阪市南区大和町に本店を構え、三重県伊佐具町にて工場を設けて硬質陶器やタイルを生産した。タイル裏面の社印は三つ葉のクローバである。
- 9 不二見焼は村瀬美香と村瀬亮吉が明治12年に食器製造を開始し、明治41年に不二見焼(陶)を設立し、同年に我が国最初の乾式タイルの製法に成功した。
- 10 プラナカン(Peranakan)文化は現在のシンガポール・マレーシアのマラッカ・ペナンにおいて15世紀以降、中国とマレー半島の人々により育まれた融合文化である。近代のプラナカン文化の建造物には英国などのヨーロッパや日本製タイルが多数使用されている。
- 11 日本のタイル工業史や台湾鶯歌陶瓷博物館の『台湾與荷蘭老磁磚展』図録に細線のタイルが紹介されている。
- 12 二丁掛タイルの規格は長さ227mm、幅60mm煉瓦の小口の大きさが二つ分であることから二丁掛と呼ばれている。
- 13 スクラッチタイルは金属線でタイル素地を引っ掻いて密な線を模様としたもの。この引っ掻き傷を模し金型で成形し線状の文様を付けた物を線状タイルと仮称する。
- 14 雑司ヶ谷遺跡では近代の遺物としてタイル等が多数出土した。実見にあたっては両角まり氏に配慮を賜った。
- 15 台湾中原大学建築学系堀込憲二先生、大阪歴史博物館学芸員酒井一光氏にご教示いただいた。
- 16 田淵新太良氏、赤穂市教育委員会に協力いただいた。
- 17 岐阜県多治見市の丸栄(株)に所蔵される「SAJI TILE Catalogue 第9版などにある。実見にあたっては加藤英二氏に配慮を賜った。
- 18 磚子の名称、用途、時期等については日本ネットワークサポート(株)(旧大阪陶業)三浦章弘・笹岡毅志・中後浩一郎・喜多守幸、(株)奈良サンテック西本雅人の諸氏にご教示を得た。

## 第5章 まとめ

本項では時代ごとに調査成果をまとめると共に、昭和54年度調査の成果との比較を行いながら若干の検討を行いたい。検出された遺跡の時期を列記すると、①弥生時代後期～古墳時代初頭、②13世紀後半～14世紀前半頃、③15・16世紀頃、④江戸時代後半、⑤近代などが挙げられる。

### 1. 弥生時代後期～古墳時代初頭

この時期の成果としては土器群の出土がある。昭和54年度調査などの既往調査の成果も合わせ、周辺に当該期の海浜集落が立地した可能性が一層高まった。また、これらのうちE10柵断面a-a'周辺の5・5'層(黒褐色砂層)から出土した遺物群の存在は下層包含層の存在を疑わせるものであった。同層に併行する可能性のあるものとして北側のE11柵・T7柵・R10柵の6層が考えられるが、今回はE10柵地点以外からは遺物の出土は認められなかった。

### 2. 13世紀後半～14世紀前半頃

この時期については西宮神社東側歩道の広い範囲(西宮港線)で13世紀後半～14世紀前半を中心とする遺構面が確認され、西宮港線周辺における南北方向の遺跡の広がりが明確になった。つまり、昭和54年度調査で本遺跡は神社境内および東側に形成された砂堆上に立地するとされたとおり、今回の調査においても表大門東側を頂点に北側約30～40mほどの範囲まで遺構面が確認されている。このことから遺跡の立地と砂堆地形が密接な関係にあることが改めて検証された。

西宮神社境内の南側には「市庭」の地名が存在し、この市が中世の西宮の町形成にとって大きな役割を果たしたといわれているが、昭和54年度の調査および今回の調査地はこの市庭の隣接地に当たる。昭和54年度の調査によれば出土層位は攪乱を受け上下の時間的な差は追えないが、遺物個々の年代は前述の弥生時代後期～古墳時代初頭を始めとして、12～14世紀前後、中世後半段階の各時期のものがあるという。さらに中世前半の12～14世紀段階のものには中国産の褐釉陶器・磁器や瓦質土器の火鉢、瓦器椀・皿・須恵器椀・鉢・甕など、量とともに器種組成の点でも豊富なものが認められる。また、土師器皿についても12～14世紀という長期に及ぶことから多くの形式のものが含まれている。このように市庭に隣接する周辺では量・器種組成の上でも今回の調査成果を上回る内容が認められた。これらの成果からするとこの周辺が経済拠点であると考えても差支えはないであろう。これに比べると今回の調査地点はこの外縁部にあるもので、遺物の組成が単純であることや、時期的に前者より後出である点があげられ、市庭の東側において13世紀後半に町場が拡大することに伴って発展した場所とみることができそうである。

以上から、12世紀に西宮神社南側の市庭において町屋が形成され、13世紀後半ごろから砂堆地形に沿って町屋が東側に拡大していったのではないかと推定しておきたい。そして、少なくとも14世紀前半までは市庭周辺が西宮の町の中心核となったといえそうである。

なお、R10～E10間北管路のR10柵南9m地点(SK15周辺)において、中世包含層とされる第5層黒褐色土層から検出された試料2点について、AMS法による放射性炭素年代測定を行った。この結果試料1からは14世紀前半～15世紀前半、試料2(フネガイ科の貝)からは13世紀末～15世紀初頭の年代をえることができた。これによって当該地周辺の開発が13～14世紀頃から始まったという調査成果を、科学

的にも検証できることがわかった。

### 3. 中世後半（15・16世紀）

この時期は遺物が出土したのみである。上層の地形改変や土地利用の問題なども加えつつ検討しなければならないが、現段階の情報では詳細を明らかにすることは困難である。

### 4. 江戸時代後半

この時期は北側T8～E10間管路を中心に多くの陶磁器が出土した。これらの遺物群は砂堆北側の斜面地に投棄されたものと考えられる。

18世紀初頭の江戸中期の「西宮町濱地圖」（貞享元年・吉井良秀「老の思い出」付図）によれば本町筋の北側は2区画まで町屋が描かれ、その背後は耕作地となっている。ただし街路は本町筋と北側の馬場町の通りが本町筋と並行して通るのみである。このため、町は本町筋と北側の馬場町の通りに面する2本の通りの範囲までと考えられる。ただし、馬場町では通りに空白地が多く、屋敷の裏地の幅も狭いようである。本町通りに比べると立地の影響もあるためか閑散とした印象となっている。

ただ、町屋が広がる範囲は今回の調査地の北側にまで及んでおり、砂堆北側の斜面を越えて、後背地まで広がる。おそらく北側の通りは本町筋の町屋に比べて悪条件であり、屋敷地も小区画であったと推測されるので、本町筋に比べると後発の町であったのだろう。陶磁器の廃棄状況も砂堆北斜面から南側に多くの遺物が集中する傾向があり、2つの通りの間では町屋に格差が見られたと考えられる。このため投棄された陶磁器の廃棄の主体は本町通りの屋敷地と推定される。

一方、出土した遺物は日常雑器に限られており、ここからはごく平均的な町屋の姿が垣間見えるのみである。ただ、今回の資料はごく限られた地点の遺物群であるので、本町の町屋の具体的な様相についての検討は資料の蓄積を待つことにしたい。

### 5. 近代

この時期はタイル・煉瓦・碇子・ガラスなどについて特に詳述した。それによれば西宮の町にも明治末頃から、近代建築の潮流が見られたようである。

煉瓦はすべて「手抜き技法」で、明治時代中頃～昭和30年代の製品であるが、その製法や組み上げられた仕上げ状況から見ると個人住宅に伴う花壇や塀などの外構施設に用いられたものと推測される。

タイルは明治時代後半～昭和30年頃のものが含まれ、製法別には3点の「湿式タイル」と多数の「乾式タイル」がある。用途別には「床タイル」・「内装タイル」・「外装タイル」・「モザイクタイル」などのものも含まれる。このうち床タイルは庭園の飛び石が配置された箇所などに使用された可能性がある。このようにさまざまな場所にタイルが使用されていたようだ。

碇子は「ノップ碇子」と「クリート碇子」が出土した。これらは小規模建築つまり一般家屋などの内部配線に使用されるもので、戦前から昭和30年ごろまで製造されている。以上のとおり、近代化の波に乗って本町筋周辺でも煉瓦・タイルが早くから導入され町の景観を飾ったと思われる。

また、近代の調査成果として重要なことはT8～E10柵地点において表土層近くに戦時中の戦災の片付け層が検出された点がある。これらは焼失した瓦礫を土砂とともに片付けたもので、空襲被災の現実を今日に語り継いでくれる重要な成果となった。

付

論



# 西宮神社社頭遺跡から出土した動物遺存体

丸山真史（奈良文化財研究所・客員研究員）

## 1) 概要

西宮は酒造業が栄えた町であり、酒造りに適した宮水は、地下に埋もれた貝層による産物と言われていた。この仮説は後述のように否定されているが、注目されるのは地下にある貝層が古くから知られていたということである。この貝層について、今回の立会調査で貝層あるいは貝殻集積土坑が散在することによって裏付けられる。報告する資料は、重機掘削中に保存状態の良い貝類遺存体を採集しており、土壌の篩がけは行っていない。種類の同定および集計を行った貝類は、中世から近世、現代のものであり、殻頂あるいは主歯付近が保存されているものに限定した。その結果、貝類遺存体は個体数にして総数405点を数え、巻貝が14点、二枚貝が391点にのぼる。これらの貝類に加えて、T8区南側で昭和期のスッポンの背甲板が1点出土している。

## 2) 種類別の特徴

出土した貝類は食用になるものばかりで、アカガイが271点（左127右144）と最多の出土量を示す。完形品が少ないため、殻高、殻長以外に主歯長を大きさの目安として計測した（第1図）。全体では主歯長が30~40mm程度のアカガイに集中しており、中世より近世の方がやや大きな個体が多い（第2図）。SK10、SK12、SK17、SK19では、アカガイのみが出土していることが特徴的である。アカガイに次いでトリガイが104点（左44右56不明4）出土している。トリガイは大部分が破損しており、計測できたものは6点で殻高80mm内外を測る。これら2種に続いてアカニシが9点、フネガイ科（左3不明4）、ハマグリ（左5右2不明1）が7点ずつ、バイ2点、アワビ類、サザエ、ツメタガイ、サトウガイ（左）が1点ずつ出土している。アカニシは大部分が殻長100mmより大きく、50mm程度の小さな個体も1点含まれる。大

軟体動物門 Mollusca	斧足綱 Bivalvia
腹足綱 Gastropoda	フネガイ目 Arcoida
古腹足目 Vetigastropoda	フネガイ科 Arcidae
ミミガイ科 Hiliotidae	アカガイ <i>Scapharaca broughtonii</i>
ミミガイ科の一種	サトウガイ <i>Scapharca satowi</i>
Haliotidae gen. et sp. indet.	マルスダレガイ目 Veneroida
サザエ科 Turbnidae	ザルガイ科 Cardiidae
サザエ <i>Turbo cornutus</i>	トリガイ <i>Fulvia mutica</i>
盤足目 Discopoda	マルスダレガイ科 Veneridae
タマガイ科 Naticidae	ハマグリ <i>Meretrix lusoria</i>
ツメタガイ <i>Glossailax didyma</i>	脊椎動物門 Vertebrata
新腹足目 Neogastropoda	爬虫綱 Reptilia
アッキガイ科 Muricidae	カメ目 Testudines
アカニシ <i>Rapana venosa</i>	スッポン科 Trionychidae
エゾバイ科 Buccinidae	スッポン <i>Pelodiscus sinensis</i>
バイ <i>Balytonia japonica</i>	

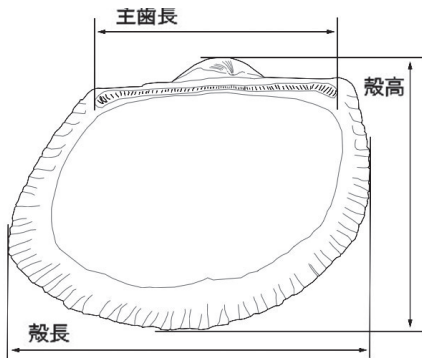
第1表 種名表

きさは、ハマグリが殻高50mm内外、バイが殻長66mm程度、ツメタガイが殻長50mm弱、サザエが88mm程度、サトウガイが殻高45mm程度を測る。アワビ類は計測できないが、比較的大きな個体である。

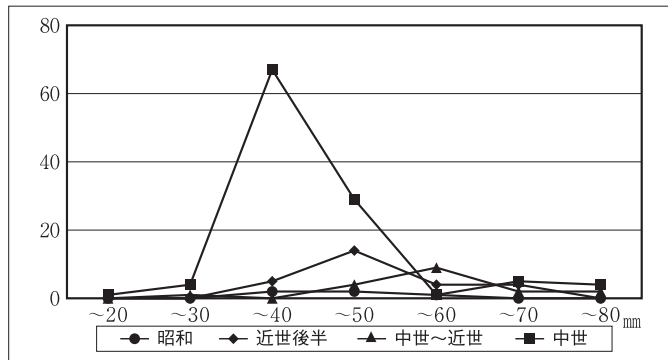
スッポンは、腹甲板（中腹骨板・右）が1点出土し、骨幹部が切断されており、鋭い刃物傷も見られることから、食用にするため解体したと思われる。

### 3) 貝類利用の特徴

近世の西宮における酒造業を支えたのが、酒造りに用いられた宮水である。この宮水が湧水する地域



第1図 アカガイ計測部位



第2図 アカガイ殻高分布

時期	遺構名	腹 足 綱					斧 足 綱							計				
		アワビ類	サザエ	ツメタガイ	アカニシ	バイ	アカガイ		サトウガイ	フネガイ科		トリガイ			ハマグリ			
							左	右		—	左	—	左		右	—	左	右
中世	P4									1					2	1	4	
	P17						3	1					1				5	
	SK9				2		3	2									7	
	SK15				2		2	1			2						7	
	SK16									1					1	1	1	4
	SK17						43	48									91	
	SK18						5	4			1						10	
	SK19						22	23									45	
	SK20												3	5			8	
	SK21				1		6	8			1		2	20	29			67
	*						17	13						2	2			34
中世～近世	貝層1						8	8						12	13			41
	貝層2	1		1	1		4	10					1	1	6		1	26
近世後半	SK10						4	5										9
	SK11						5	9					1					15
	SK12						1	9										10
近代	*				1													1
昭和	貝層2					1	4	2						4				11
	*		1		2	1		1	1	1				1	1		1	10
総 計		1	1	1	9	2	271		1		7		104		8			405

「\*」は遺物包含層

第2表 貝類集計表

と、その地下にある貝層の分布が一致することから、この貝層の影響を受けた地下水が宮水になると考えられていた。実際には宮水の湧水点は貝層よりさらに下層であることから、この説は否定されている(魚澄編1959)。この貝層が純トリガイ層であると報告されているのだが、当遺跡ではアカガイを主体としており、トリガイだけの貝層や遺構はない。

一般的に中・近世の都市遺跡では、巻貝ではアワビ類、サザエ、アカニシ、二枚貝ではハマグリ、シジミ、アカガイ・イタボガキ科などを中心として、特定の貝種に集中することは稀である。出土資料には岩礁性のアワビ類やサザエが含まれており、これらは他所からの搬入品と考えられるが、その他は西宮で捕採されたものである。当資料が調査時に選択的に採集した資料であるにしても、アカガイとトリガイが貝類の92.5%を占めており、当地ではこれら2種の利用が盛んであったと言える。特にトリガイの殻が薄く破損しやすいことを考慮すれば、殻の分厚いハマグリやサザエと比べて保存状態は良くなかったと思われ、出土量の多さはトリガイの廃棄量の多さをものがたっているよう。

アカガイは、近世の京都、大阪の屋敷地などの消費地遺跡で一般的に出土し、『毛吹草』には兵庫の名産物として記される(竹内校訂1943)。一方、トリガイは京都、大阪の近世の消費地遺跡ではほとんど出土しない。トリガイのまとまった出土例は、神戸市兵庫津遺跡第14次調査、大阪市堂島蔵屋敷跡DJ08-2次調査などに見られ、それぞれ100個体以上のトリガイが出土しており、水揚げ地において剥き身が製造された、あるいは自家消費されたと考えられている(丸山・松井2010、池田2010)。『和漢三才図会』に「鳥蛤」としてトリガイについて「然撰州尼崎多之冬春盛出他国未聞有漁人去殻販之」と記載され(和漢三才圖會刊行委員会1970)、「撰州の尼崎では冬から春に盛んに捕られ、他国にあるのを聞いたことがなく、漁人は殻を取り去って販売する」と解釈される。『教言卿記』(応永12~17年)によると、京都の公家である山科家では赤貝などの海産物を西宮で入手しているという(澁谷2010)。今回の調査では、中世のアカガイとトリガイの出土量が多く、中世の西宮ではアカガイ、トリガイを盛んに捕採し、剥き身などを販売していたことも想定される。

#### 4) まとめ

今回の立会調査では、貝層あるいは遺構に堆積した貝類のうち保存状態の良い資料を採集したものであるが、アカガイとトリガイを主体とする貝種構成は、西宮に隣接する尼崎や兵庫がアカガイやトリガイの産地であることと矛盾せず、西宮でも両種を豊富に捕採することができたと思われる。また、『教言卿記』に見られる西宮での赤貝の入手とも合致しており、当地におけるアカガイやトリガイの剥き身製造や販売が想定される。さらに当地一帯の詳細な貝類利用、あるいは水産物利用を議論するには、今後、阪神間沿岸部における発掘調査において、悉皆あるいは定量的に採集された動物遺存体の蓄積が必要であろう。

謝辞：『教言卿記』に関する記述について、澁谷一成氏(堺市博物館)、橋本道範(琵琶湖博物館)からのご教示を頂きました。末筆ではありますが、感謝申し上げます。

(参考文献)

池田研2010「堂島蔵屋敷跡B地点（DJ08-2次）調査出土の貝類について」『堂島蔵屋敷跡Ⅲ』（財）大阪市文化財協会pp.78-86

魚澄惣五郎編1959「宮水の成因」『西宮市史』第1巻 西宮市役所pp.83-109

澁谷一成2010「山科家の日記から見た十五世紀の魚貝類の供給・消費」『日本中世魚貝類消費の研究—十五世紀山科家の日記から—』琵琶湖博物館研究調査報告25号 琵琶湖博物館pp.17-72

竹内若校訂1943『毛吹草』新村出校閲 岩波書店

丸山真史・松井章2010「兵庫津遺跡第14次調査出土の動物遺存体」『兵庫津遺跡発掘調査報告書第14・20・21次調査』第1分冊 神戸市教育委員会 pp.353-386

和漢三才圖會刊行委員会1970『和漢三才圖會』上 東京美術

写真解説

第4図 1～3 アカニシ 4 ツメタガイ 5 アワビ類

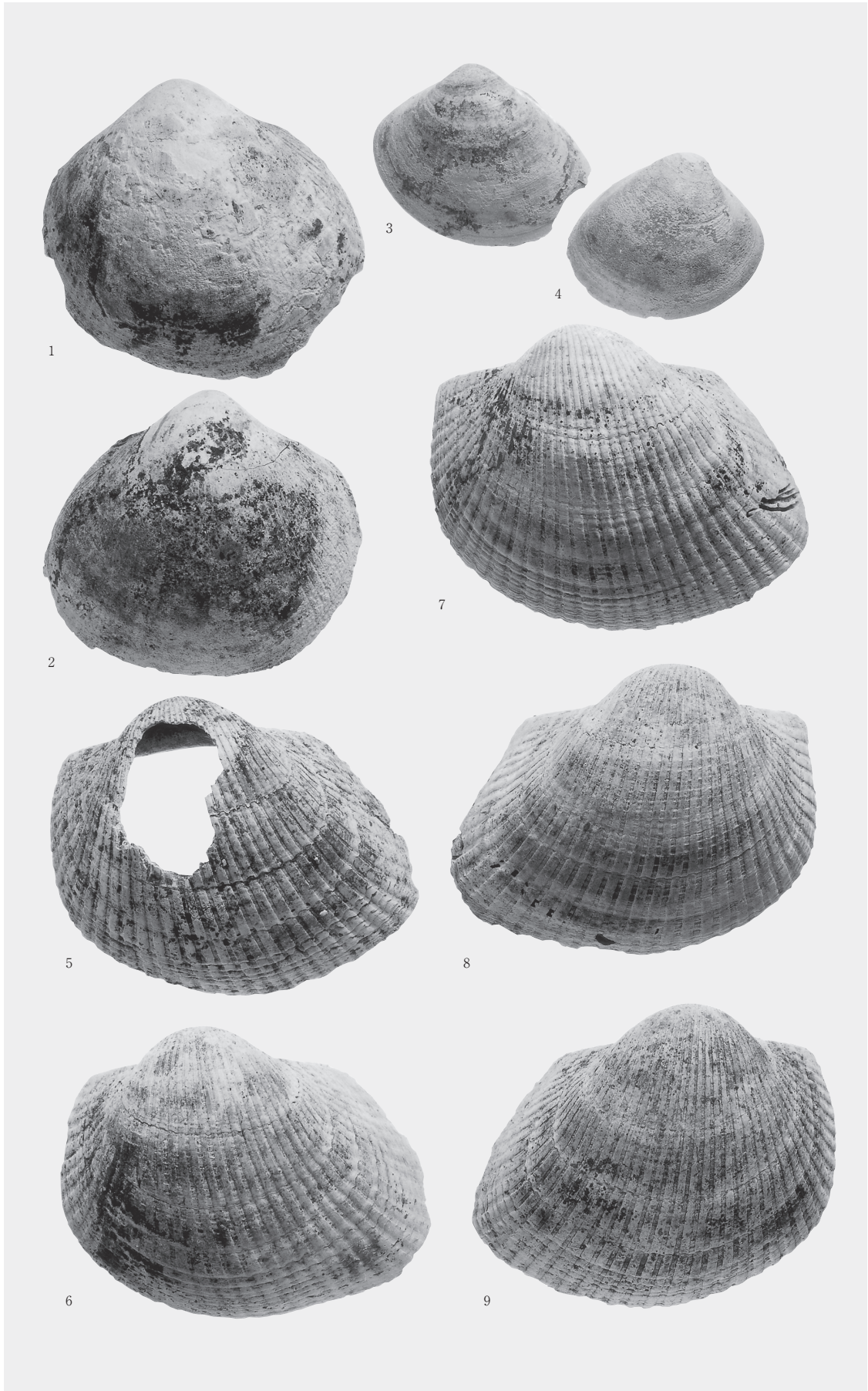
第5図 1・2 トリガイ 3・4 ハマグリ 5～9 アカガイ



第3図 SK21貝出土状況（E11上層・西から）



第4図 腹足綱



第5図 斧足綱

# 写真凶版



①西宮神社本殿（南東から）



②南宮社（北から）



③表大門（通称赤門・東から）



④南門（南から）



⑤東練堀・南門東側（南から）



⑥大練堀・表大門北側（北東から）



⑦神社南辺の風景（西から）



⑧西宮成田山（東南から）





①調査地全景（南から）



②表大門から本町筋を望む



③調査区遠景（北から）



④調査地南側（北から）



⑤東側調査区R10柵付近（北から）



⑥本町筋（西から）



⑦西側調査区全景（北から）



⑧T8南街灯付近（北から）